

城山遺跡第 64 地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 1 3

埼玉県志木市教育委員会

志木市の文化財 第53集

城山遺跡第 64 地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 1 3

埼玉県志木市教育委員会

はじめに

志木市教育委員会
教育長 尾崎 健市

ここに刊行する『城山遺跡第 64 地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』は、平成 21 年度に受託事業として、教育委員会が発掘調査を実施した成果をまとめたものです。

城山遺跡については、今までの調査成果から、旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世・近世、近代までの幅広い時代にわたる複合遺跡であることが判明しています。

遺跡内には、平成 2（1990）年度に市指定文化財に指定された「城山貝塚」、大石信濃守の居城跡と考えられる「柏の城」が存在し、さらに近年では、日本最古の土器群に位置付けられる「爪形文系土器」が発見されるなど、注目を浴びています。

さて、今回報告する第 64 地点の調査内容ですが、調査面積 100㎡足らずの狭小な面積の中で、縄文時代の土坑 1 基、古墳時代中・後期の住居跡 6 軒、平安時代の土坑 2 基、中世以降の土坑 2 基などが密集して検出されました。

特に、今回の調査では、古墳時代中・後期の住居跡が調査区内に全面広がって検出されており、中でも 7 世紀中頃の 256 号住居跡については、火災を受けた焼失住居と考えられます。この住居跡からは、焼け残って炭化した木材やオニグルミ・モモ・ウメなどの種子、そして多くの土器がまとまって出土しており、大変貴重な資料となりました。

城山遺跡は、多岐にわたり豊富な資料を出土しておりますが、古墳時代に関しては、県内でも最大級の集落であることが知られています。今回の資料が、今後の志木市の歴史を追究する上で欠かせない貴重な資料になったことで、幅広い学術研究に役立てられることを切に願うものです。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、格別のご理解とご協力を頂いた事業主体者、そして深いご理解とご協力を賜りました地元の多くの方々並びに関係者に対し、心から感謝申し上げます。次第です。

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市に所在する遺跡群の平成21年度に発掘調査を実施した城山遺跡第64地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び整理作業は、志木市教育委員会の受託事業として、開発主体者の株式会社東栄住宅（代表取締役社長 西野 弘）から委託を受け実施した。
3. 本書の作成において、編集は尾形則敏が行い、執筆は下記以外を尾形則敏が行った。なお、中世以降の遺物については、朝霞市教育委員会の野澤 均氏にご教示を頂いた。
深井恵子 第3章第2・3節の遺構
青木 修 第3章第1節、第4節（2）縄文時代の土器
4. 遺物の実測は、星野恵美子・松浦恵子・鈴木浩子が行った。遺構・遺物のデジタルトレースは深井恵子・青木 修が行った。写真撮影は青木 修が行った。
5. 本地点から出土した石器の実測及び観察表の作成等は、(有) アルケーリサーチに依頼した。
6. 発掘作業における表土剥ぎ作業については、株式会社大塚屋商店に委託した。
7. 自然科学分析については、株式会社パレオ・ラボに委託した。
8. 本報告に係る出土品及び記録図面・写真等は、志木市立埋蔵文化財保管センターに一括して保管している。

9. 調査組織

調査主体者	志木市教育委員会
教 育 長	白砂正明（平成20年4月～平成24年6月）
〃	尾崎健市（平成24年7月～）
教育政策部長	山中政市（平成21年4月～平成23年3月）
〃	丸山秀幸（平成24年4月～9月）
教育政策部次長	丸山秀幸（平成23年4月～平成24年3月）
〃	菊原龍治（平成24年4月～10月）
生涯学習課長	土岐隆一（平成21年4月～平成24年3月）
〃	谷口 敬（平成24年4月～）
生涯学習課副課長	松井俊之（平成24年4月～）
生涯学習課主幹	大熊克之（平成19年12月～平成22年12月）
〃	松井俊之（平成23年1月～平成24年3月）
生涯学習課主査	尾形則敏（平成21年4月～）
生涯学習課主任	尾形則敏（～平成21年3月）
〃	松永真知子（平成18年4月～）
生涯学習課主事	徳留彰紀（平成22年4月～）
生涯学習課主事補	徳留彰紀（平成21年4月～平成22年3月）
〃	大久保 聡（平成24年4月～）

志木市文化財保護審議会 神山健吉（会長）（昭和54年4月～平成24年3月）
井上國夫（会長）（平成24年4月～）
井上國夫（委員）（昭和55年4月～平成24年3月）
高橋長次（委員）（昭和63年4月～）
高橋 豊（委員）（平成8年4月～）
内田正子（委員）（平成10年4月～平成24年3月）
上野守嘉（委員）（平成24年4月～）
深瀬 克（委員）（平成24年4月～）

10. 発掘調査及び整理作業参加者

○発掘調査

調査担当者 尾形則敏・徳留彰紀
調査員 深井恵子
調査補助員 青木 修・宮川幸佳
発掘協力員 鈴木浩子・高杉朝子・星野恵美子・松浦恵子・増田千春・
成田しのぶ・二階堂美知子
重機オペレータ 田中三二（株式会社大塚屋商店）

○整理作業

調査員 深井恵子・青木 修
調査補助員 星野恵美子・鈴木浩子
整理協力員 石川 蒼・江口美千子・大橋康弘・佐藤 海・中川幹啓・
林ゆき子・一二三英文・廣野 渡・増田千春・松浦恵子・
村田浩美

11. 各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課・（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団・朝霞市教育委員会・朝霞市博物館・新座市教育委員会・和光市教育委員会・富士見市教育委員会・富士見市立水子貝塚資料館

江原 順・加藤秀之・川畑隼人・隈本健介・小出輝雄・斉藤 純・齋藤欣延・
斯波 治・鈴木一郎・照林敏郎・中岡貴裕・野沢 均・早坂廣人・堀 善之・
前田秀則・松本富雄・柳井章宏・山本 龍・和田晋治・渡辺邦仁

12. 本報告に係る文化財保護法に基づく各種届出等及び指示通知については、下記の通りである。

○周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）

平成22年3月2日付け 教生文第5－1178号

○埋蔵物の文化財認定について

平成22年8月24日付け 教生文第7－70号

凡 例

1. 本報告書で使用了地図は以下のとおりである。

第1図 1：10,000「志木市全図」アジア航測株式会社調製

第2図・第21図 1：2,500 ゼンリン電子住宅地図 デジタウン「埼玉県志木市」平成15年8月発行 株式会社ゼンリン

2. 挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。

3. 遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。

4. ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また、同一遺構内にあるピットでも、おそらく後世のピットと思われるものには、数値を省略した。

5. 遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示すが、遺物が密集する場合は個体別にドットマークを換えて表示した。番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。

6. 挿図版中のスクリーントーンについては、各挿図版内に内容を示した。ただし、表示の無いものは、遺構挿図版中ではカマド範囲、遺物挿図版中では土器の赤彩範囲を示す。

7. 今回報告の縄文時代の土器に用いた色調の表示は、『新版 標準土色帖 1999年版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を基にし、近似する色名を示した。

8. 遺構の略記号は、以下のとおりである。

H = 古墳時代中・後期の住居跡 D = 土坑 P = ピット

目 次

はじめに

例 言／凡 例／目 次／挿図目次／表 目 次／図版目次

第1章 遺跡の立地と環境	1
第1節 市域の地形と遺跡	1
第2節 遺跡の概要	7
第2章 発掘調査の概要	10
第1節 調査に至る経緯	10
第2節 調査方法と経過	11
第3節 住宅建設部分の取り扱いについて	13
第3章 検出された遺構・遺物	14
第1節 縄文時代	14
第2節 古墳時代・平安時代	14
第3節 中世以降	47
第4節 遺構外出土遺物	48
第4章 調査のまとめ	66
付編 自然科学分析	71
I. 城山遺跡第64地点から出土した炭化種実	73
II. 城山遺跡第64地点出土炭化材の樹種同定	76

図 版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	市域の地形と遺跡分布 (1/20,000)	2
第2図	城山遺跡の調査地点 (1/3,000)	8
第3図	確認調査時の遺構分布 (1/200)	12
第4図	遺構分布図 (1/200)	12
第5図	810号土坑 (1/60)	14
第6図	246号住居跡 (1/60)	16
第7図	246号住居跡遺物出土状態 (1/60)	17
第8図	246号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	18
第9図	255号住居跡・遺物出土状態、700号土坑 (1/60)	20
第10図	255号住居跡カマド (1/30)	21
第11図	255号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	22
第12図	256号住居跡 (1/60)	23
第13図	256号住居跡炭化材・遺物出土状態 (1/60)	24
第14図	256号住居跡遺物出土状態 1 (1/40)	25
第15図	256号住居跡遺物出土状態 2 (1/40)	26
第16図	256号住居跡遺物出土状態 3 (1/40)	27
第17図	256号住居跡出土遺物 1 (1/4)	28
第18図	256号住居跡出土遺物 2 (1/4)	29
第19図	256号住居跡出土遺物 3 (1/4)	30
第20図	256号住居跡出土遺物 4 (1/4)	31
第21図	256号住居跡出土遺物 5 (1/4)	32
第22図	256号住居跡出土遺物 6 (1/4)	33
第23図	256号住居跡出土遺物 7 (1/4)	34
第24図	256号住居跡出土遺物 8 (1/4・1/3)	35
第25図	257号住居跡・炭化材出土状態 (1/60)	38・39
第26図	257号住居跡遺物出土状態 1 (1/60)	40
第27図	257号住居跡遺物出土状態 2 (1/60)	41
第28図	257号住居跡出土遺物 1 (1/4)	42
第29図	257号住居跡出土遺物 2 (1/4)	43
第30図	258号住居跡・遺物出土状態 (1/60)	44
第31図	258号住居跡出土遺物 (1/4)	44
第32図	259号住居跡・遺物出土状態 (1/60)	45
第33図	259号住居跡出土遺物 (1/4)	45
第34図	698号土坑 (1/60)	46
第35図	701号土坑・出土遺物 (1/60・1/4)	46
第36図	699号土坑 (1/60)	47
第37図	遺構外出土遺物 1 (1/3)	49
第38図	遺構外出土遺物 2 (1/4)	50

目 次

第1表	志木市埋蔵文化財包蔵地一覧	1
第2表	城山遺跡第64地点の発掘調査工程表	11
第3表	246号住居跡出土土器一覧(1)	51
	246号住居跡出土土器一覧(2)	52
第4表	255号住居跡出土土器一覧(1)	52
	255号住居跡出土土器一覧(2)	53
第5表	256号住居跡出土土器一覧(1)	53
	256号住居跡出土土器一覧(2)	54
	256号住居跡出土土器一覧(3)	55
	256号住居跡出土土器一覧(4)	56
	256号住居跡出土土器一覧(5)	57
	256号住居跡出土土器一覧(6)	58
第6表	257号住居跡出土土器一覧(1)	58
	257号住居跡出土土器一覧(2)	59
	257号住居跡出土土器一覧(3)	60
	257号住居跡出土土器一覧(4)	61
第7表	258号住居跡出土土器一覧(1)	61
	258号住居跡出土土器一覧(2)	62
第8表	259号住居跡出土土器一覧	62
第9表	698号土坑出土土器一覧	62
第10表	701号土坑出土土器一覧	63
第11表	住居跡出土の土製品一覧	63
第12表	住居跡出土の石製品一覧	63
第13表	住居跡出土の鉄製品一覧	63
第14表	遺構外出土の縄文時代の石器一覧	64
第15表	遺構外出土の縄文土器一覧	64
第16表	遺構外出土の古墳時代後期の土器一覧	65
第17表	遺構外出土の陶磁器・土器一覧	65
第18表	城山遺跡第64地点から出土した炭化種実	73
第19表	256号住居跡から出土した炭化種実一覧	75
第20表	城山遺跡第64地点出土炭化材の樹種同定結果	76
第21表	城山遺跡第64地点出土炭化材の樹種同定結果一覧	77

図版目次

- 図版1 1. 調査区近景 2. 表土剥ぎ風景 3. 調査区整備風景 4. 810号土坑
5・6. 246号住居跡 7. 246号住居跡被熱赤化範囲 8. 246号住居跡(第62地点)
- 図版2 1～3. 255号住居跡遺物出土状態 4. 255号住居跡貯蔵穴遺物出土状態
5. 255号住居跡カマド付近 6. 255号住居跡貯蔵穴 7. 255号住居跡カマド
8. 255号住居跡
- 図版3 1・2. 256号住居跡遺物出土状態(上層) 3～5. 256号住居跡遺物出土状態
6. 256号住居跡貯蔵穴付近遺物出土状態 7. 256号住居跡炭化材出土状態
8. 256号住居跡貯蔵穴遺物出土状態
- 図版4 1. 256号住居跡貯蔵穴 2. 256号住居跡入口梯子穴 3・4. 256号住居跡
5・6. 257号住居跡遺物出土状態 7. 257号住居跡炭化材出土状態
8. 257号住居跡貯蔵穴遺物出土状態
- 図版5 1. 257号住居跡入口梯子穴 2. 257号住居跡貯蔵穴 3・4. 257号住居跡
5・6. 258号住居跡遺物出土状態 7. 258号住居跡貯蔵穴遺物出土状態
8. 258号住居跡
- 図版6 1・2. 259号住居跡 3・4. 調査風景 5. 698号土坑 6. 701号土坑
7. 699号土坑 8. 700号土坑
- 図版7 246号住居跡出土遺物
- 図版8 255号住居跡出土遺物
- 図版9 256号住居跡出土遺物1
- 図版10 256号住居跡出土遺物2
- 図版11 256号住居跡出土遺物3
- 図版12 256号住居跡出土遺物4
- 図版13 256号住居跡出土遺物5
- 図版14 256号住居跡出土遺物6
- 図版15 256号住居跡出土遺物7
- 図版16 256号住居跡出土遺物8
- 図版17 257号住居跡出土遺物1
- 図版18 257号住居跡出土遺物2
- 図版19 1. 258号住居跡出土遺物 2. 259号住居跡出土遺物 3. 698号土坑出土遺物
4. 701号土坑出土遺物
- 図版20 遺構外出土遺物1
- 図版21 1. 遺構外出土遺物2 2. 城山遺跡第64地点から出土した炭化種実
- 図版22 城山遺跡第64地点出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

第1章 遺跡の立地と環境

第1節 市域の地形と遺跡

(1) 地理的環境と遺跡分布

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71km、東西4.73kmの広がりを持ち、面積は9.06km²、人口約7万2千人の自然と文化の調和する都市である。

地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が拡がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の3本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、市内遺跡の大部分は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に分布している。遺跡は柳瀬川上流から順に、西原大塚遺跡（7）、新邸遺跡（8）、中道遺跡（5）、城山遺跡（3）、中野遺跡（2）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）

No.	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2	中野	63,370㎡	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城山	79,280㎡	畑・宅地	城館跡・集落跡	旧石器、縄（草創～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、土坑墓、地下室、井戸跡、溝跡、柏城跡関連、鑄造関連等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、土師質土器、古銭、鑄造関連遺物等
5	中道	50,500㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（早～後）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、土坑墓、地下式坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、人骨等
6	塚の山古墳	800㎡	林	古墳？	古墳？	古墳？	なし
7	西原大塚	163,930㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（前～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭等
8	新邸	20,080㎡	畑・宅地	貝塚・集落跡・墓跡	縄（早～中）、古（前～後）、中・近世、近代	貝塚、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ピット群等	石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9	城山貝塚	900㎡	林	貝塚	縄（前）	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10	田子山	65,000㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	縄（草創～晩）、弥（後）、古（後）、奈・平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形・円形周溝墓、ローム採掘遺構、溝跡等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11	富士前	7,100㎡	宅地	集落跡	弥（後）～古（前）	住居跡	弥生土器、土師器
12	馬場	2,800㎡	畑	集落跡	古（前）	住居跡？	土師器
13	関根兵庫館跡	4,900㎡	グラウンド	館跡	中世	不明	なし
14	宿	7,700㎡	田	館跡	中世	溝跡・井桁状構築物	木・石製品
15	市場裏	13,800㎡	宅地	集落跡・墓跡	弥（後）～古（前）、中世以降	住居跡・方形周溝墓・土坑	弥生土器、土師器、土師質土器
16	大原	1,700㎡	宅地	不明	近世以降？	溝跡	なし
合計		481,860㎡					

平成24年12月28日現在

第1表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覧



第1図 市域の地形と遺跡分布 (1/20,000)

平成24年12月28日現在

と名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）のように自然堤防上に存在する遺跡も明らかにされつつあり、将来的には新たな遺跡が相次いで発見される可能性がある。なお、現在市内の遺跡総数は、前述した12遺跡に塚の山古墳（6）、城山貝塚（9）を加えた14遺跡である（第1図）。

（2）歴史的環境

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

1. 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、柳瀬川右岸の中野・城山・中道・西原大塚遺跡で確認されている。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の富士見・大原線（現ユリノキ通り）の工事に伴う発掘調査により、立川ローム層のⅣ層上部・Ⅵ層・Ⅶ層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

西原大塚遺跡では、西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査により、石器集中地点が検出されている。石器集中地点は、平成6（1994）年度には2ヶ所、平成7年（1995）度には1ヶ所が検出され、ナイフ形石器・剥片などが発見されている。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からも立川ローム層の第Ⅳ層下部から、黒曜石・頁岩の石核・剥片が約60点出土している。

平成13（2001）年に発掘調査が実施された城山遺跡第42地点では、立川ローム層の第Ⅳ層上部と第Ⅶ層の2ヶ所で石器集中地点が確認され、黒曜石・安山岩・チャート・頁岩などの挟入石器・剥片など32点が出土している。

平成20・21（2009・2010）年度にかけては、城山遺跡第62地点の発掘調査が実施され、1ヶ所の石器ブロックが検出されている。

平成22（2010）年3月～5月にかけて発掘調査が実施された城山遺跡第63地点では、5ヶ所の試掘坑を設定し調査を実施したところ、立川ローム層の第Ⅵ層を中心とする3ヶ所の石器集中地点が確認され、黒曜石の二次加工剥片・石核などが20点ほど出土している。

2. 縄文時代

縄文時代では、西原大塚遺跡を中心に中期後葉の遺跡が集中し、城山貝塚の周辺の城山遺跡からは、前期末葉（諸磯式期）の住居跡や土器がやや多く検出される傾向にある。

ここでは、時代の推移に従って説明することにする。まず、草創期では、平成4（1992）年に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器1点、平成6（1994）年に発掘調査が実施された城山遺跡第21地点から多縄文系土器3点、第22地点から爪形文系土器1点、平成10（1998）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器1点が出土している。

早期では、遺構の検出例はまだ少ないが、住居跡として、平成18（2007）年に発掘調査が実施された中道遺跡第65地点で検出された前期末葉（条痕文系）の10号住居跡1軒が最古のものと言える。土器としては、田子山遺跡で撚糸文・沈線文・条痕文系土器が出土しているが、御嶽神社を中心とする東側でやや多く出土する傾向がある。また、富士前・新邸・城山遺跡からは、撚糸文系土器が数点出土

し、条痕文系土器は、中野・田子山遺跡では炉穴に伴い出土している。

前期では、西原大塚・新邸遺跡で黒浜式期、城山遺跡では諸磯式期の住居跡が検出されている。そのうち、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。また、平成2年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

中期になると遺跡が最も増加する。特に、中期中葉から後葉の勝坂式～加曾利E式期にはその傾向が強くなり、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で住居跡を中心に土坑が検出されている。特に西原大塚遺跡では、現時点で約180軒の住居跡が環状に配置していることが判明しつつある。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡が1軒確認されるのみである。

後期では、西原大塚遺跡から堀之内式期の住居跡1軒と加曾利B式期の住居跡1軒、遺物集中地点1ヶ所が検出されている。また、その他の遺構としては、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点で、土坑1基が検出され、下層から称名寺I式期の土器、上層からII式の特徴をもつ土器が出土している。西原大塚遺跡第54地点でも2基の土坑が検出されている。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行ⅢC式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では弥生時代後期まで空白の時代となる。

3. 弥生時代～古墳時代前期

弥生時代では、現時点において、前・中期の遺跡は検出されていないが、後期末葉から古墳時代前期と考えられる遺跡が数多く検出されている。中でも、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・マメなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、『志木市史』にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が約600軒確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。

昭和62（1987）年以降、西原大塚・田子山・市場裏遺跡の3遺跡において、方形周溝墓が検出されてきたが、最新では、平成15（2003）年に発掘調査が実施された新邸遺跡第8地点と平成18（2006）年に実施された中道遺跡第65地点でも、それぞれ1基が確認されている。これにより当時の墓域が、集落と単位的なまとまりをもって存在することが明らかになってきたと言えるであろう。

市内で最も多く方形周溝墓が検出されている西原大塚遺跡では、10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に畿内系の庄内式の長脚高環が出土していることに注目される。また、平成11（1999）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第45地点では、一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が発見されている。この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土器をはじめ、畿内系の有段口縁壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺が出土している。こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

4. 古墳時代中・後期

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する傾向にある。その中で、西原大塚遺跡に隣接する新邸遺跡で検出されている第2地点の1号住居跡と平成15（2003）年に発掘調査が実施された第8地点の2～8号住居跡は、古墳時代前期でも比較的新しい段階に比定される可能性がある。このことから、新邸遺跡で検出された住居跡は、隣接する西原大塚遺跡から継続して広がった集落跡ではないかと推測される。

中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。その中でも、平成7（1995）年に発掘調査が実施された中道遺跡第37地点19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、カマドをもつ住居跡としては市内最古のものである。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に7世紀前半から中葉にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、7世紀前半以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

なお、新邸遺跡では第8地点で初めて古墳時代後期（7世紀中葉）の住居跡が1軒検出されている。この住居跡は、3×3.5mの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、5世紀後半から7世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で200軒を越え、次いで中野遺跡で約50軒、中道遺跡で約15軒、田子山遺跡で約10軒、新邸遺跡で1軒を数える。

住居跡以外では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第24地点から、6世紀後半以降のものと考えられる4.1×4.7mの不整円形で2ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されている。

また、平成14（2002）年に発掘調査された田子山遺跡第81地点の調査を契機に御嶽神社を取り囲むように外周で推定約33mの巨大な溝跡の存在が明らかになり、現時点では古墳の周溝ではないかと考えられている。

5. 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、現在のところ、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で検出されている。中でも城山・田子山遺跡はこの時代を代表とする遺跡として挙げることができる。城山遺跡では、平成8（1996）年に発掘調査が実施された第35地点の128号住居跡から、印面に「富」1文字が書かれた完形品の銅印が出土しているが、これは県内でも稀少な例で貴重な資料である。この住居跡からはその他、須恵器坏や猿投産の緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。最新では、平成20～21（2008～2009）年の城山遺跡第62地点の調査により、平安時代の住居跡から皇朝十二銭の一つである「富壽神寶」^{ふじゆしんぼう}が2枚出土しており、県内でも重要な発見につながっている。

田子山遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された第24地点から、住居跡の他、掘立柱建築遺構・溝跡そして100基を越える土坑群が検出されている。平成6（1994）年に発掘調査が実施された第31地点の44号住居跡からは、腰帯の一部である銅製の丸鞆が出土している。さらにカマド右横

の床面上からは、東金子窯跡群の前内出製品と鳩山製品の須恵器坏が1点ずつ出土し、土器編年の基本資料として貴重であると言える。

6. 中・近世

中・近世の遺跡は、「柏の城」を有する城山遺跡と千手堂関連である新邸・中道遺跡、そして関根兵庫館跡・宿遺跡が代表される遺跡と言える。

城山遺跡では、数次にわたる発掘調査により、『たてむらきゆうき館村旧記』(註1)にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。最新では、『かいこくざつ き廻国雑記』(註2)に登場する「おおいしなののかみのやかた大石信濃守館」が「柏の城」に相当し、「おおつかじゆうぎよくぼう大塚十玉坊」についても市内の「大塚」に由来があるという説が有力と言えるであろう(神山 1988・2002)。

また、平成7(1995)年に発掘調査が実施された第29地点の127号土坑からは、馬の骨が検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子(イネ・オオムギ・コムギなど)も出土しており、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。

さらに、平成8(1996)年度に発掘調査が実施された第35地点では、鑄造関連の遺構も検出されている。130号土坑については鑄造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓(スラッグ)、鑄型、三叉状土製品、砥石などが出土している。また平成13(2001)年度の第42地点からは、多くの土坑・地下室・井戸跡が検出される中、234号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきである。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状況で出土しており、「鍋被り葬」と呼ばれる風習が志木市でも実在していた可能性が高い。戦国期の資料としては、平成6(1994)年度に発掘調査が実施された第21地点から、当市では初めて、よろい さね鎧の札である鉄製品1点と鉄鎌1点が出土している。出土した遺構は、19世紀前半の86号土坑であるため混入品となるが、「柏の城」に関連する資料として大変重要な資料に加わったと言える。

平成11～14(1999～2002)年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からは、頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑が検出されている。その他、ピット列・土坑・溝跡などが検出されていることから、この一帯が『館村旧記』に記載がある「村中の墓場」関連に相当する施設ではないかと考えられる。

中道遺跡では、昭和62(1987)年の第2地点から人骨を伴う地下式坑、掘立柱建築遺構が検出され、平成7(1995)年の中道遺跡第37地点からは、人骨と古銭5枚を出土した土坑墓1基と13世紀に比定される青磁盤1点を出土した道路状遺構1条が検出されている。

新邸遺跡では、昭和60(1985)年の第1地点から段切状遺構の平場から多数の土坑・地下式坑が検出され、平成15(2003)年の新邸遺跡第8地点からは、人骨と六文銭を伴う火葬墓2基が検出されている。おそらく、この新邸遺跡から中道遺跡一帯は、『館村旧記』に記載がある「大塚千手堂」であり、古くは天台宗の「七堂大伽藍」を誇る「しょうりんざんかんのんじだいじゆいん松林山観音寺大受院」関連遺構として、今後は体系的な究明が必要とされるであろう。

7. 近代以降

近代以降の遺跡では、平成5(1993)年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点から、敷島神

社境内に存在する富士塚の築造（明治2～5年）に関連するローム採掘遺構が検出されている。この遺構の坑底面からは、鋤・鍬などの無数の工具痕が観察され、採掘作業がかなり組織的な単位で行われていたこともわかり、地域研究の重要な資料と言える。

平成15（2003）年の新邸遺跡第8地点からは、野火止用水跡が検出され、市内初の発掘調査例となった。用水路の基盤面からは水付きの銹着面が確認され、底面からは大量の陶磁器が出土した。

第2節 遺跡の概要

ここで、今回本書で報告する城山遺跡について概観することにする。

城山遺跡は、志木市柏町3丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北西約1.2km、柳瀬川駅の東約0.8kmに位置している。本遺跡は、柳瀬川右岸の台地上に立地しており、標高は約12m、低地との比高差は約5mである。

遺跡の周辺を眺めてみると、小学校や神社・墓地などが存在する閑静な住宅地と言えるが、最近では、平成18・19（2006・2007）年の福祉施設建設に伴う第58・60地点、平成19～21年度（2008・2009）年には、分譲住宅建設に伴う第62地点、平成21～22年度には、共同住宅建設に伴う第63地点、平成21年度には分譲住宅建設に伴う本地点、さらに平成23年度には、共同住宅建設に伴う第72地点や分譲住宅建設に伴う第71地点と毎年のように小・中規模に相当する開発行為に伴う発掘調査が実施され、僅かに残る緑地や畑地にまで各種開発の波が押し寄せている状況となっている。

城山遺跡は、これまでに78地点の調査（平成24年12月28日現在）が実施され、旧石器時代、縄文時代草創～晩期、弥生時代後期、古墳時代前・中・後期、奈良・平安時代、中・近世に至る複合遺跡であることが判明している。

以上、城山遺跡における今までの調査成果をまとめると、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代・中・近世の複合遺跡であり、また、複合する密度も散在的ではなく、市内では最も濃密な地区であることが判明してきている。

最後に、本遺跡の特色を時代別にまとめると、以下のとおりである。

○旧石器時代 石器ブロックは第42地点から2ヶ所、第62地点から1ヶ所が検出されている。

第71地点から礫群2ブロックが検出される。

○縄文時代 第16・22地点から草創期の爪形文系土器1点ずつ出土。

第21地点から草創期の多縄文系土器3点が出土。

市指定文化財「城山貝塚」。平成3（1991）年3月29日指定。前期の斜面貝塚。

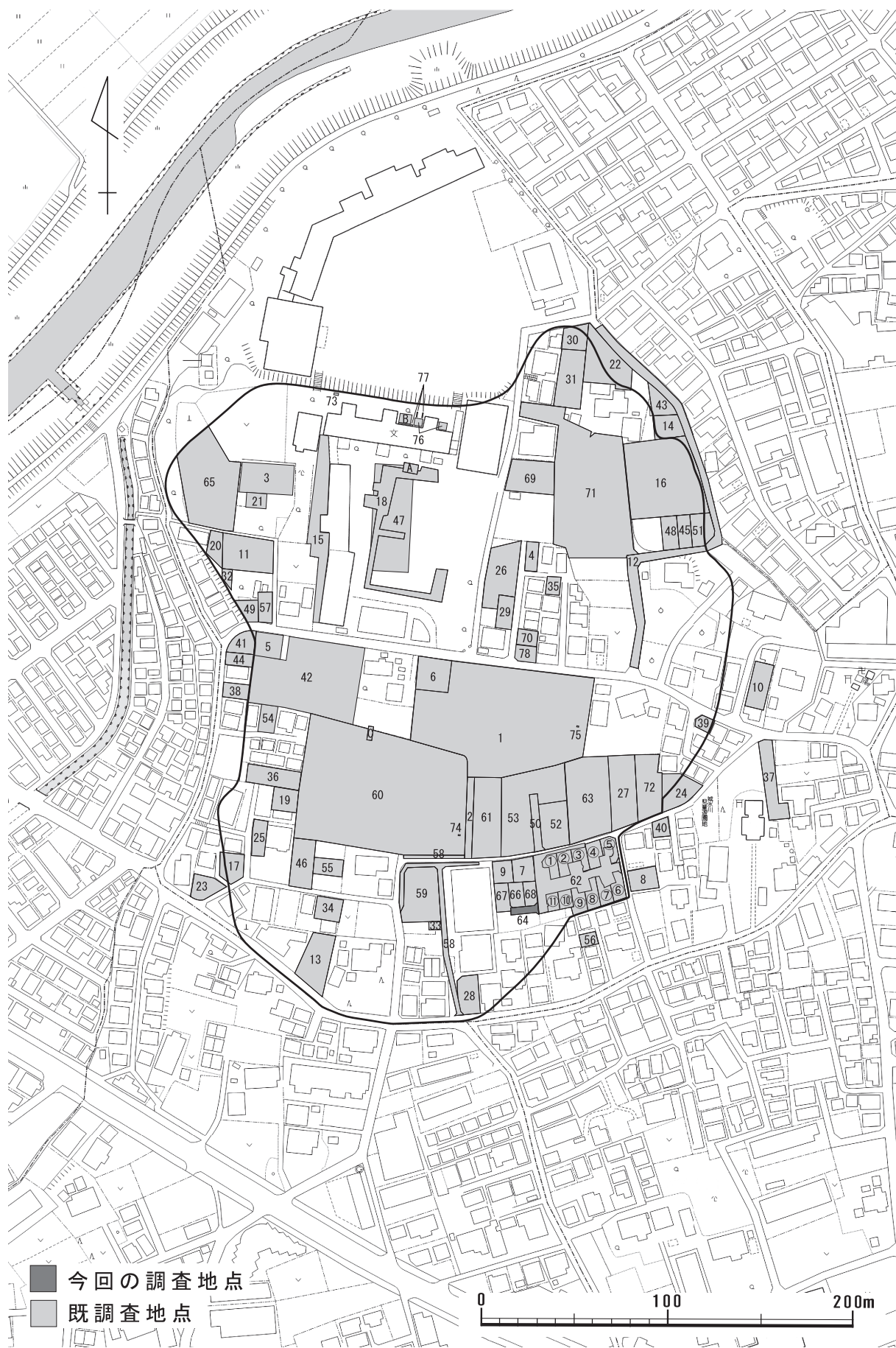
前期の諸磯式期の住居跡が昭和49（1974）年の市史編さん事業における調査において1軒、第59地点から1軒が検出されている。また、第46地点から詳細時期は決定できなかったが、前期末葉の住居跡1軒が検出されている。

第4地点から中期の住居跡1軒。加曾利EⅡ式期。

○弥生時代 後期の住居跡7軒が検出されている。

○古墳時代 前期の住居跡2軒。

中期から後期の住居跡が現在、約200軒を超えて検出されている。



第2図 城山遺跡の調査地点 (1/3,000)

平成24年12月28日現在

- 奈良時代 検出される住居跡は大部分が平安時代に比定されるものであり、今のところ第1地点から8世紀後半の住居跡が1軒検出されているのみである。
第42地点の1号ピットから偏行唐草文の軒平瓦片1点出土。
- 平安時代 9世紀前半から10世紀にかけての住居跡約30軒。
第35地点128号住居跡から、印面に「富」と書かれた銅印が出土。
第42地点から方形区画の溝を伴う遺構が検出され、溝跡からは中国・同安窯系の青磁碗1点（13世紀前半）出土している。
第62地点241号住居跡から、富壽神寶2枚とその周辺から鉄鎌1点と土錘1点が出土しており、当地における古代銭貨の受容を示す一例につながった。
- 中・近世 「柏の城」関連の大堀を含めた溝跡・井戸跡・土坑が多数検出されている。第71地では、南北に延びる「二の丸」曲輪に関連する中規模の堀跡が検出されている。
第29地点の127号土坑は馬の埋葬土坑。
第35地点からは鑄造関連遺構が検出されている。130号土坑は鑄造土坑。134号土坑は溶解炉と考えられる。第71地点でも第35地点の鑄造関連遺構に関係する遺物が多数出土している。

[註]

- 註1 『館村旧記』は、館村（現在の志木市柏町・幸町・館）の名主宮原仲右衛門仲恒なぬしみやはらなかえもんなかつねが、享保12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。
- 註2 『廻国雑記』は、左大臣近衛房嗣の子で、京都聖護院門跡をつとめた道興准后が、文明18年（1486）6月から10ヶ月間、北陸路から関東各地をめぐり、駿河甲斐にも足をのばし、奥州松島までの旅を紀行文にまとめたものである。

[引用文献]

- 神山健吉 1988 「『廻国雑記』に現れる 大石信濃守の館と十玉坊の所在についての一考察」『郷土志木』第7号
2002 「道興をめぐる二つの謬説を糾す」『郷土志木』第31号

第2章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経緯

平成21年7月、株式会社ミヤケン（代表取締役 宮原 本一）から志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市柏町3丁目2665番（総開発面積387.11㎡）地内に分譲住宅建設及び私道敷設工事を行うというものである。

これに対し、教育委員会は当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である城山遺跡（コード11228-09-003）に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

1. 埋蔵文化財確認調査を実施して、その結果に基づき、当該開発予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。
2. 上記1の調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず土地の現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。
3. 城山遺跡における埋蔵文化財の分布状況については、周辺での調査結果に基づき、市内で最も密集していることが判明しており、最新の調査例であり、本地点に隣接する第62地点についての状況を説明する。

平成22年1月25日、教育委員会は仲介業者である株式会社ミヤケンより、確認調査依頼書を受理した。これにより、教育委員会では1月28日に確認調査を実施した。確認調査は第3図に示すように調査区内にトレンチを4本設定し、バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、調査区内には、古墳時代中・後期の住居跡4軒ほどを確認した。教育委員会はこの結果をただちに開発主体者に報告し、保存処置について検討を依頼した。

2月3日、開発主体者が正式に決定したことにより、株式会社東栄住宅（代表取締役社長 西野 弘）から埋蔵文化財発掘届が提出された。当該地については、分譲住宅建設に先立ち道路新設工事を実施することに決定したという内容である。

そのため、2月5日には、開発主体者の株式会社東栄住宅と仲介業者の株式会社ミヤケンの2者を含め、確認調査の結果報告及び埋蔵文化財の保存措置についての事前協議を行った。

これにより、分譲住宅建設に先立ち道路部分を対象（面積79.00㎡）に発掘調査を実施することに決定した。なお、住宅建設部分については、改めて設計を見直すことになり、できる限り盛土保存で対応できる方向に検討することで合意した。

2月12日、志木市埋蔵文化財保存事業受託要綱の規定により、志木市埋蔵文化財保存事業申請書が開発主体者から提出されたため、教育委員会は、埋蔵文化財保存事業に係る協議書を開発主体者と取り交わし、同日には埋蔵文化財保存事業に係る協議書をもとに開発主体者と委託契約を締結した。

2月15日、教育委員会は埋蔵文化財発掘調査の通知を埼玉県教育委員会に提出した。これにより、教育委員会を調査主体とし、2月22日から発掘調査を実施した。

第2節 調査の方法と経過

発掘調査の経過及び各遺構の精査経過については、第2表の発掘調査工程表で示し、ここでは概要について説明する。

2月22日 重機による表土剥ぎ作業を開始する。残土については、調査区外への搬出作業を行わずに、調査区北側の宅地建設予定部分に残土置場を確保し対処することにした。

本日中にすべての表土剥ぎ作業を終了する。午前中にプレハブ・トイレの搬入を行う。

23日 人員導入による発掘調査を開始した。器材搬入後、調査前の準備を行い、午後から調査区域の整備と細部の遺構確認作業を実施する。

その結果、調査区全域には、古墳時代中・後期の住居跡を中心とした遺構が濃密に分布していることが判明した。そのため、遺構の切り合い関係を把握するのは非常に困難な状況と考えられた。本日中には、256 Hの精査を開始する。

2月下旬 古墳時代中・後期の住居跡の切り合い関係については、257 H及び255 Hが今回の検出の中では7世紀中葉に比定できるものと判断でき、他の住居跡を切っている状況であった。そのため、255 Hと257 Hの精査を開始する。255 Hを切る土坑(698 D)については、精査を行い、須恵器の小破片が数点出土したため、平安時代のものとして取り扱った。

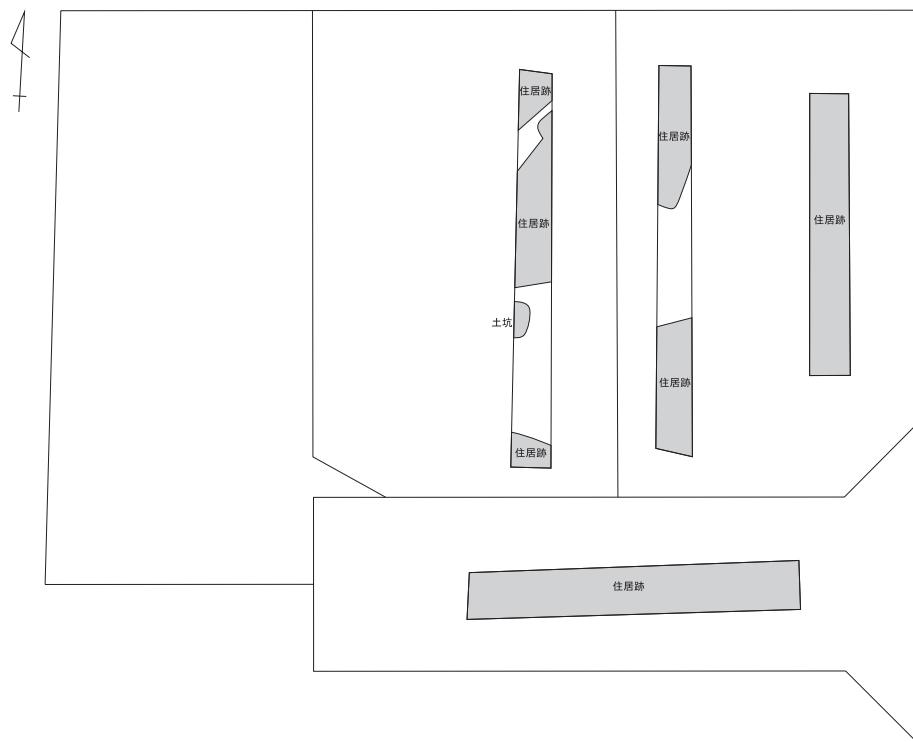
3月上旬 256 Hについては、255・257 Hの精査を先行して行うため、一時中断する。256 Hの時期は、7世紀前葉に比定できる。699・700 Dの精査を開始する。この2基の土坑については、出土遺物がなかったため詳細の時期の設定は難しいが、覆土の観察から中世以降のものとして取り扱った。

3月中旬 257 Hに切られる246 Hの精査を開始する。この住居跡は、隣接する第62地点で調査された住居跡と同一である。時期は5世紀中葉に比定される。

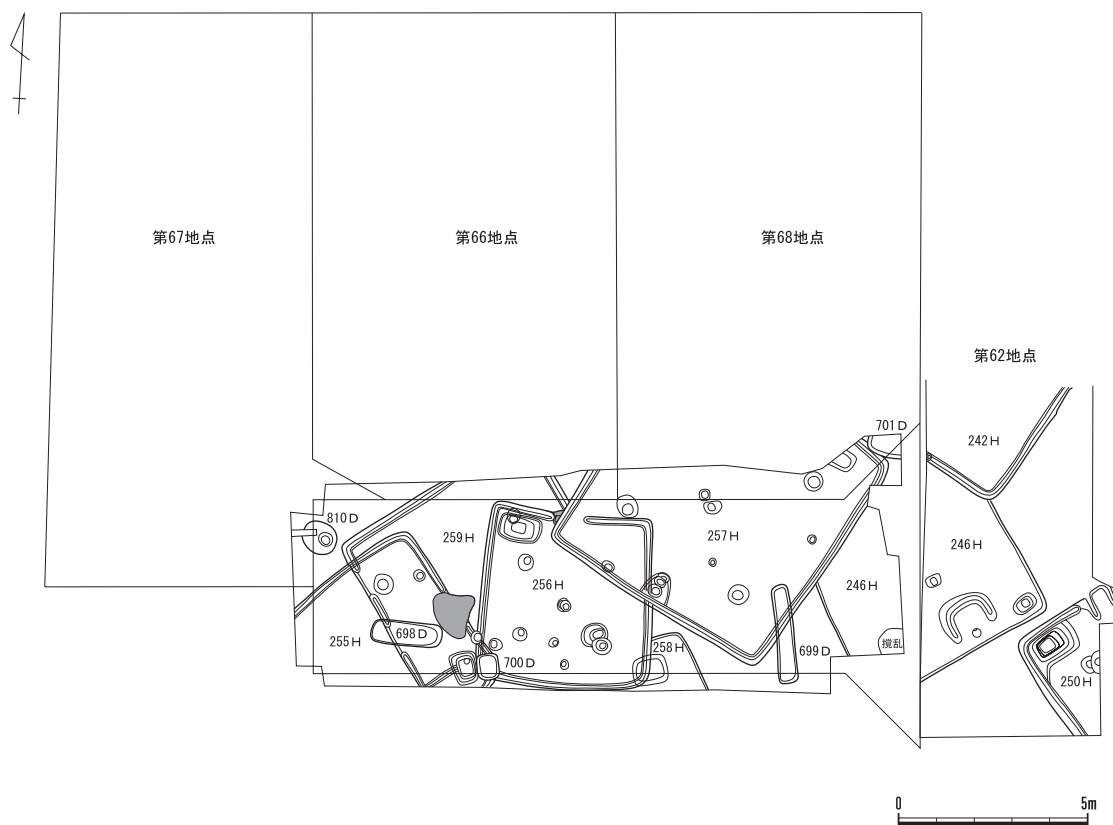
255・257 Hの精査を終了し、256 Hの精査を再開する。256 Hからは、炭化材が多く

	平成22年2月		3月				
	25日	5日	10日	15日	20日	25日	30日
表土剥ぎ作業	2.22						
246 H			3.12				
255 H	2.24						
256 H	2.23		一時中断	3.15再開			
257 H	2.25						
258 H				3.19			
259 H					3.23		
698 D	2.24						
699 D		3.1					
700 D		3.3					
701 D			3.11				
810 D							3.30
器材片付け作業							3.30

第2表 城山遺跡第64地点の発掘調査工程表



第3図 確認調査時の遺構分布 (1/200)



第4図 遺構分布図 (1/200)

出土しており、さらに多量の土器が出土していることから、焼失後に多量の土器が廃棄された住居跡と考えられる。

3月下旬 256 Hの精査に併行して、258 H及び259 Hの精査を開始する。258 Hは256 Hに切られ、時期は6世紀初頭に、259 Hは255・256 Hに切られ、5世紀後葉に比定される。

3月30日 縄文時代のもと思われる土坑（810 D）及び256・258・259 Hの精査を終了し、すべての調査を完了する。

本日中に器材の片付け及び搬出作業を終了し、トイレ・プレハブの撤去作業も終了する。今回、埋戻し作業はなし。

第3節 住宅建設部分の取り扱いについて

今回発掘調査を実施しなかった住宅建設部分の取り扱いについては、その後、株式会社東栄住宅から正式に3棟の分譲住宅建設の実施が決定したということで、埋蔵文化財発掘届及び設計図が提出されたため、新たに第66・67・68地点として手続きを行うこととした。各地点の位置関係は第4図に示したとおりである。

なお、各地点については、再度設計図を確認し、確認調査の結果を照らし合わせ、保護層30cm以上を確保するものと判断できたため、工事立会と取り扱うことで、5月11日付けで埋蔵文化財発掘届を、5月14日付けで埋蔵文化財の届出の取り扱いについて（副申）を埼玉県教育委員会に提出した。

その後、第66・67地点については、平成22年5月11日に、第68地点については、平成22年6月17日に工事立会を実施し、正しく盛土保存が行われていたことを確認した。

第3章 検出された遺構・遺物

第1節 縄文時代

(1) 概要

縄文時代の遺構は、土坑1基(810D)が検出されたが、遺物は出土せず、詳細な時期を特定するには至らなかった。

(2) 土坑

810号土坑

遺構 (第5図)

[位置] 調査区北西端。

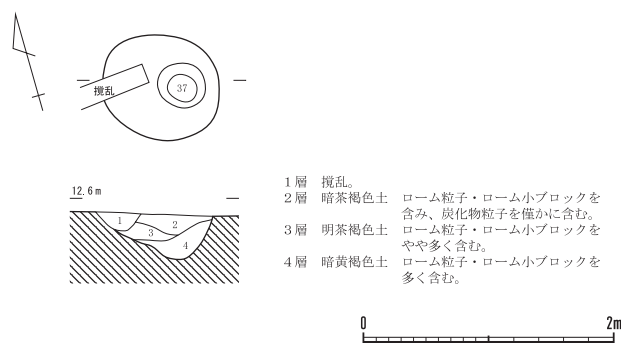
[検出状況] 西側の一部を耕作により攪乱される。

[構造] 平面形：不整な楕円形。断面形：壁面はなだらかに立ち上がるが南東端は一段深く、壁面もやや急角度となる。規模：長軸径約0.92m／短軸径約0.82m／深さ37cm。主軸方位：N-65°-W。

[覆土] 3層に分層された。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から縄文時代と思われるが、詳細な時期は不明。



第5図 810号土坑(1/60)

第2節 古墳時代・平安時代

(1) 概要

古墳時代の遺構については、中・後期の住居跡6軒(246・255～259H)が検出された。住居跡の分布は、狭小な面積でありながら、調査区全面に広がり、重複が著しい状況である。住居跡を古い順に並べてみると、246H(5世紀中葉)、259H(5世紀後葉)、258H(6世紀初頭)、255・256・257H(7世紀中葉)である。なお、255～257Hの3軒については、土器の特徴から、7世紀中葉に比定したが、住居の切り合いでは、255・257Hが256Hを切っていることが確認できたため、256Hは7世紀中葉古段階に、255・257Hは7世紀中葉新段階として区分することとした。

平安時代の遺構については、土坑2基(698・701D)が検出された。時期は、698Dは9世紀代、701Dは9世紀後葉～末葉と思われる。

(2) 住居跡

246号住居跡

遺構 (第7図)

[検出状況] 第62地点で検出された246号住居跡の西側部分と考えられる。242 H・257 H・701 Dに切られる。

[構造] 平面形：長方形。規模：長軸不明／短軸5.30m／確認面からの深さ9 cm。第62地点では20 cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：N-27°-W。壁溝：検出されなかった。床面：住居中央付近に硬化した面が確認できた。貼床は第62地点の壁際にのみ2～12 cmの厚さで確認できた。炉・カマド：住居北側の被熱赤化箇所(G-G')はカマドの可能性はある。(F-F')と第62地点の被熱赤化箇所が炉であるかは不明。貯蔵穴：東コーナーに位置する。平面形は隅丸長方形。長軸66 cm／短軸44 cm／深さ27 cm。覆土はローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土を基調とする。上層から甕形土器が出土した。柱穴：支柱穴と思われるものは確認できなかった。入口施設：南東壁寄りの深さ44 cmの柱穴が入口梯子穴と思われる。北側には高さ3 cm程の「コ」字状の凸堤が巡っていた。

[覆土] 4層に分層できた。

[遺物] 土師器坏・鉢・高坏・埴・壺・甕形土器、鉄製品、炭化種実(モモ)が出土した。

[時期] 古墳時代中期(5世紀中葉)。

遺物 (第8図、第3・13表)

本住居跡出土の遺物は、大半が第62地点の調査の際に出土しており、今回の調査では、土器1点(17)が追加資料となる。炭化種実の分析についても第62地点の報告書に掲載(尾形・徳留・深井・青木 2012)。

[土器] (第8図1～15・17、第3表)

第62地点からは、土師器坏形土器(1～4)、土師器鉢形土器(5)、土師器高坏形土器(6～8)、土師器埴形土器(9)、土師器壺形土器(10～14)、土師器甕形土器(15)、鉄製品(16)が出土していたが、今回の調査で土師器坏形土器(17)を追加した。

[鉄製品] (第8図16、第13表)

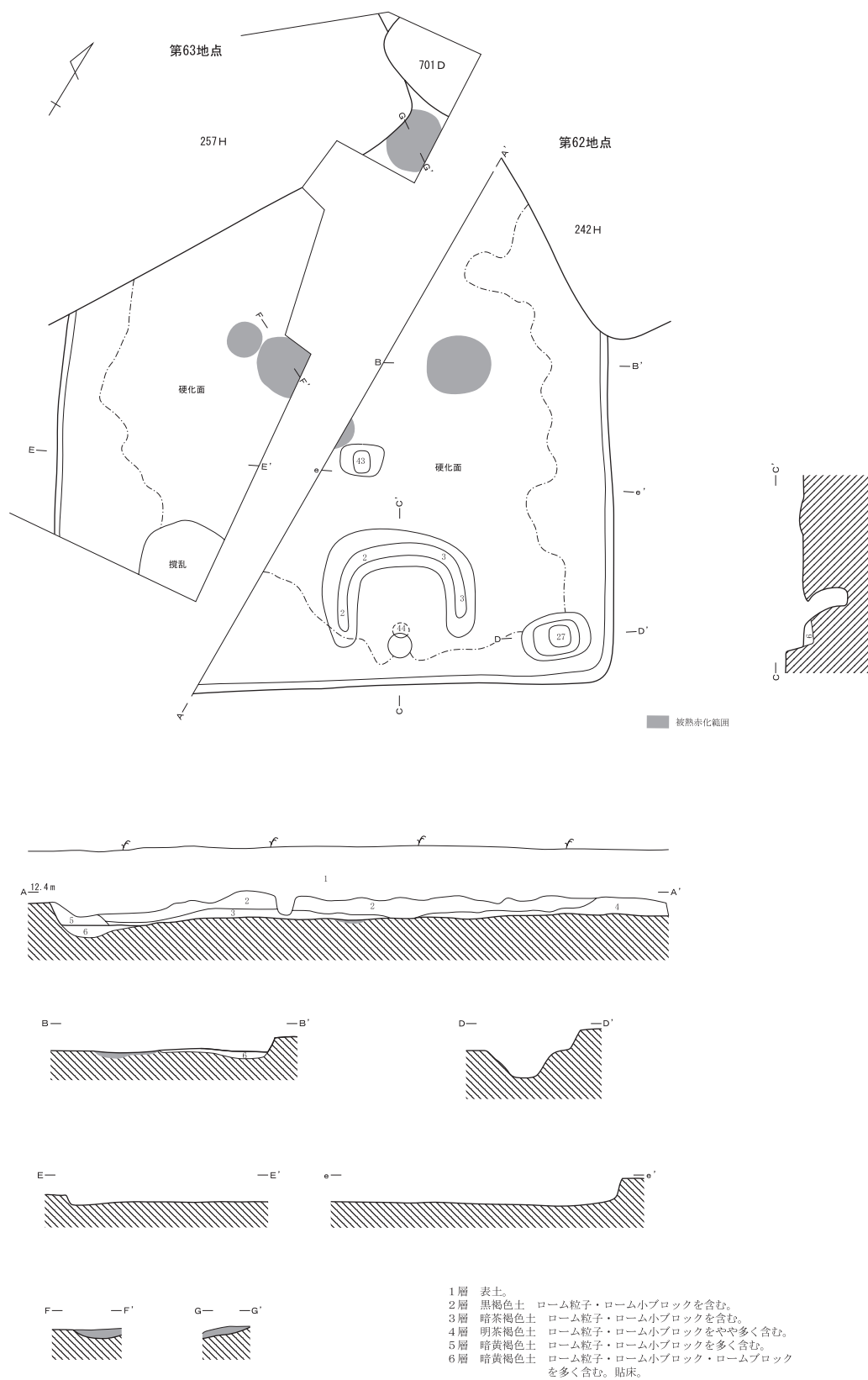
釘と思われる。現存長4.7 cm・最大幅0.8 cm・重さ6.3 g。断面形は長方形。第62地点で報告済み。

255号住居跡

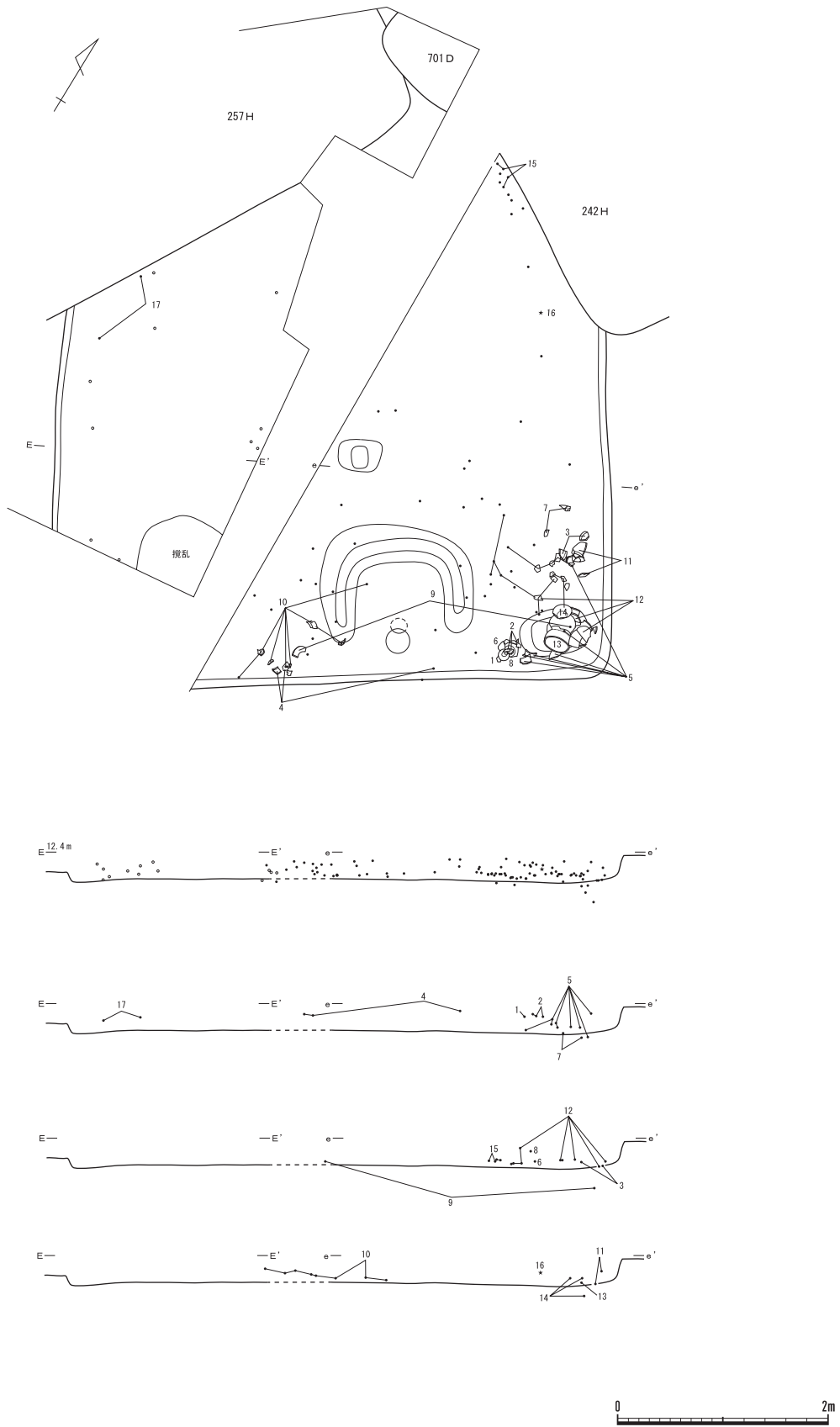
遺構 (第9・10図)

[検出状況] 南半部は調査区域外である。256・259 Hを切り、698・700 Dに切られる。

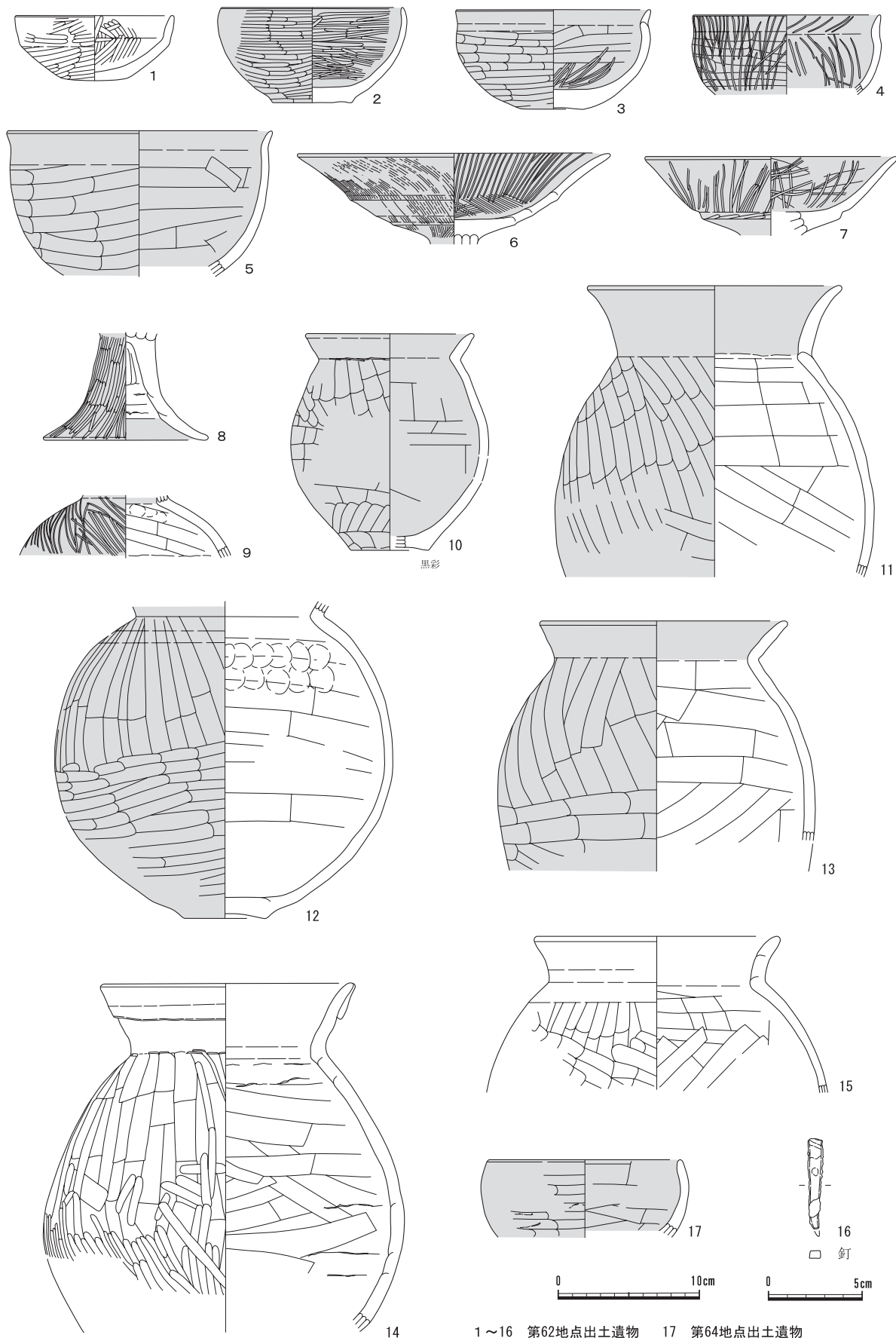
[構造] 平面形：方形。規模：不明×4.80m／確認面からの深さ33～41 cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：N-52°-E。壁溝：確認できた範囲では、カマドを除き全周する。上幅15～20 cm／下幅6～10 cm／深さ7～14 cm。床面：カマド前面から南側に硬化した面が確認できた。ほぼ直床である。カマド：北東壁のほぼ中央に位置する。主軸方位はN-61°-E。長さ94 cm／幅97 cm／壁への掘り込み46 cm。袖部は259 Hの覆土とロームを馬蹄形状に掘り残し、その上に粘土を被覆して天井部と共に構築したと思われる。燃焼部には被熱による赤化は確認できなかったが、袖部の粘土には被熱による赤化が確認できた。貯蔵穴：東コーナーに位置する。東側は一部700 Dに壊されている。平面形は長方形。長軸87 cm／短軸72 cm／深さ52 cm。周囲には幅10～15 cm／深さ10～14 cmの段を有する。上層から土器が多数出土した。覆土はローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロック・粘



第6図 246号住居跡 (1/60)



第7図 246号住居跡遺物出土状態 (1/60)



1~16 第62地点出土遺物 17 第64地点出土遺物

第8図 246号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)

土ブロック・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。柱穴：本住居に伴うものは検出されなかった。

[覆 土] 24層に分層できた。

[遺 物] 土師器坏・甑・甕形土器、須恵器高坏形土器、土製品、鉄製品が出土した。その他として、炭化種実（イネ・コムギ）が出土した。炭化種実の分析結果は、付編73ページを参照。

[時 期] 古墳時代後期（7世紀中葉新段階）。

遺 物（第11図、第4・11・13表）

[土 器]（第11図1～16、第4表）

カマド及び貯蔵穴周辺から比較的まとまって出土した。1～11は土師器坏形土器、12は須恵器高坏形土器、13は土師器甑形土器、14～16は土師器甕形土器である。

[土 製品]（第11図17、第11表）

支脚である。高さ15.7cm・最大幅8.5cm。円筒形を呈し、断面は楕円形である。表面には成形痕と思われる平坦面が縦方向に延びている。

[鉄 製品]（第11図18、第13表）

用途不明の鉄製品であるが、鉄鍬の鍬身部（五角形式）の可能性はある。長さ3.6cm・最大幅3.0cm・厚さ0.2cm・重さ6.6g。

256号住居跡

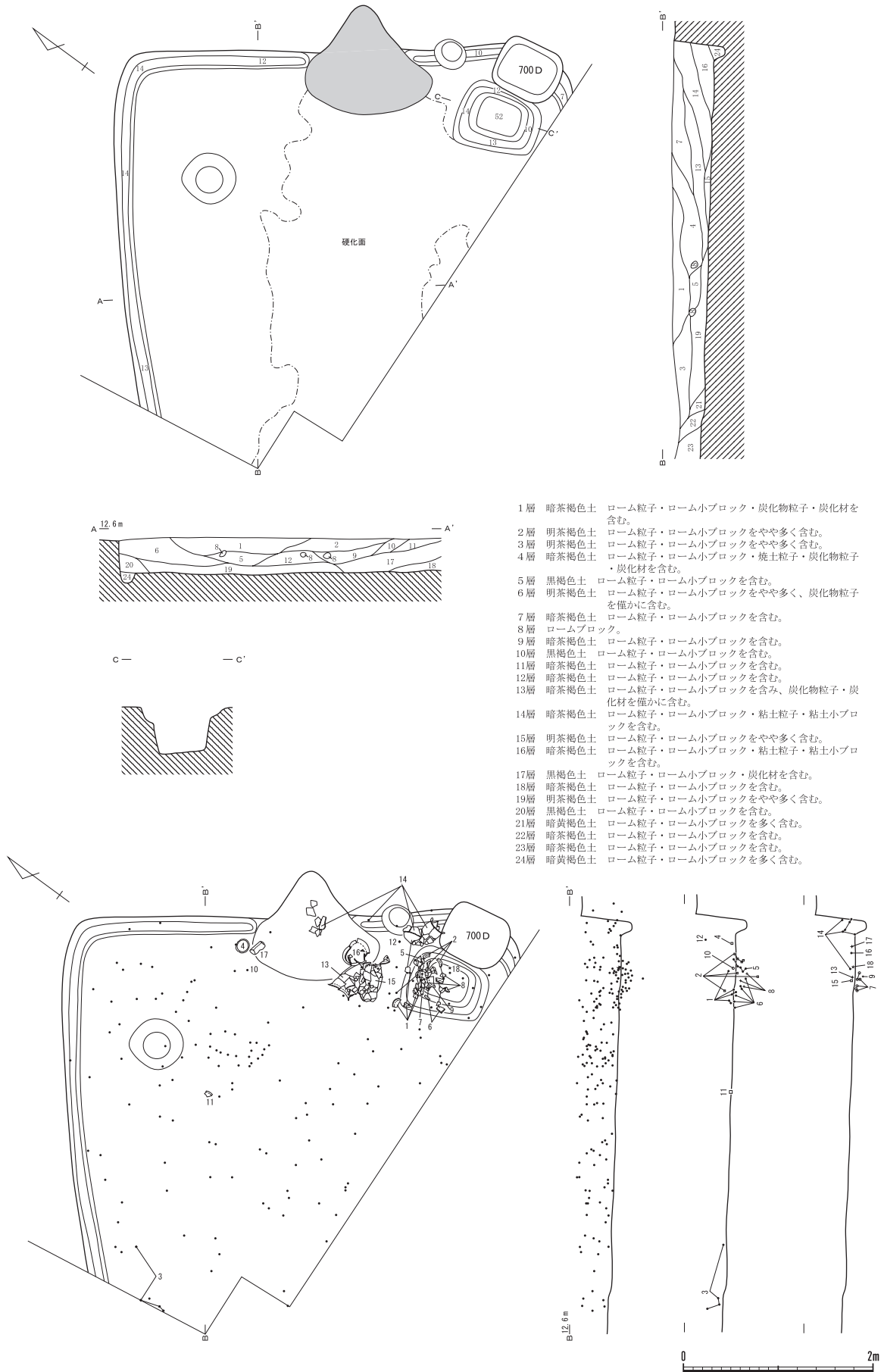
遺 構（第12～16図）

[検出状況] 258・259Hを切り、255・257H・700Dに切られる。北東コーナーは257Hの貼床下から検出された。

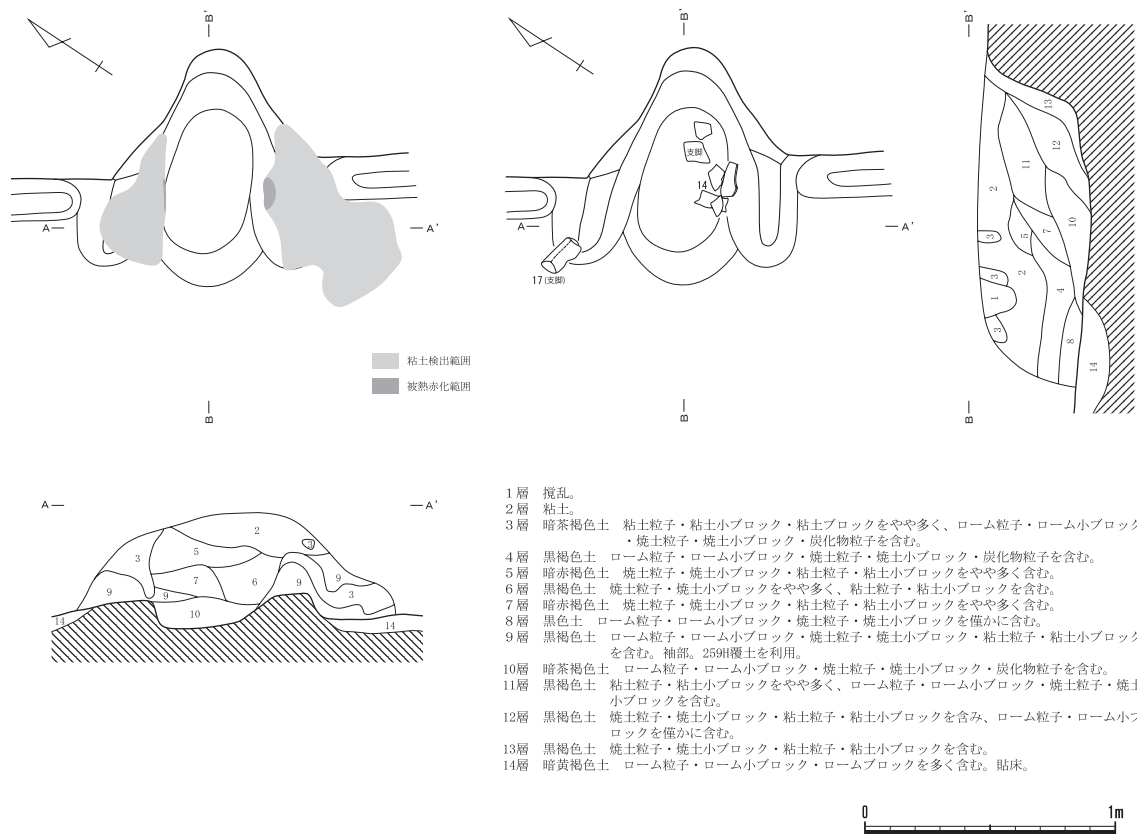
[構 造] 平面形：隅丸長方形。規模：長軸4.70m／短軸4.60m／確認面からの深さ48cm前後。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：ほぼN－S。壁溝：カマドを除き全周する。上幅18～22cm／下幅6～10cm／深さ5～20cm。床面：住居中央部分が硬化していた。貼床は2～20cmの厚さで施されていた。カマド：北壁の中央よりやや西に偏って位置する。大半が257Hに壊されており、粘土と僅かに左袖部のロームが確認できたのみである。貯蔵穴：北西コーナーに位置する。平面形は長方形。長軸112cm／短軸70cm／深さ73cm。周囲には幅5～20cm／深さ5～8cmの段を有する。上層から炭化材や土器が出土している。覆土はローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロック・炭化材を含む黒褐色土を基調とする。柱穴：主柱穴はP1～P4の4本と思われる。深さ58～74cm。P6は貼床下からの検出であり、覆土はローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土を基調とし、最下層からは粘土ブロックが検出された。床面からの深さ46cm。入口施設：P5は入口梯子穴と思われる。覆土はローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックをやや多く含む明茶褐色土を基調とする。深さ21cm。

[覆 土] 15層に分層できた。P2の南側上層から粘土が検出され、さらに南側の床面上からは生粘土塊（第24図84）が検出された。

[遺 物] この時期のものとしては、市内で最も多くの遺物を出土した住居跡であろう。特に土器は多く、実測可能な土師器は73点にのぼる。内訳は土師器坏・鉢・甕・甑形土器、土製品、石製品、鉄製品が出土した。その他として、鉄滓（スラッグ）5点と炭化種実（オニグルミ・モモ・ウメ・スモ



第9図 255号住居跡・遺物出土状態、700号土坑 (1/60)



第10図 255号住居跡カマド (1/30)

モ)・炭化材、生粘土塊が出土した。炭化種実・炭化材の分析結果は、付編 73～78ページを参照。

[時期] 古墳時代後期 (7世紀中葉古段階)。

[所見] 炭化材が多く出土したことから焼失住居の可能性はある。さらに、出土遺物が住居全体から多く出土したことから、本住居跡は焼失した後に多量の土器が廃棄された可能性はある。

遺物 (第17～24図、第5・11・12・13表)

[土器] (第17～23図1～73、第5表)

1～23は土師器坏形土器、24～30は土師器鉢形土器、31～64は土師器甕形土器、65～73は土師器甌形土器である。

[土製品] (第24図74～81、第11表)

すべて支脚である。

74は高さ17.1cm・幅：上端3.4cm・下端8.0cm・重さ592.0g。完形品である。

75は高さ17.3cm・幅：上端3.2cm・下端8.1cm・重さ638.0g。完形品である。

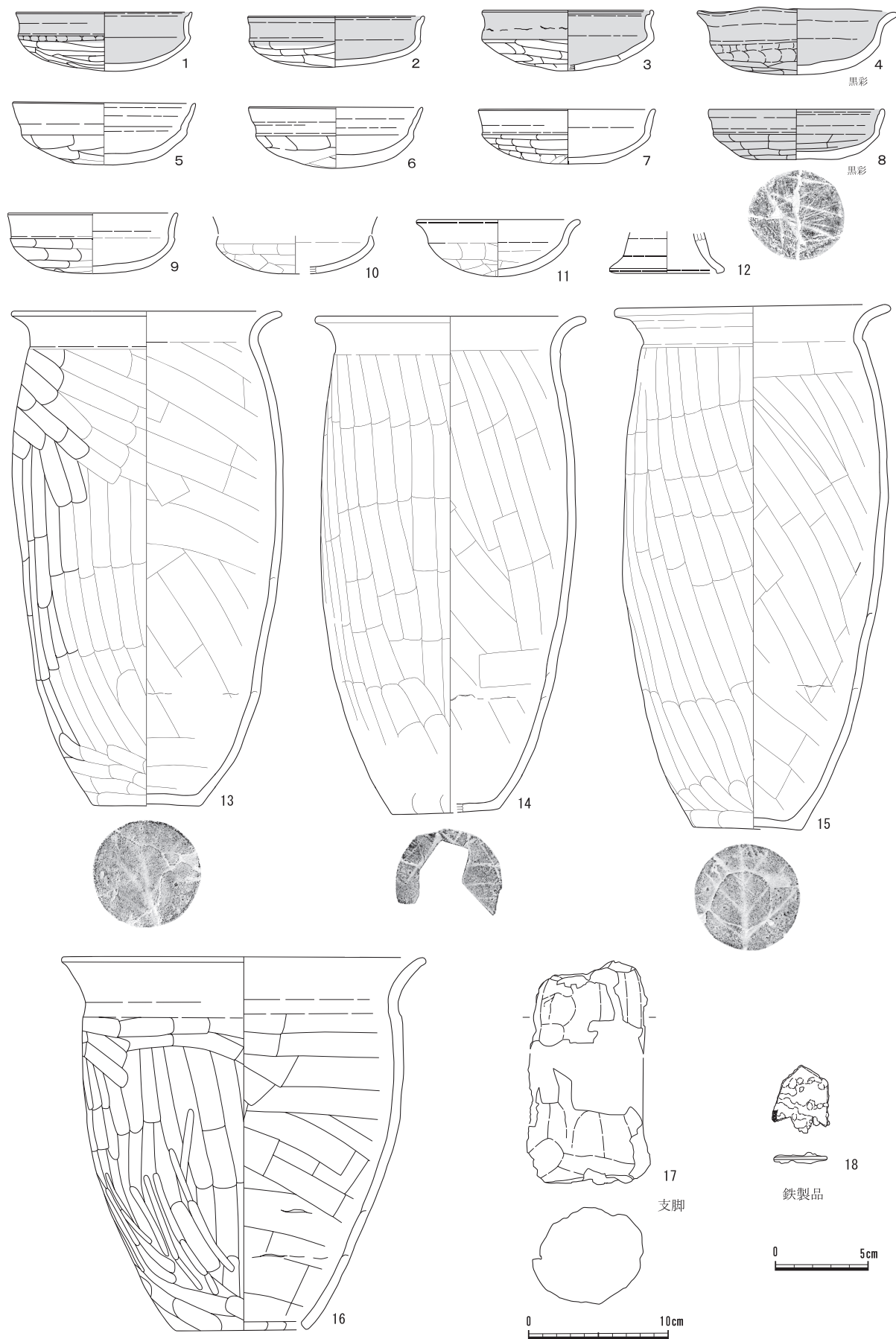
76は高さ13.0cm・幅：上端4.0cm・重さ387.0g。下端を欠損する。

77は高さ9.9cm・幅：下端5.7cm・重さ249.0g。上端部を欠損する。

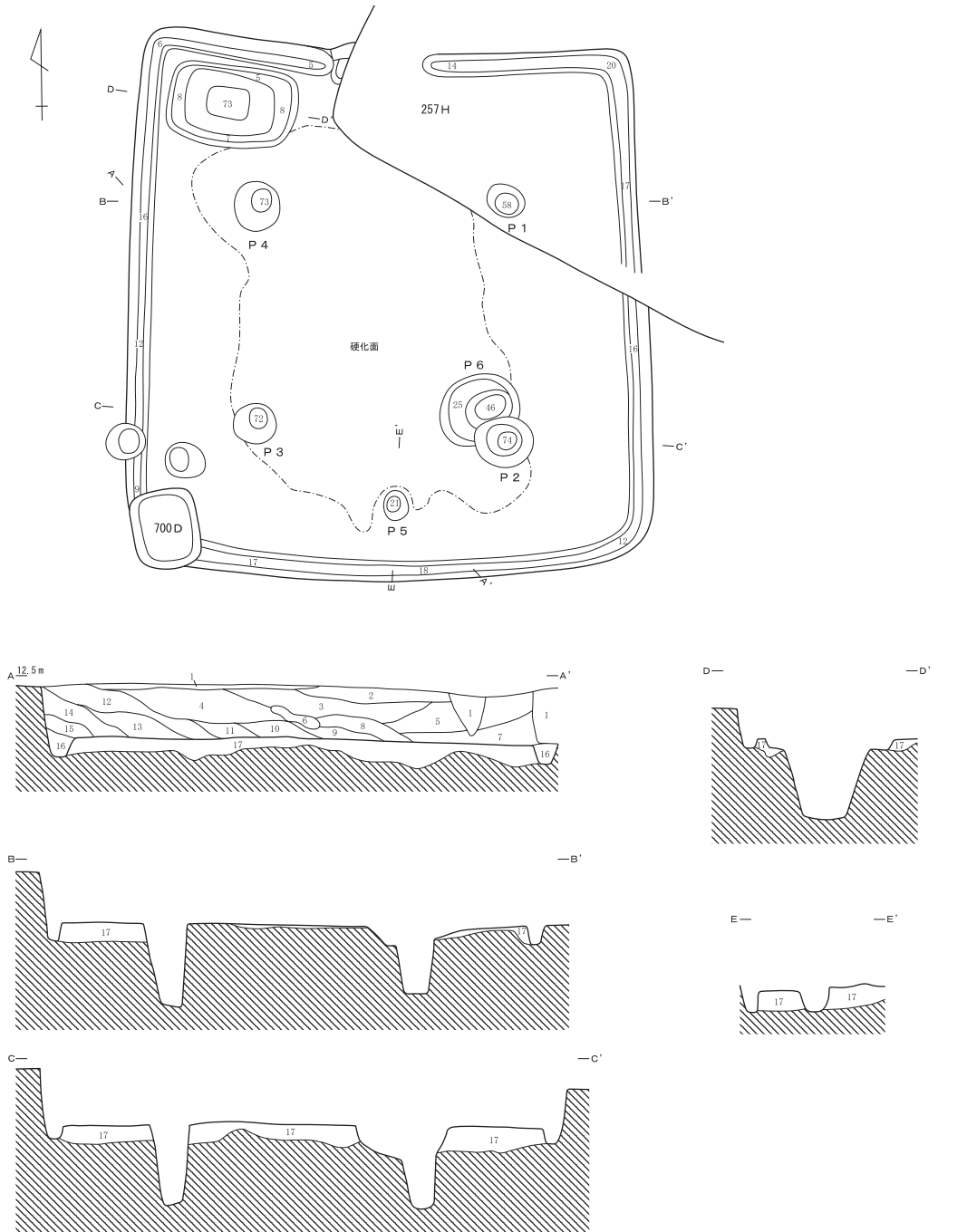
78は高さ6.8cm・幅：下端6.3cm・重さ244.0g。上端部を欠損する。

79は高さ14.3cm・幅：下端7.6cm・重さ406.0g。上端部及び長軸半分程を欠損する。

80は高さ5.6cm・幅：上端3.3cm・重さ42.6g。下端部及び長軸半分を欠損する。



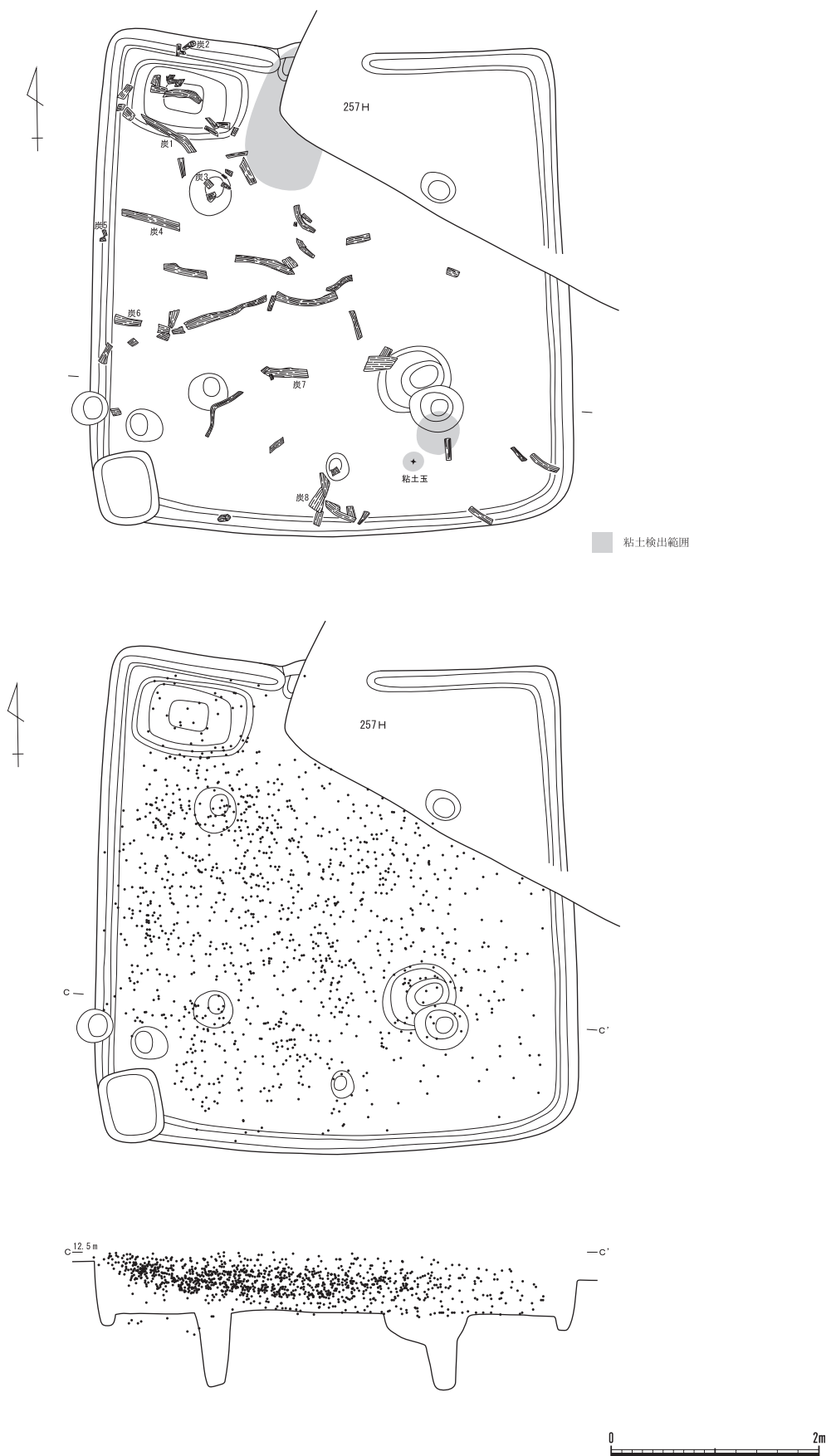
第11図 255号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)



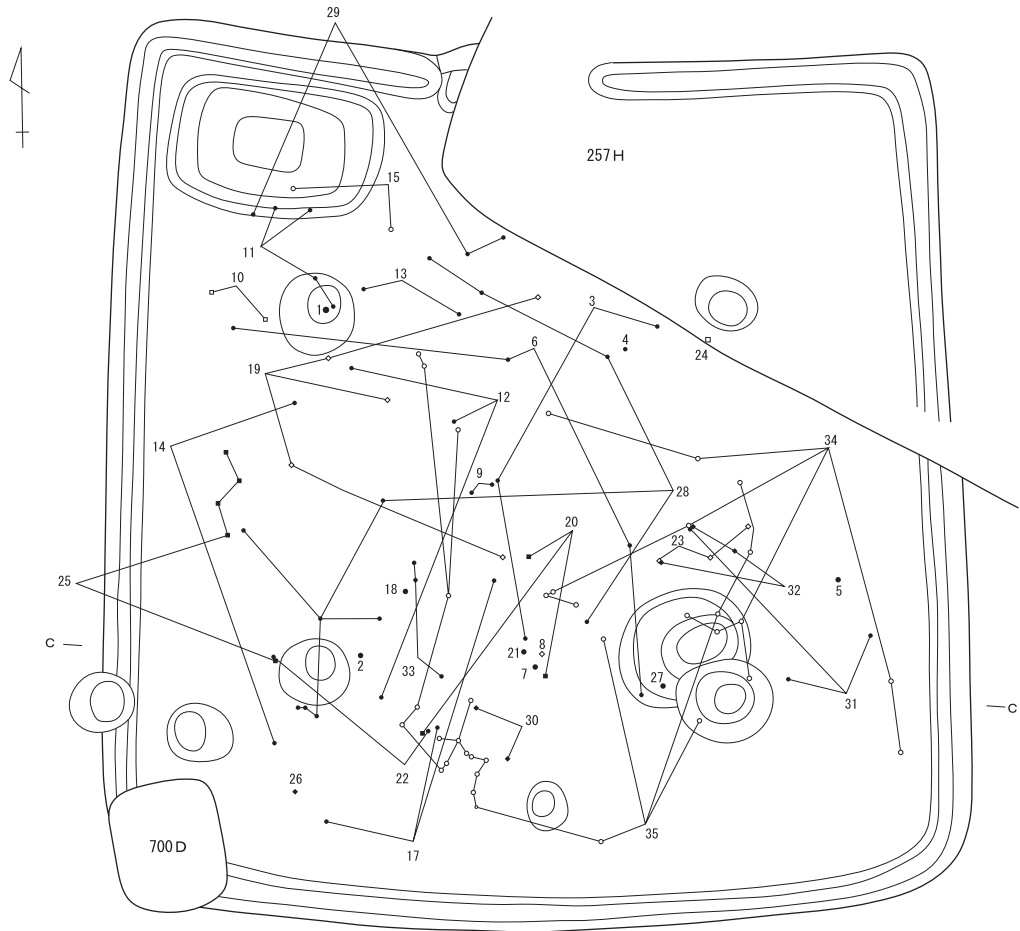
- | | | |
|--------------|-----------|--|
| 1層 攪乱。 | 10層 黒褐色土 | ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子を含む。 |
| 2層 暗茶褐色土 | 11層 暗茶褐色土 | ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く、焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子・炭化材を含む。 |
| 3層 黒褐色土 | 12層 暗茶褐色土 | 焼土粒子・ローム小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロックをやや多く、ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む。 |
| 4層 黒褐色土 | 13層 暗茶褐色土 | 焼土粒子・焼土小ブロックをやや多く、ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロック・炭化物粒子を含む。 |
| 5層 暗茶褐色土 | 14層 暗茶褐色土 | ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子を含む。 |
| 6層 白色粘土ブロック。 | 15層 暗茶褐色土 | ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子・炭化材を含む。 |
| 7層 暗茶褐色土 | 16層 暗黄褐色土 | ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。 |
| 8層 暗茶褐色土 | 17層 暗黄褐色土 | ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。貼床。 |
| 9層 暗茶褐色土 | | ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロック・炭化物粒子を含む。 |



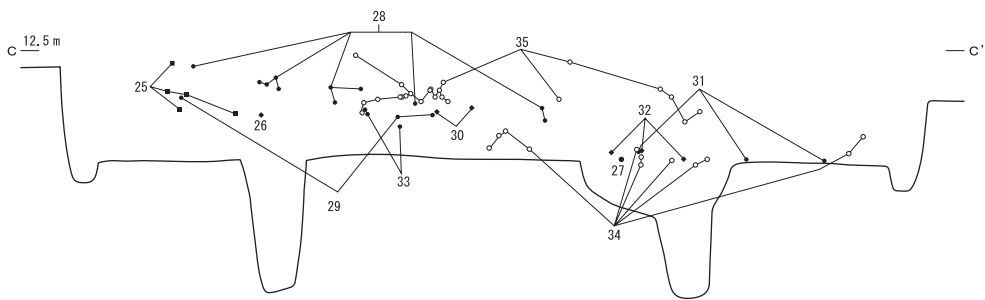
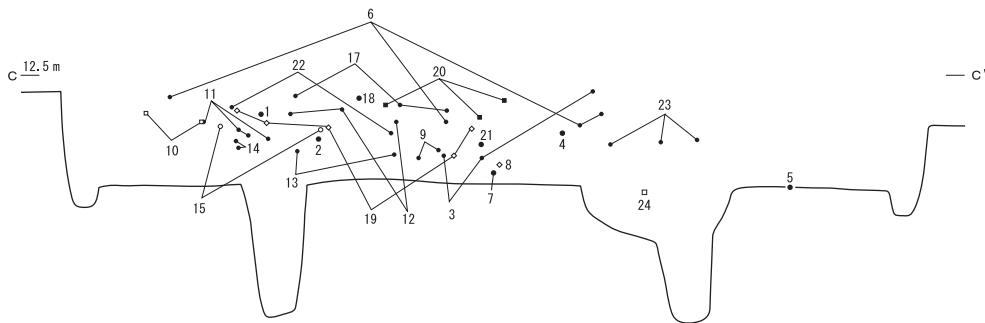
第12図 256号住居跡 (1/60)



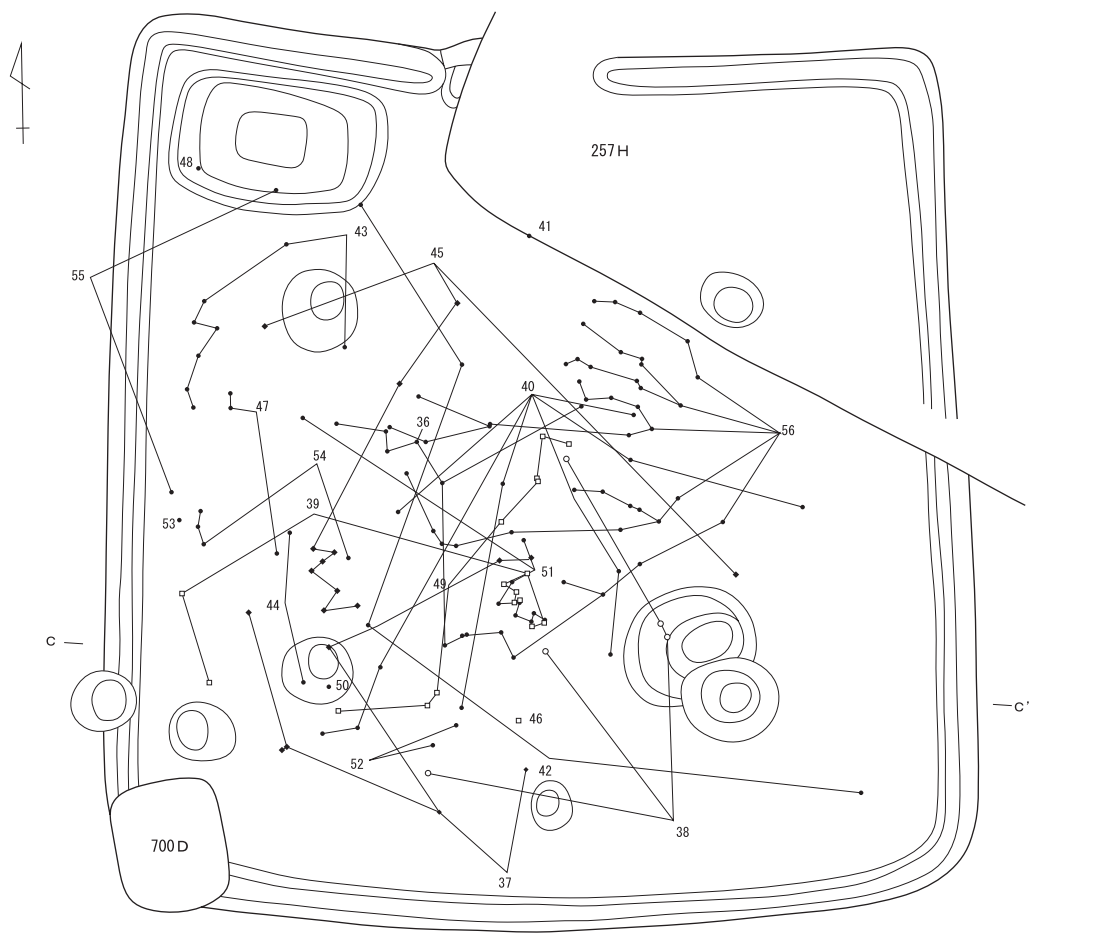
第13図 256号住居跡炭化材・遺物出土状態 (1/60)



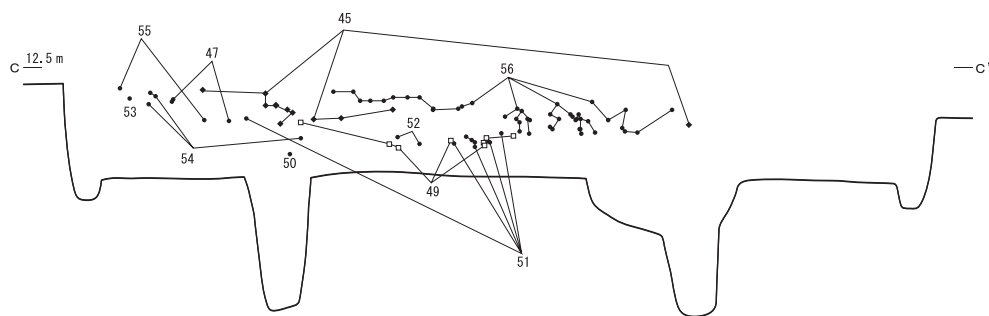
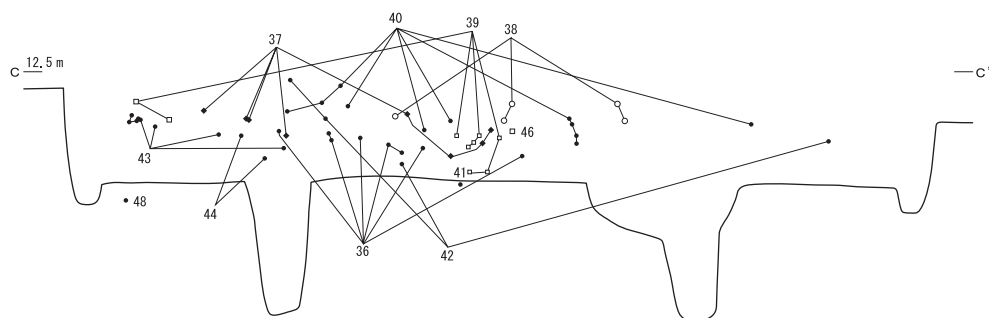
遺物 1~35



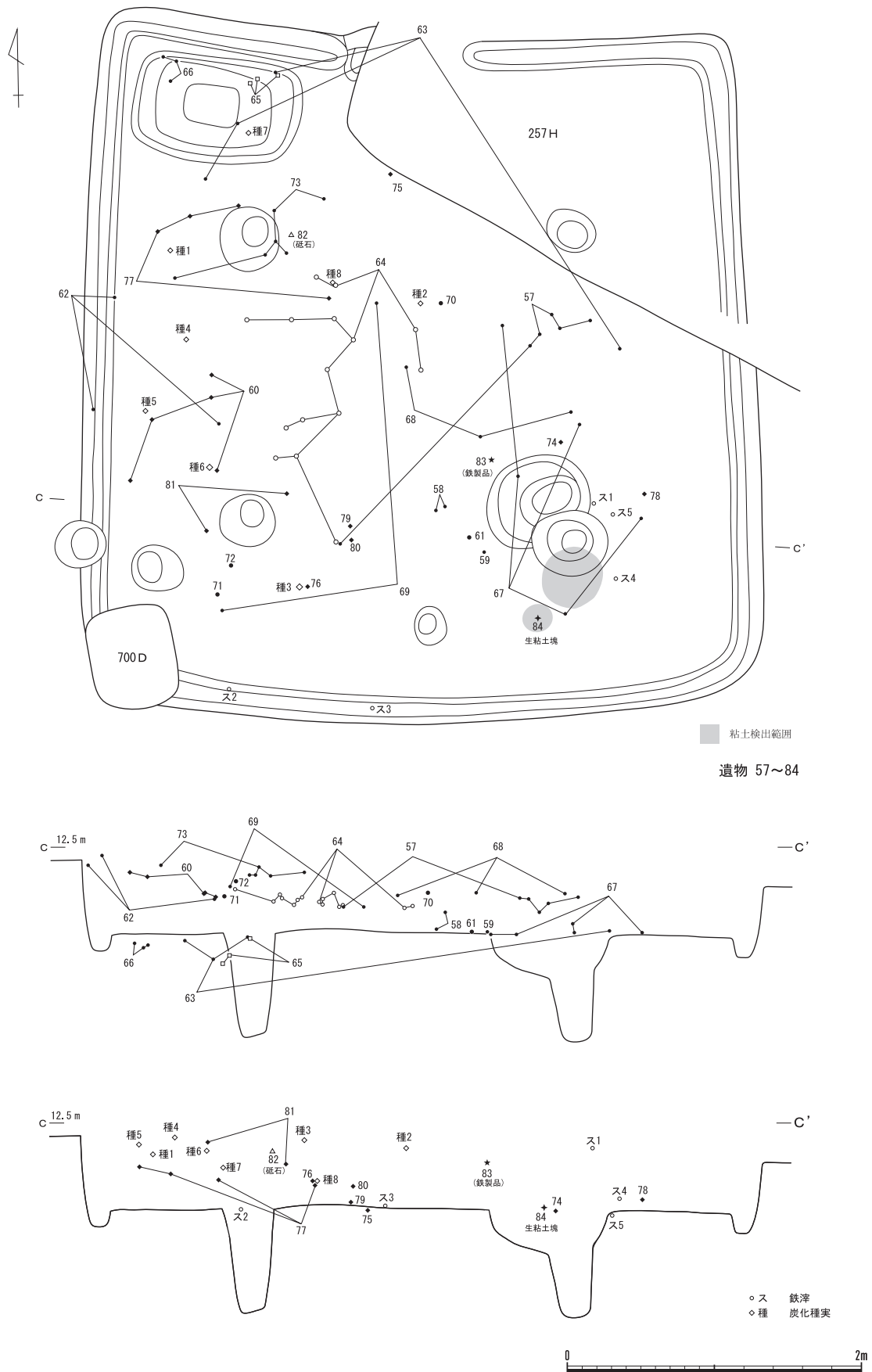
第14図 256号住居跡遺物出土状態1 (1/40)



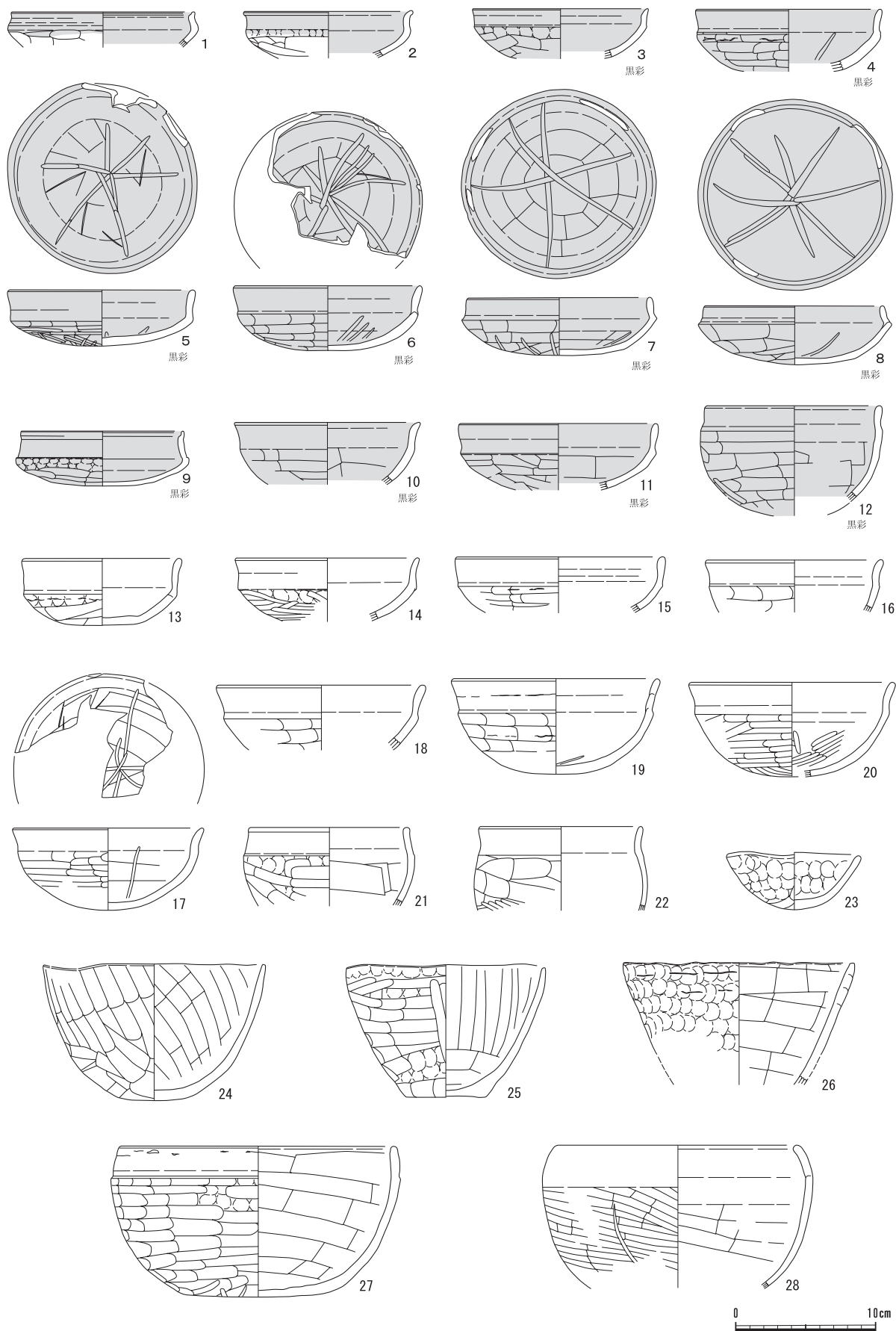
遺物 36~56



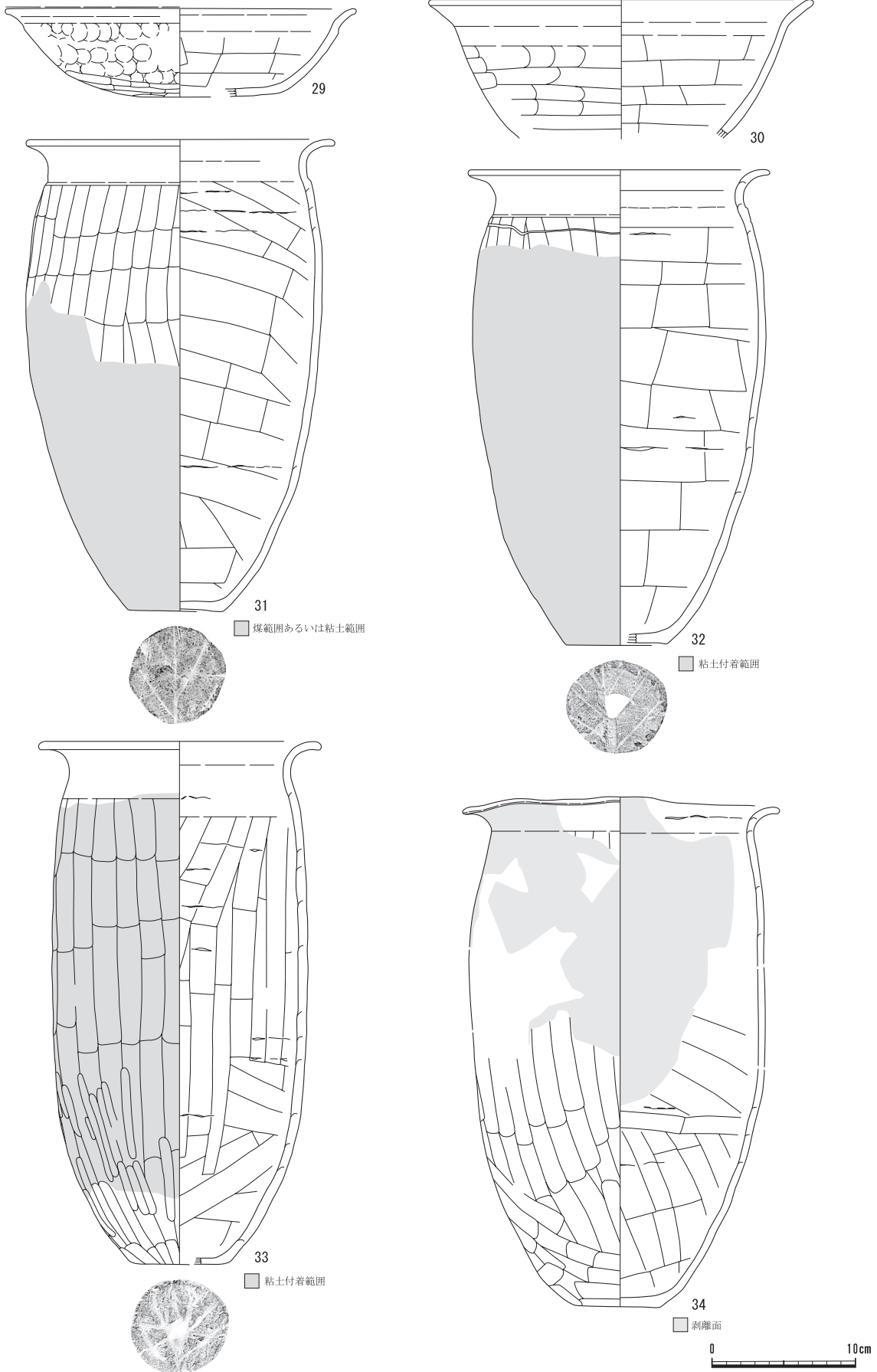
第15図 256号住居跡遺物出土状態2 (1/40)



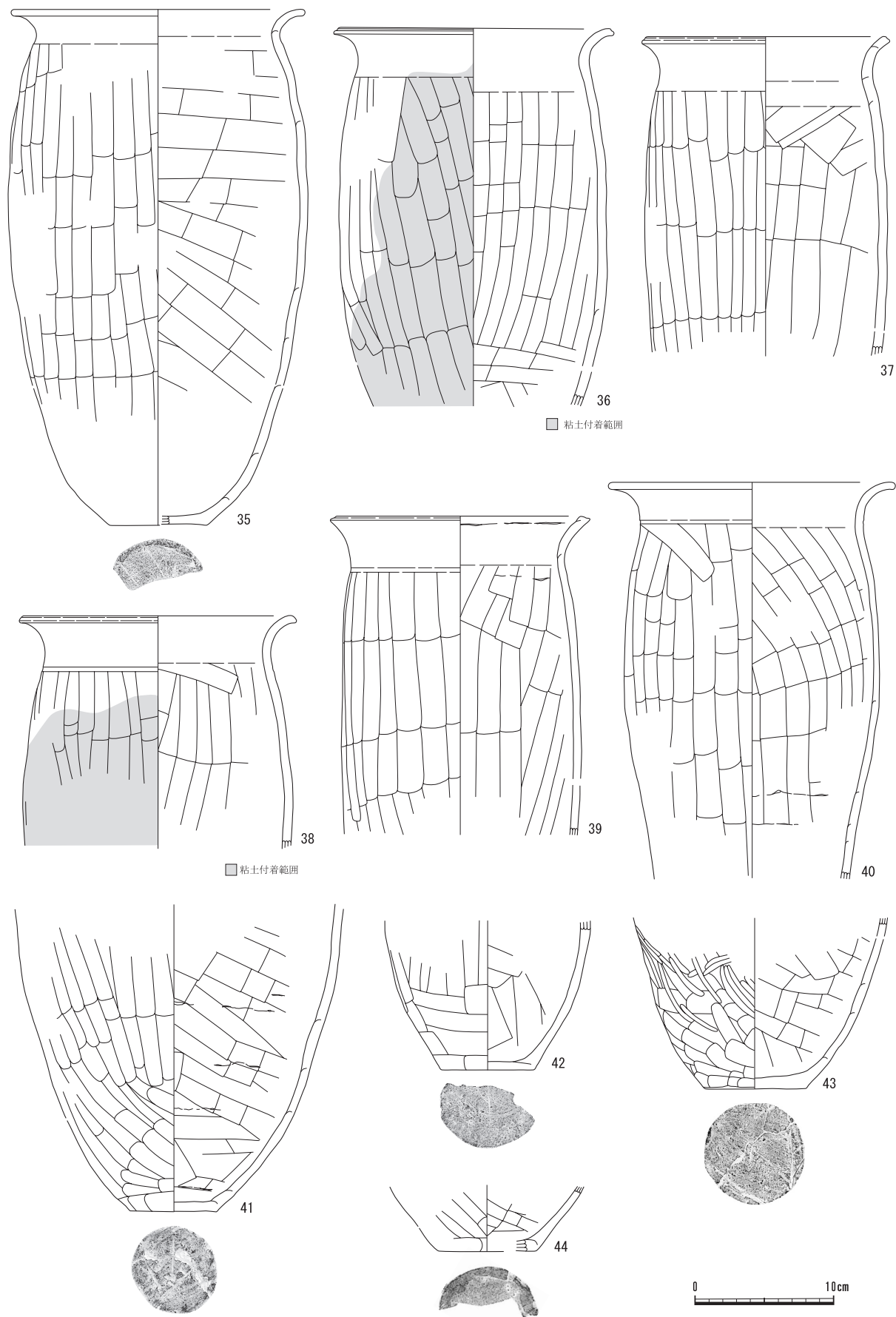
第16図 256号住居跡遺物出土状態3 (1/40)



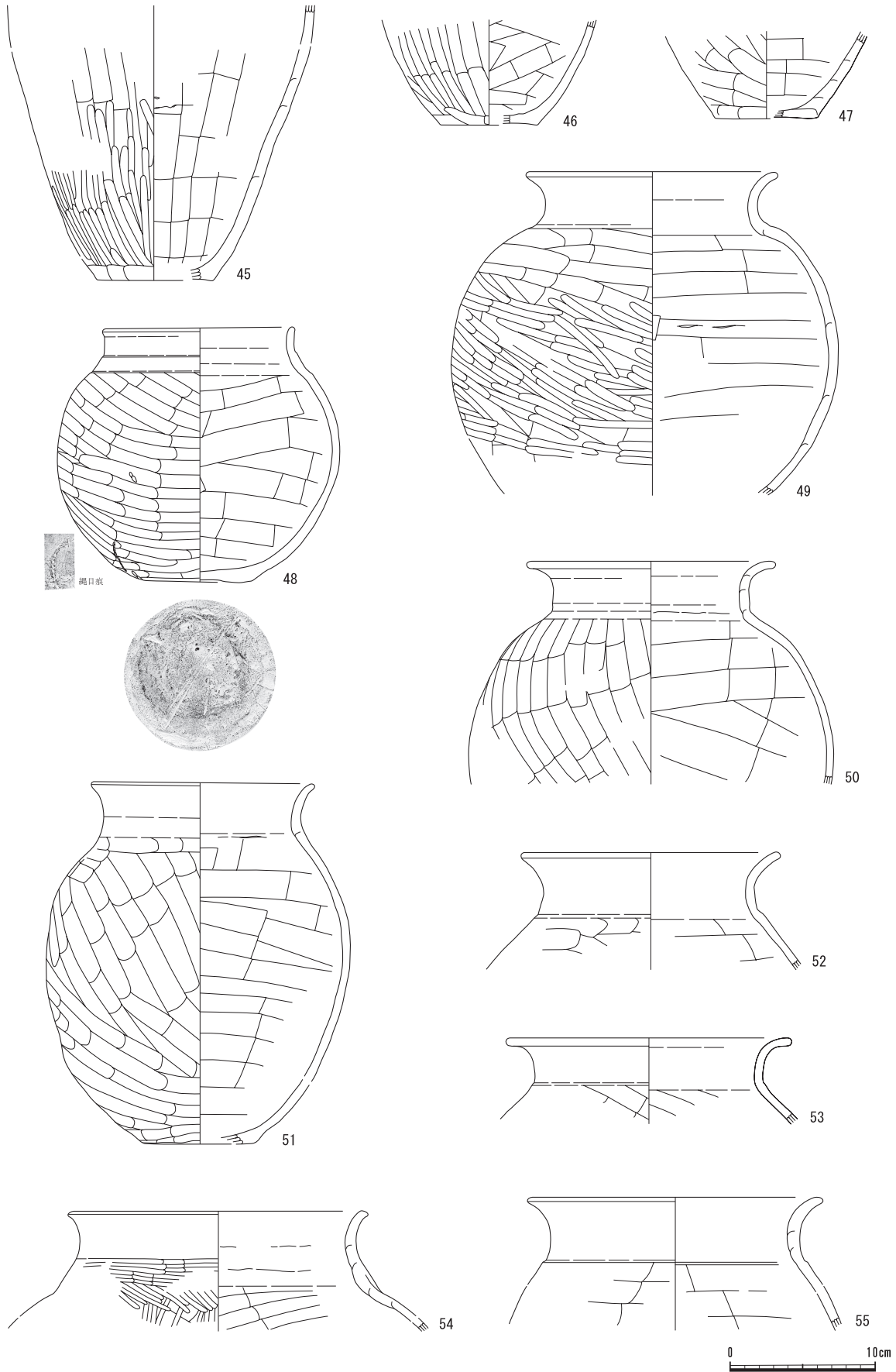
第17図 256号住居跡出土遺物1 (1/4)



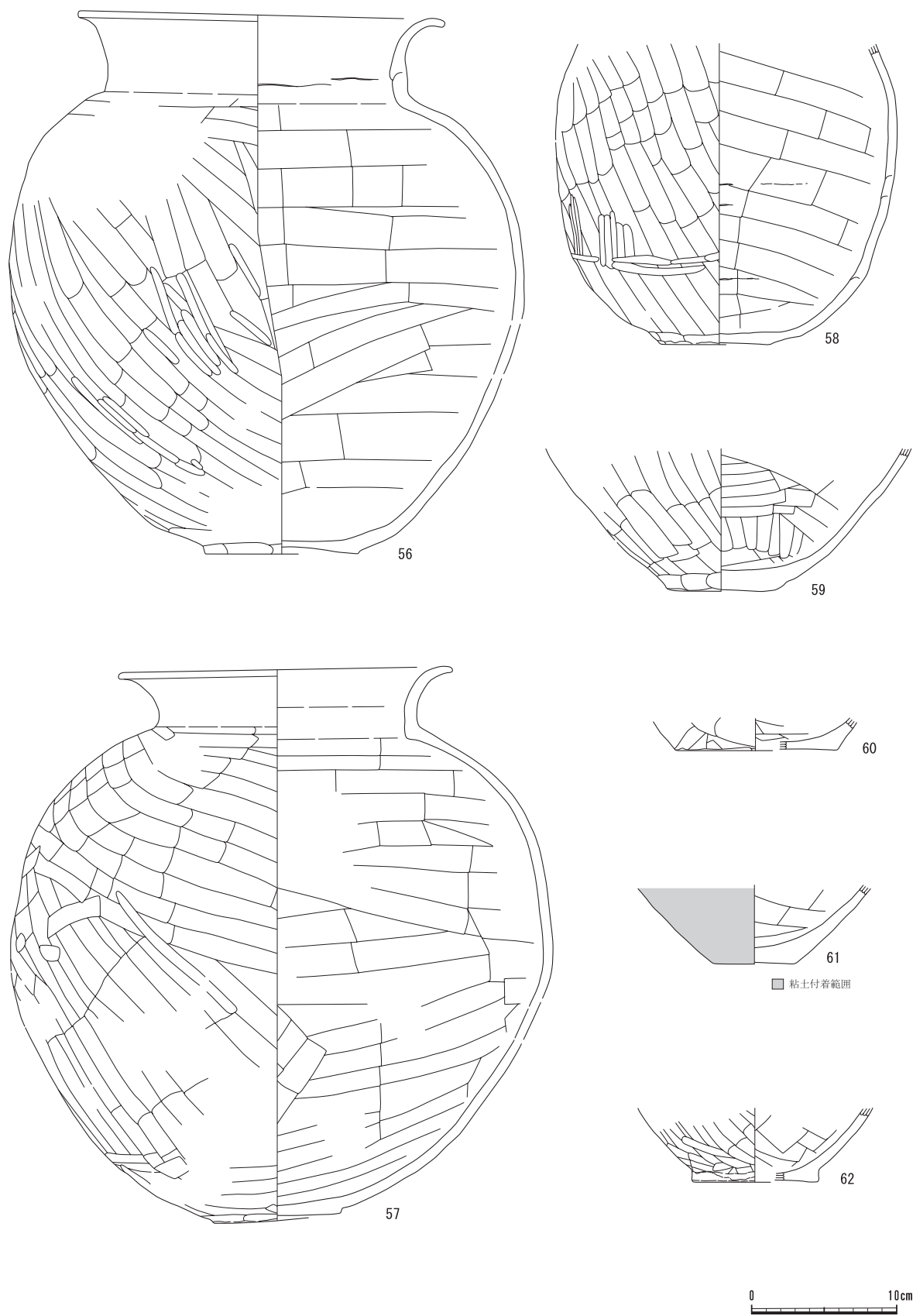
第18図 256号住居跡出土遺物2 (1/4)



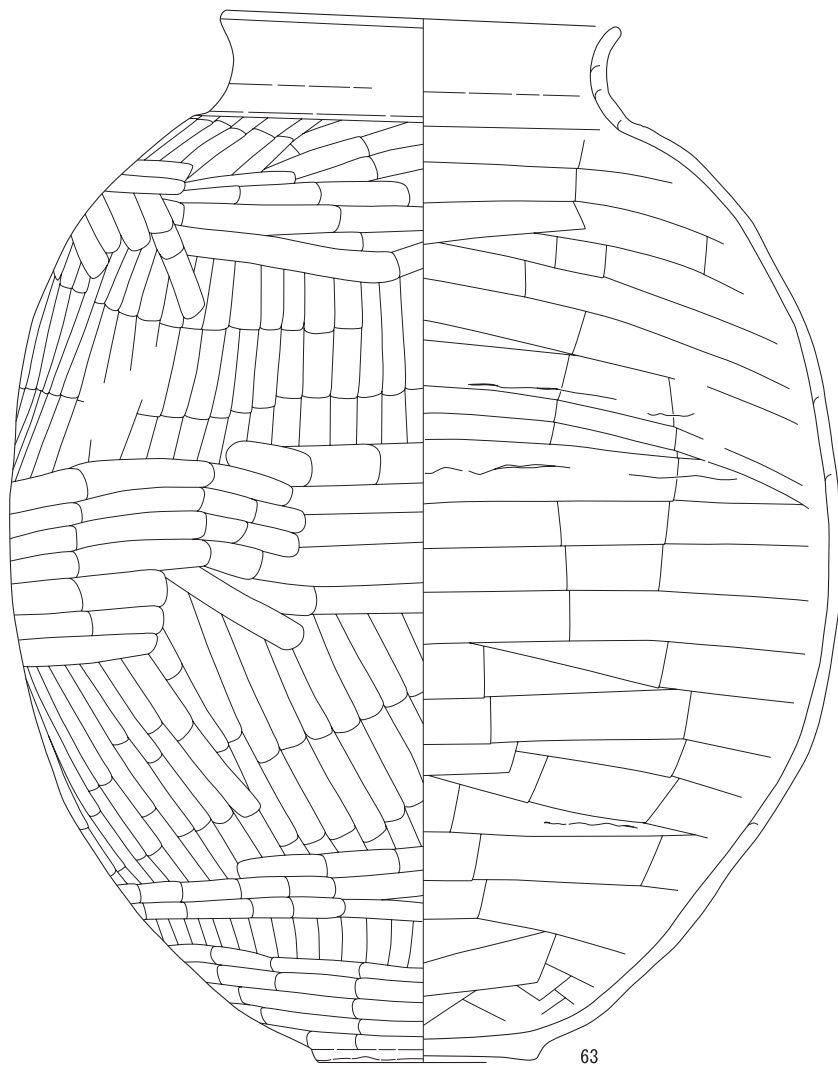
第19図 256号住居跡出土遺物3 (1/4)



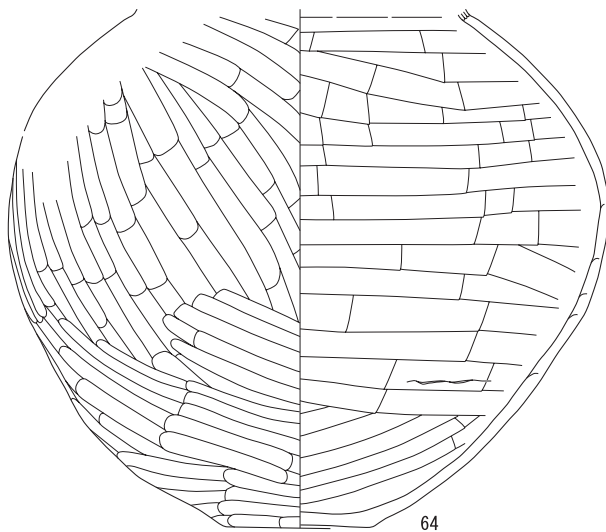
第20図 256号住居跡出土遺物4 (1/4)



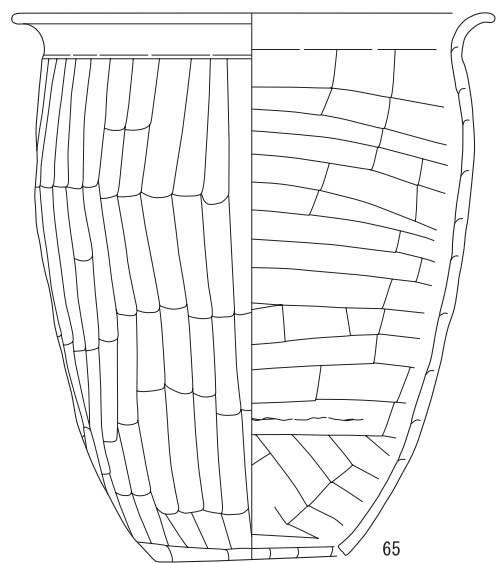
第21図 256号住居跡出土遺物5 (1/4)



63



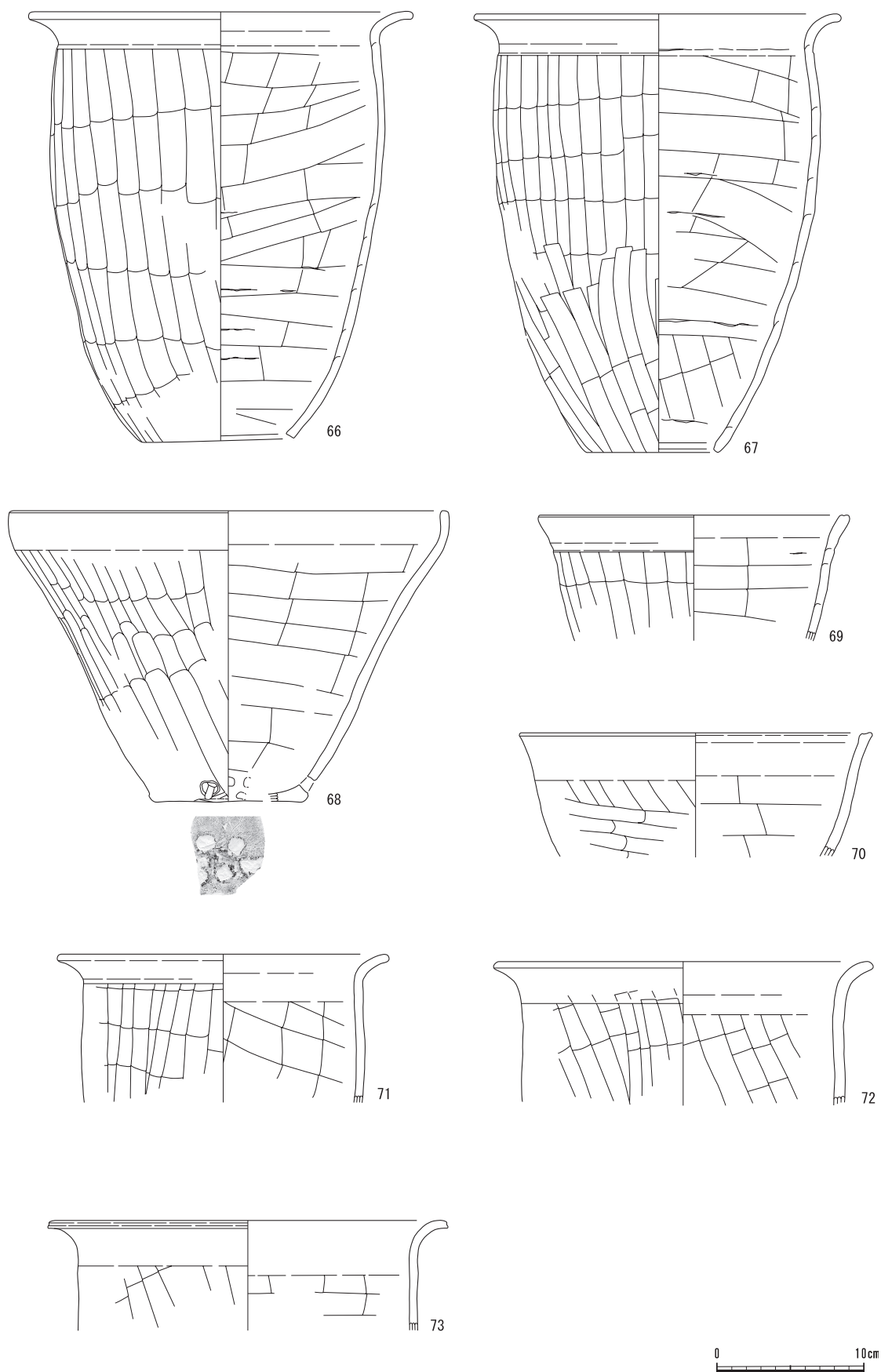
64



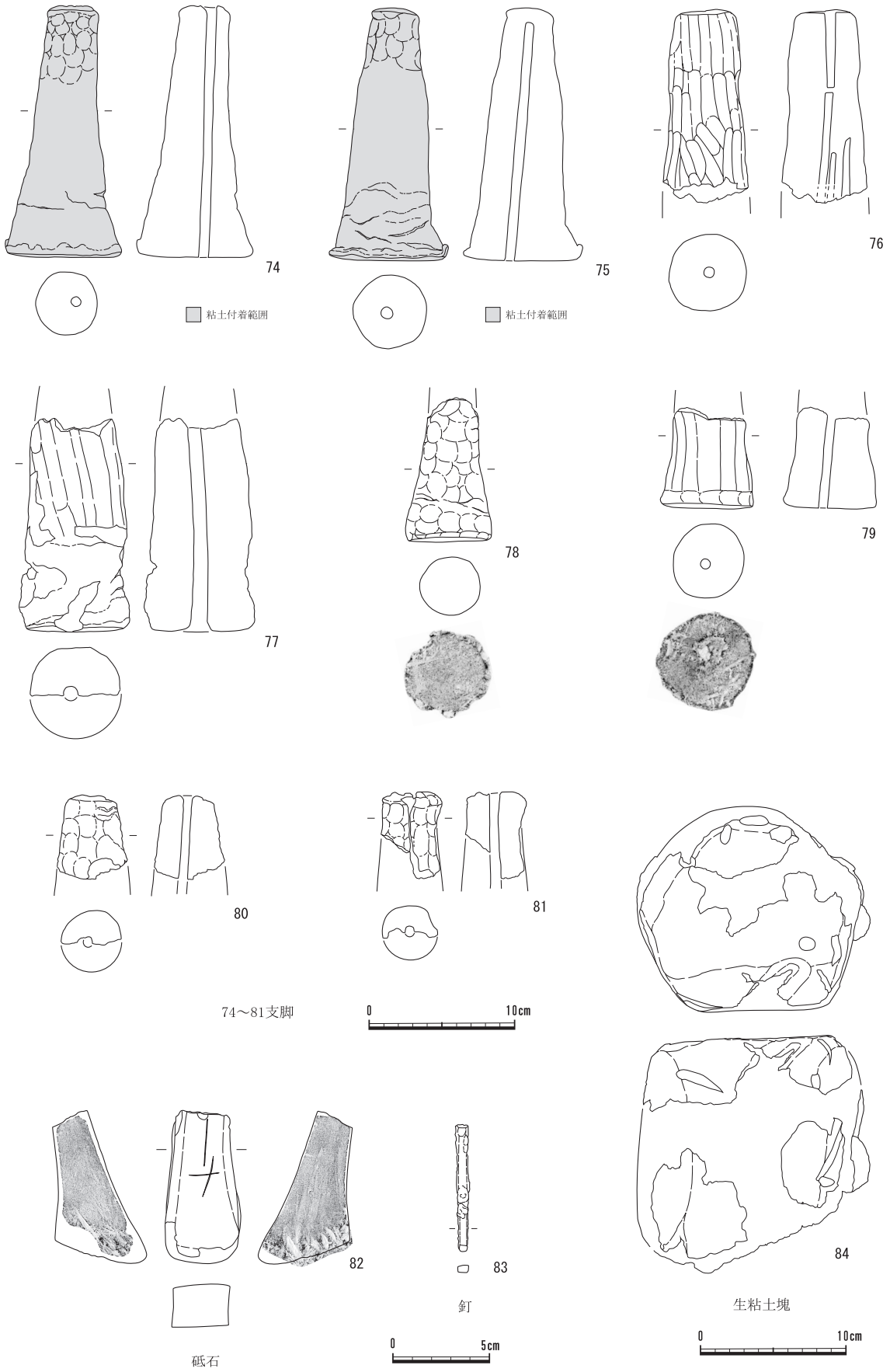
65



第22図 256号住居跡出土遺物6 (1/4)



第23図 256号住居跡出土遺物7 (1/4)



第24図 256号住居跡出土遺物8 (1/4・1/3)

81は高さ5.9cm・幅：上端4.0cm・重さ34.4g。上端部及び長軸半分程を欠損する。

[石製品] (第24図82、第12表)

砥石である。長さ7.7cm・最大幅3.8cm・最大厚4.8cm・重さ142g。上端部を欠損する。

[鉄製品] (第24図83、第13表)

釘である。長さ6.3cm・幅0.5cm・重さ4.3g。断面は長方形。完形品である。

[その他] (第24図84)

生粘土塊である。現存長14.7cm・最大幅13.0cm・現存高15.3cm。重さは遺存状態が悪いため、先行して、パラロイドB72(溶媒キシレン)含浸後石膏により補強復元を行ったため、計測を行えなかった。表面には成形による面が形成されていることから、何らかの目的で使用するために保管していたものと思われる。色調は灰褐色を基調と、粘土中にはスサ状の植物繊維が含まれている。P2の南側の床面上からの出土である。

257号住居跡

遺 構 (第25～27図)

[検出状況] 北コーナー付近は調査区域外である。246・256・259Hを切り、699・701Dに切られる。

[構 造] 平面形：ほぼ正方形。規模：1辺3.70m／確認面からの深さ32～45cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：N-30°-E。壁溝：確認できた範囲では、全周する。上幅20～26cm／下幅6～8cm／深さ10～18cm。床面：入口部から中央にかけて硬化した面が確認できた。カマド：調査区域外にあると思われる。貯蔵穴：東コーナー寄りに位置する西側半分は調査区域外である。平面形は長方形。長軸不明／短軸54cm／深さ49cm。内部から炭化材が出土している。柱穴：主柱穴は4本と思われるが、確認できたのはP1～P3の3本である。深さ66～86cm。入口施設：南西壁の中央に位置する一列に並んだピット状のものが入口梯子穴と思われる。深さ25～36cm。周囲は床面から4～8cmの深さで一段下がっている。

[覆 土] 10層に分層できた。

[遺 物] 土師器坏・鉢・高坏・甕形土器、土製品が出土した。その他として、炭化材と図示していないが、鉄滓(スラッグ)小破片が数点出土している。炭化材の分析結果は、付編76ページを参照。

[時 期] 古墳時代後期(7世紀中葉新段階)。

[所 見] 炭化材が多く出土したことから焼失住居の可能性がある。

遺 物 (第28・29図、第6・11表)

[土 器] (第28・29図1～36、第6表)

1～17は土師器坏形土器、18は土師器鉢形土器、19・20は土師器高坏形土器、21～36は土師器甕形土器である。そのうち、20の高坏形土器と21の甕形土器は本住居跡のものとは時期が合わないため、他の住居跡からの混入品と思われる。

[土製品] (第29図37、第11表)

支脚である。高さ6.3cm・最大幅8.4cm・重さ177g。円筒形で断面は円形。上端部を欠損する。

258号住居跡

遺構 (第30・31図)

[検出状況]。ほとんどが調査区域外であり、さらに256 Hに切られているため、北コーナー付近と貯蔵穴のみの検出である。

[構造] 平面形：方形。規模：不明／確認面からの深さ30cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：不明。壁溝：確認できなかった。床面：硬化した面は確認できなかった。ほぼ直床である。カマド：確認できなかった。貯蔵穴：北コーナー寄りに位置する。西側の上部は256 Hに壊されている。平面形は長方形。長軸92cm／短軸80cm／深さ76cm。周囲及び内部から坏・高坏が出土した。覆土は、ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。柱穴：確認できなかった。入口施設：確認できなかった。

[覆土] ローム粒子・ローム小ブロックを含み、炭化物粒子・炭化材を僅かに含む。

[遺物] 土師器坏・高坏・甕形土器が出土した。

[時期] 古墳時代後期（6世紀初頭）。

[所見] 256 Hにより北壁が大きく破壊されており、カマドの痕跡は不明であった。

遺物 (第31図、第7表)**土器** (第31図、第7表)

1～6は土師器坏形土器、7～9は土師器高坏形土器、10は土師器甕形土器である。

259号住居跡

遺構 (第32図)

[検出状況] 北側は調査区域外である。255・256・257 Hに切られる。

[構造] 平面形：方形。規模：不明×5.90m／確認面からの深さ29～37cm。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：N-35°-W。壁溝：確認できた範囲では巡らされていた。南西側は255 Hの貼床下からの検出であるため、安定した壁溝ではない。上幅25cm／下幅6～10cm／深さ7～25cm。南西壁からP3方向に間仕切りと思われる溝が確認された。深さ11cm。床面：一部硬化した面が確認できた。貼床は2～18cmの厚さで施されていた。カマド：確認できなかった。貯蔵穴：確認できなかった。柱穴：主柱穴と思われるものが4本検出されたが、すべて255・256 Hの貼床下からの検出である。住居床面からの深さ50～72cm。入口施設：P5が入口梯子穴の可能性がある。256 H貼床下からの検出であり、住居床面からの深さ62cm。

[覆土] 7層に分層できた。

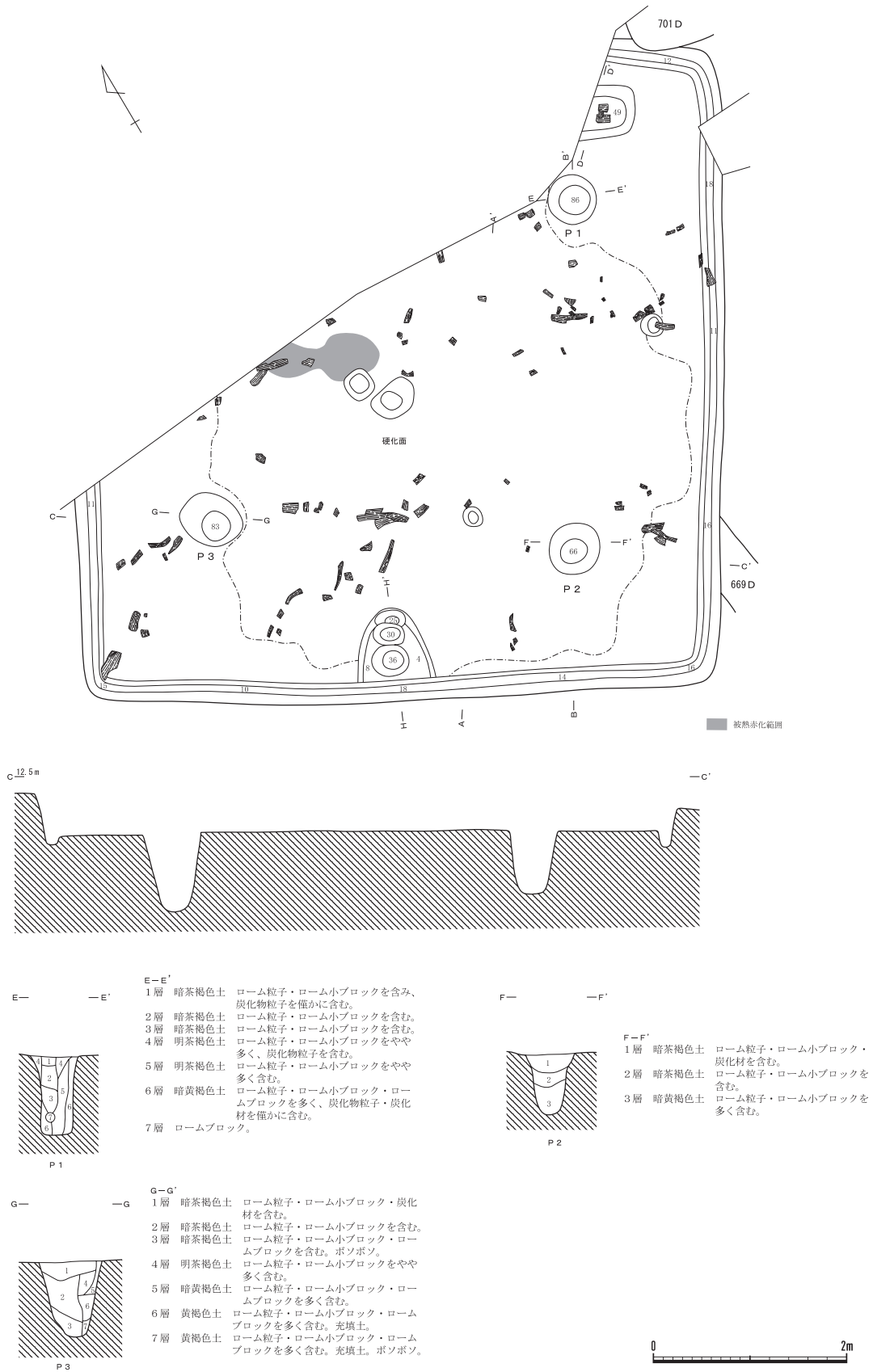
[遺物] 土師器坏・高坏・埴・甕形土器が出土した。

[時期] 古墳時代後期（5世紀後葉）。

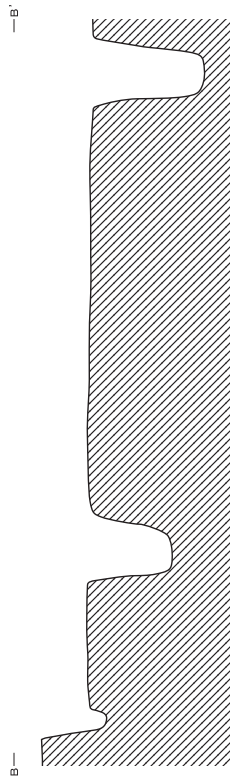
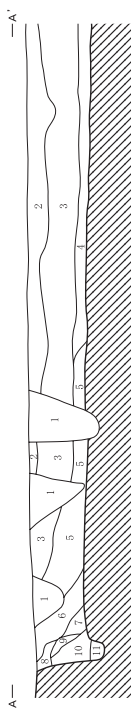
[所見] 256・255 Hによりかなりの破壊を受けている。カマドについては、痕跡も確認できず、炉跡も検出することはできなかった。

遺物 (第33図1、図版19-2、第8表)**土器** (第33図1、図版19-2-1～6、第8表)

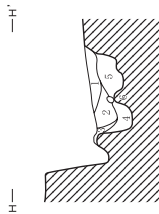
1・5は土師器埴形土器、2・3は土師器坏形土器、4は土師器高坏形土器、6は土師器甕形土器である。



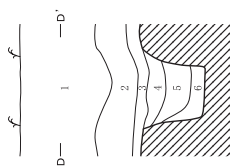
第25図 257号住居跡・炭化材出土状態 (1 / 60)



- A-A'
- 1層 擾乱及び後世のビット。
 - 2層 黒褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロックを僅かに含む。
 - 3層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子・炭化材を含む。
 - 4層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子・炭化材を含む。
 - 5層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子・炭化材を含む。4層よりやや明色。
 - 6層 明茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く、焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子を含む。
 - 7層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子・炭化材を含む。
 - 8層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く、炭化物粒子・炭化材を含む。
 - 9層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
 - 10層 黒褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子・炭化材を含む。
 - 11層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。

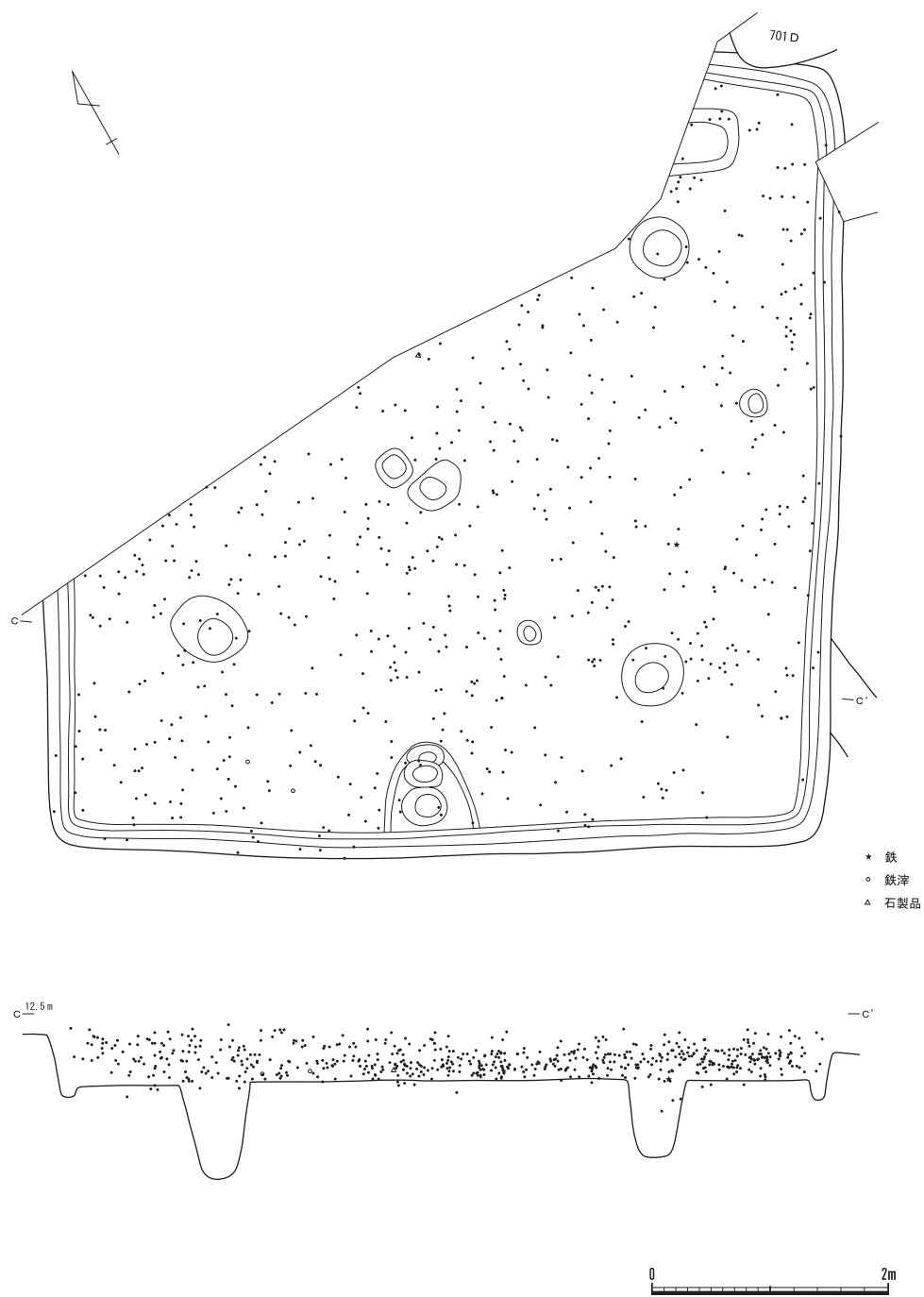


- H-H'
- 1層 明茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く、炭化物粒子を含む。
 - 2層 明茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックをやや多く含む。
 - 3層 黒色土 ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。
 - 4層 明茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む。
 - 5層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
 - 6層 ロームブロック。

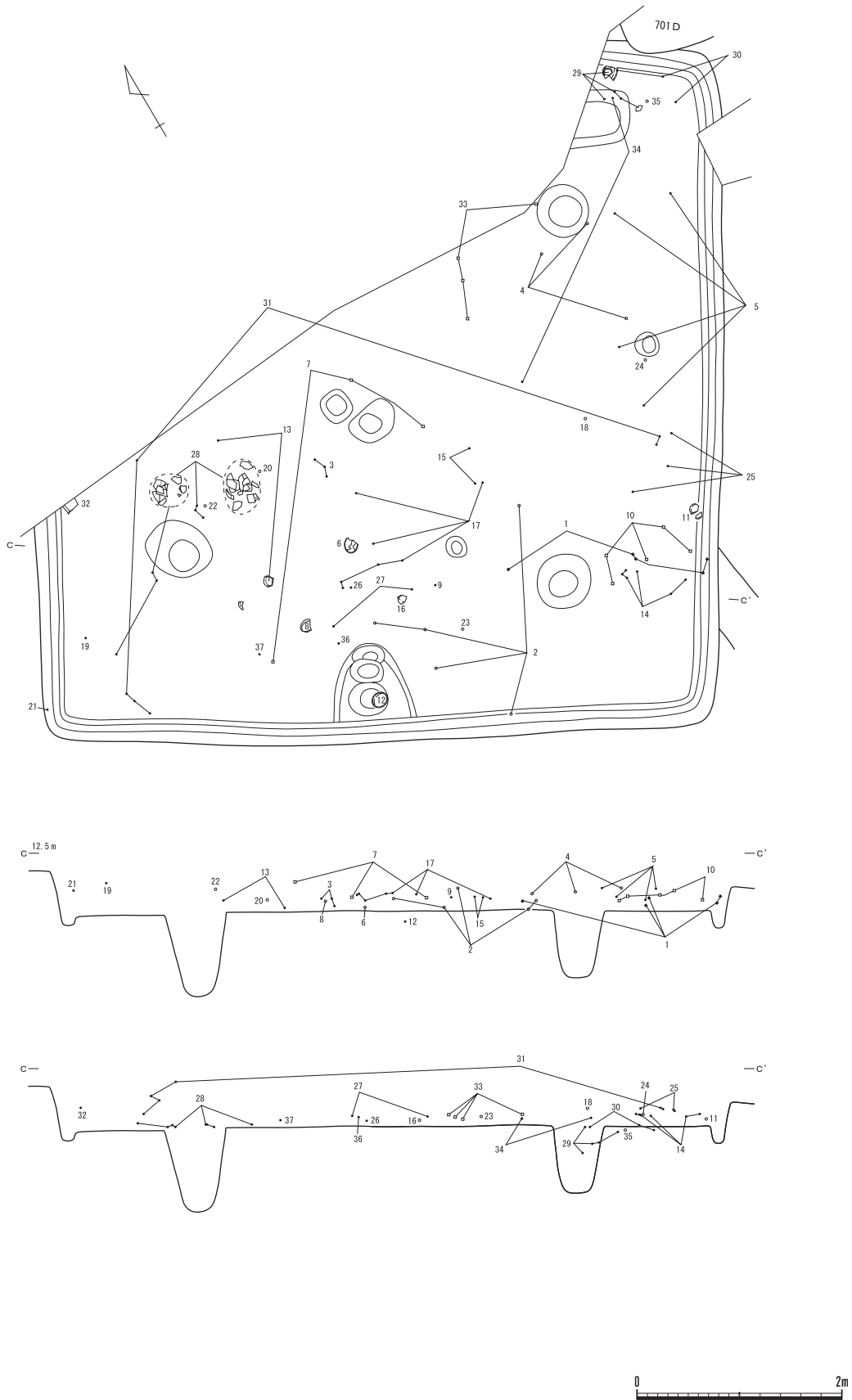


- D-D'
- 1層 表土。
 - 2層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子・炭化材を含む。
 - 3層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロック・炭化物粒子・炭化材を含む。
 - 4層 暗茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロック・炭化物粒子・炭化材を含む。
 - 5層 黒褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子・炭化材を含む。
 - 6層 暗黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。

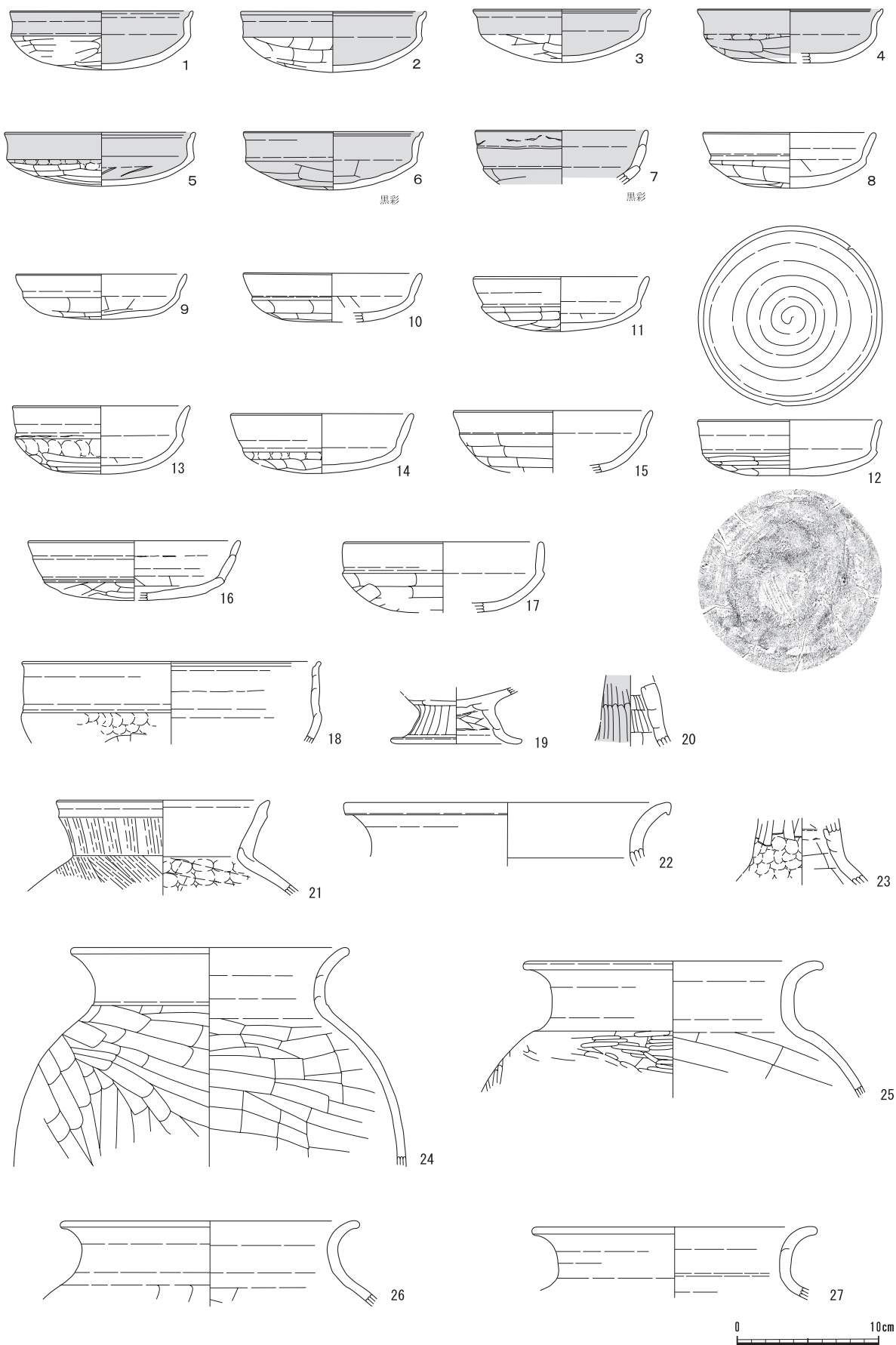




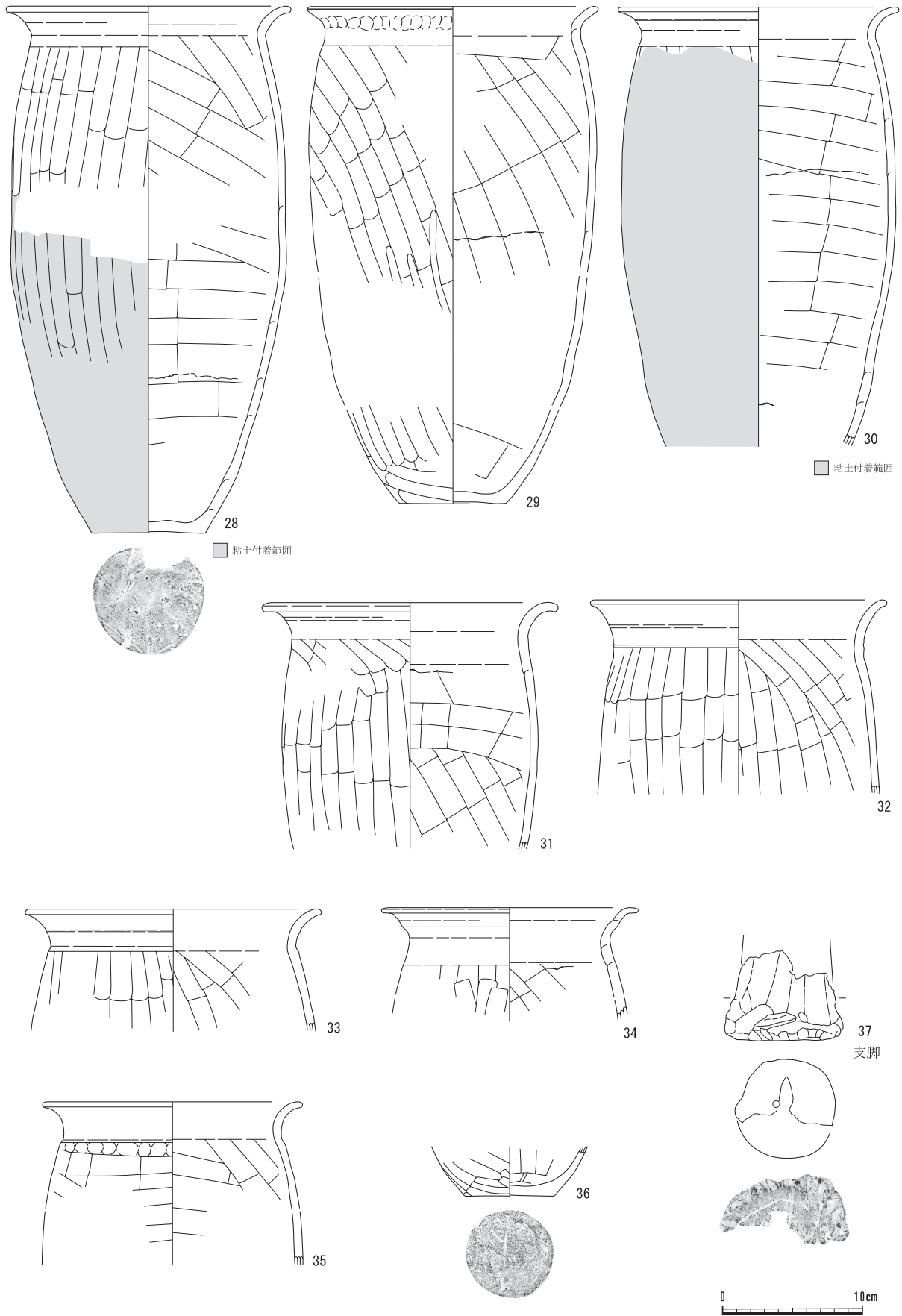
第26図 257号住居跡遺物出土状態1 (1/60)



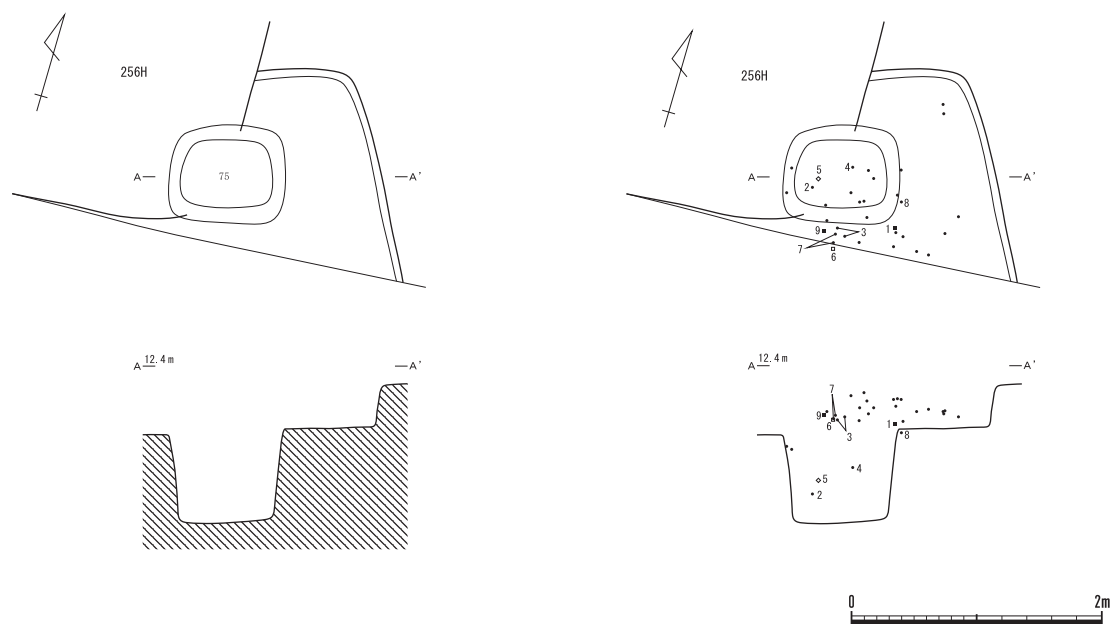
第27図 257号住居跡遺物出土状態2 (1/60)



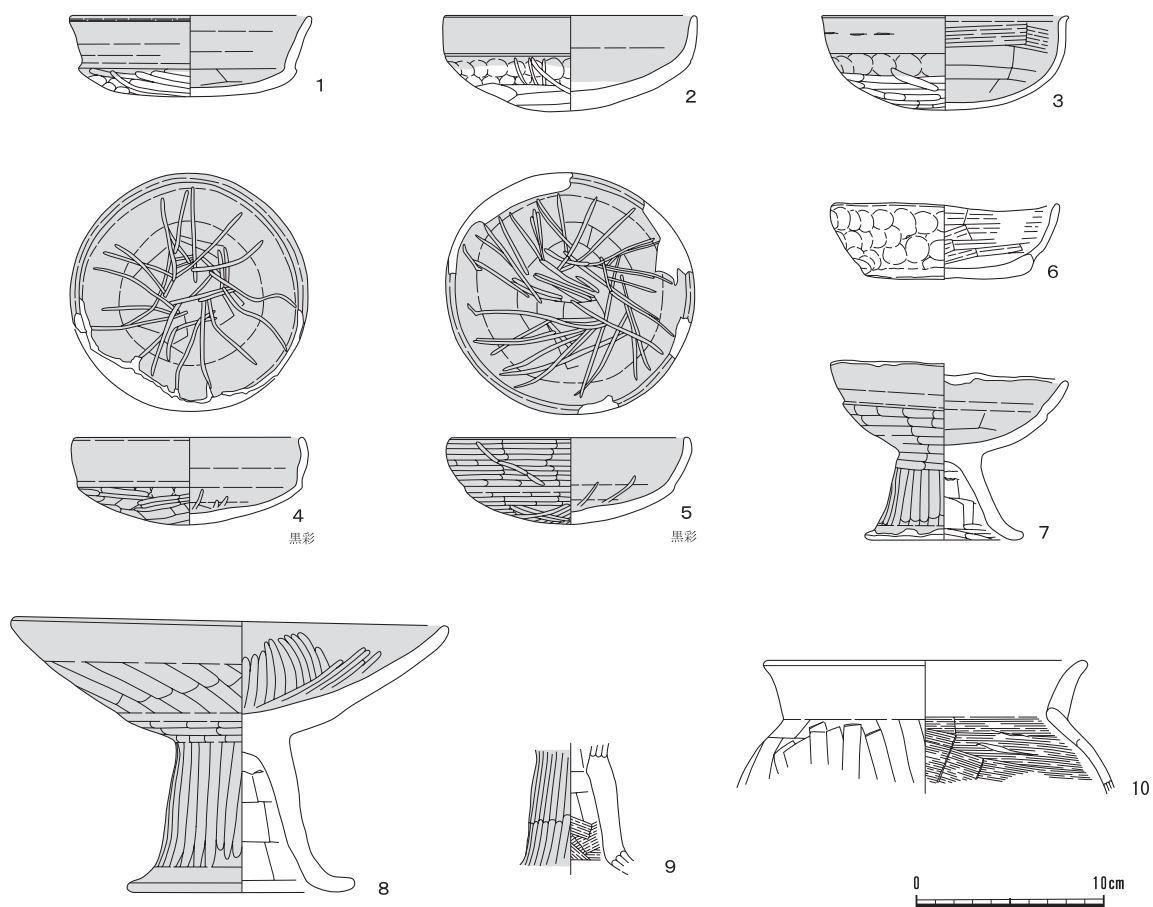
第28図 257号住居跡出土遺物1 (1/4)



第29図 257号住居跡出土遺物2 (1/4)



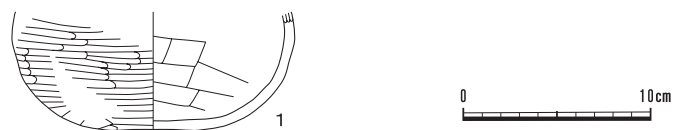
第30図 258号住居跡・遺物出土状態 (1/60)



第31図 258号住居跡出土遺物 (1/4)



第32図 259号住居跡・遺物出土状態 (1/60)



第33図 259号住居跡出土遺物 (1/4)

(3) 土 坑

698号土坑

遺 構 (第34図)

[検出状況] 255 Hを切る。

[構 造] 平面形：隅丸長方形。規模：長軸1.87m／短軸0.62m／深さ26～32cm。壁：西壁はほぼ垂直、東壁は傾斜角度50°程で立ち上がる。長軸方位：ほぼE-W。

[覆 土] 3層に分層できた。

[遺 物] 須恵器坏形土器、土師器甕形土器の小破片1点ずつ出土した。

[時 期] 平安時代(9世紀代)。

遺 物 (図版19-3、第9表)

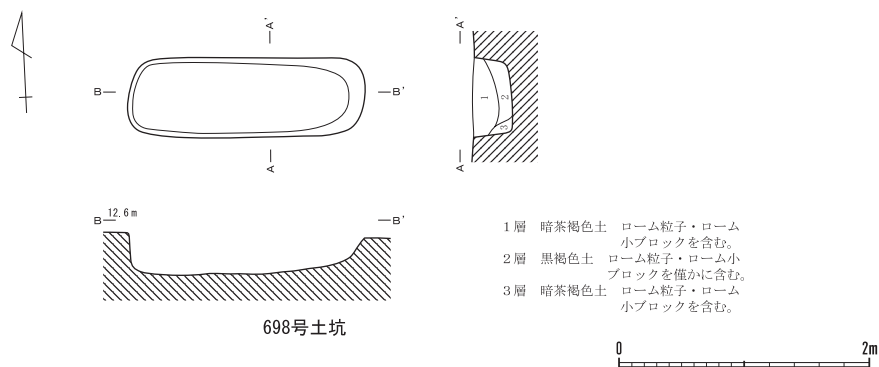
[土 器] (図版19-3-1・2、第9表)

いずれも小破片で、1は須恵器坏形土器、2は土師器甕形土器である。

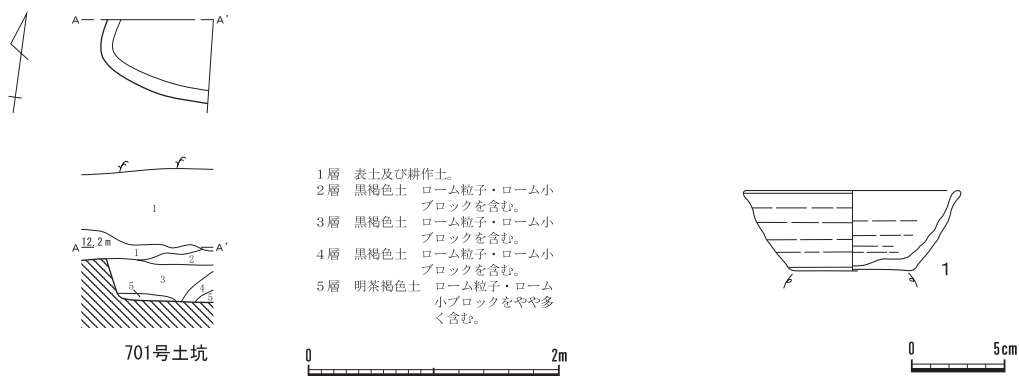
701号土坑

遺 構 (第35図)

[検出状況] 246・257 Hを切る。



第34図 698号土坑 (1/60)



第35図 701号土坑・出土遺物 (1/60・1/4)

[構造] 平面形：方形あるいは長方形か。規模：不明／深さ35cm。壁：傾斜角度70°で立ち上がる。
長軸方位：不明。

[覆土] 4層に分層できた。

[遺物] 須恵器坏形土器が1点出土した。

[時期] 平安時代（9世紀後葉～末葉）。

遺物（第35図1、第10表）

[土器]（第35図1、第10表）

1は須恵器坏形土器である。

第3節 中世以降

（1）概要

中世以降の遺構は、土坑2基（699・700 D）が検出された。ここでの時代設定は、出土遺物がなく、詳細な時代設定を行うことが難しかったが、覆土の観察から中世以降という枠で捉えることにした。

（2）土坑

699号土坑

遺構（第36図）

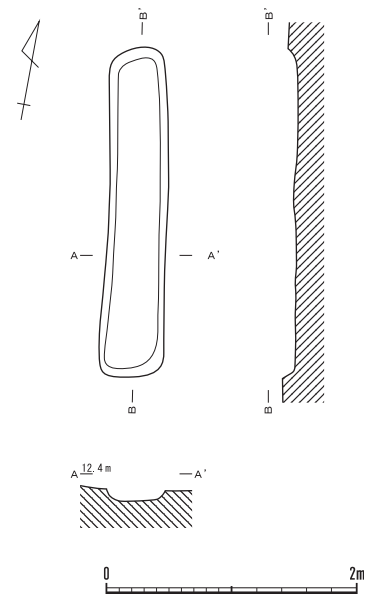
[検出状況] 257 Hを切る。

[構造] 平面形：隅丸長方形。規模：長軸2.63m／短軸0.45～0.51m／深さ9cm。壁：傾斜角度60°程で立ち上がる。長軸方位：N-10°-W。

[覆土] ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。



第36図 699号土坑（1／60）

700号土坑

遺構（第9図）

[検出状況] 255H・256 Hを切る。

[構造] 平面形：隅丸長方形。規模：長軸0.70m／短軸0.57m／深さ65cm。壁：急斜に立ち上がる。長軸方位：N-10°-W。

[覆土] ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックをやや多く含む明茶褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から、中世以降と思われる。

第4節 遺構外出土遺物

ここでは、表土や攪乱から出土した遺物、そして遺構内であるが、明らかに他時期の混入品である遺物を前節までの各時代の出土遺物と区別し、遺構外出土遺物として扱う。

また、古墳時代中・後期の土器では、今回、5世紀中葉から7世紀中葉までの住居跡が密集して重複し、さらに255・256・257 Hについては、7世紀前～中葉（古・新段階）という近接した時期の住居跡の重複であることから、土器の帰属については非常に難しかった。しかし、特に256 H出土として取り上げた土器の中には、明らかに時期の異なる土器が混入していると考えられるため、ここで掲載することにした。

今回、遺構外出土遺物としては、縄文時代の石器、縄文時代の土器、古墳時代後期の土器、中世以降の遺物に分類する。

（1）縄文時代の石器（第37図1・2、第14表）

1は二次的剥離のある剥片で、石材はホルンフェルスである。長さ91.0cm・幅45.1cm・厚さ24.6cm・重量144 g。255 Hからの出土である。

2は敲石と思われる。石材は砂岩である。長さ128.5cm・幅44.7cm・厚さ41.4cm・重量317 g。257 Hからの出土である。

（2）縄文時代の土器（第37図3～27、第15表）

縄文時代の遺物包含層は確認できず、遺物のほとんどは古墳時代の住居跡覆土への混入品として出土したものである。遺構外出土した土器の総量は、破片数63点、重量740 gであった。時期は早期後半の条痕文系土器が主で39点、452 gと6割を越えている。

3～15は早期後半の条痕文系土器の破片である。3～6は下吉井式と思われる土器でいずれも胎土に僅かな繊維と白色針状物を含み、外面に沈線・平行沈線が施文されている。

7～15は貝殻条痕文のみ施文する土器である。10は裏面に約1 cm巾の和積み痕が4段観察できる。

16～19は前期前半の羽状縄文系土器で、いずれも胎土に繊維を含み、縄文のみ施文部分の破片。

20・21は前期末の所産と思われるが型式不明の土器である。20はおそらく3つで1単位の変形爪形文、21は細いLRの縄文を施文する破片である。

22・23は中期前半の土器である。

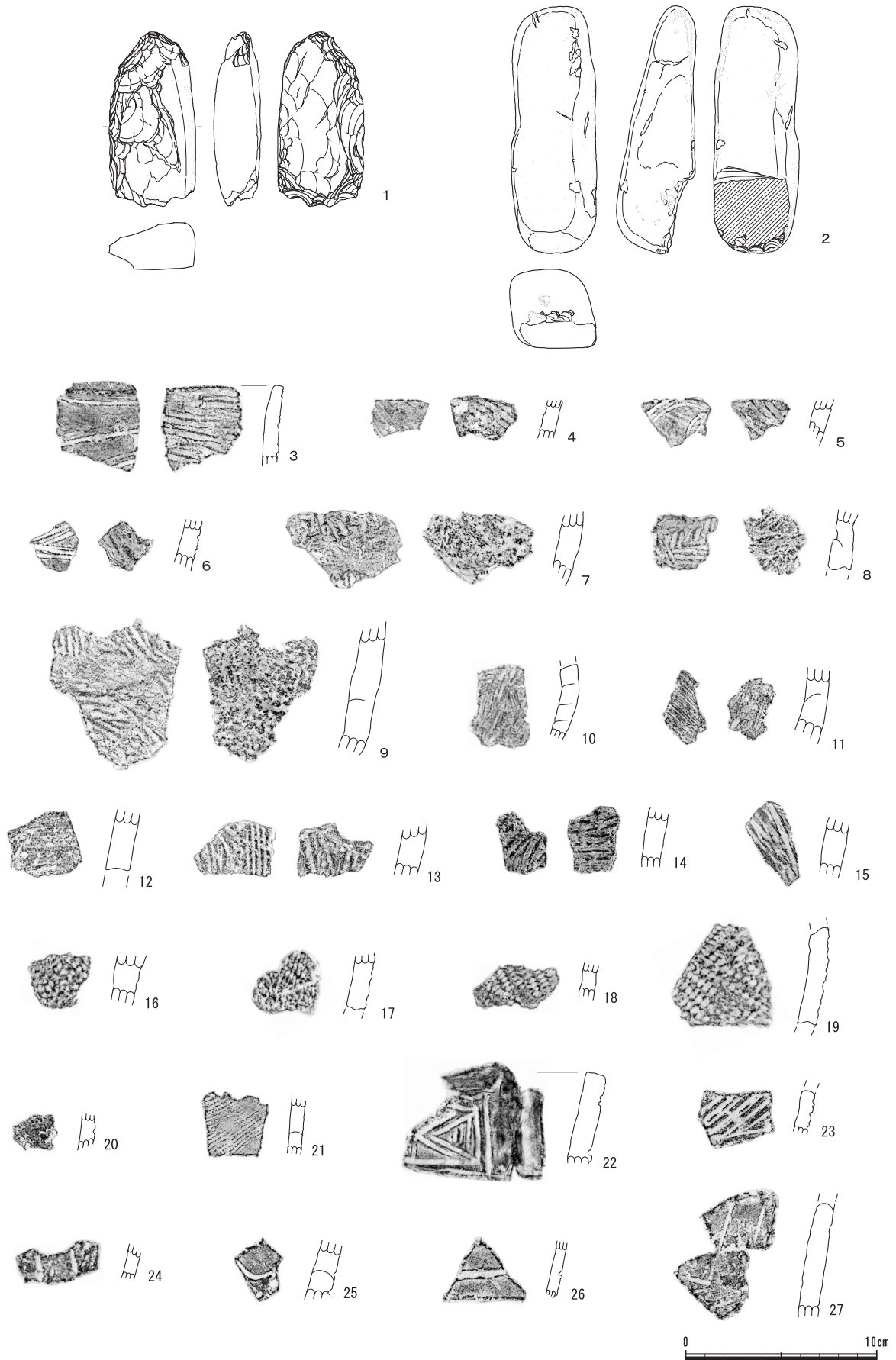
24～27は後期前半の土器群で24・25は称名寺Ⅱ式、26・27は堀之内2式と思われる。

（3）古墳時代後期の土器（第38図28～33、第16表）

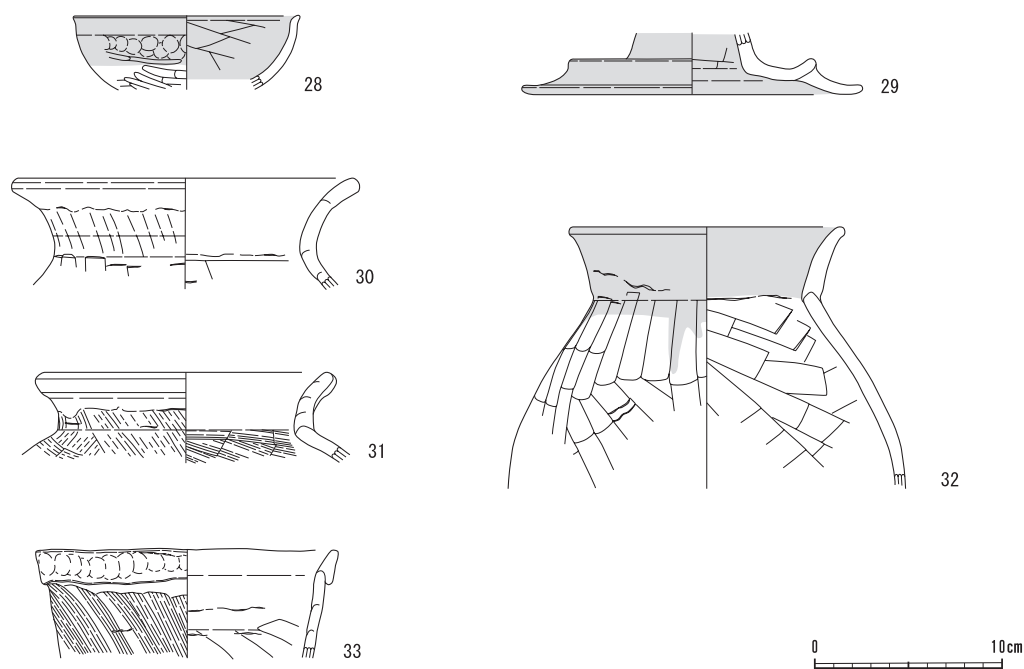
すべて256 Hからの出土であるが、7世紀中葉である256 Hの時期に符号せず、さらに出土状況から判断して、敢えて特定の住居跡に帰属しなかったものである。

土器はすべて土師器である。

28は土師器坏形土器である。赤色の埴タイプのもので、時期は5世紀末葉～6世紀初頭の特徴をもつ。時期から推測すると258 Hからの混入品と思われる。



第37圖 遺構外出土遺物 1 (1/3)



第38図 遺構外出土遺物2 (1/4)

29は土師器高坏形土器である。有段高坏の脚部で、胎土が暗赤褐色を呈することから、人間系土師器と思われる。時期は5世紀中葉～後葉と考えられることから、259 Hからの混入品であろう。

30・31は土師器壺形土器である。いずれも口縁部は複合口縁を呈しており、30は甕形土器の可能性もある。時期は6世紀初頭～前葉に比定されることから、258 Hからの混入品であろう。

32は土師器甕形土器と思われるが、口縁部内外面に赤彩が施されることから壺形土器である可能性もある。「く」の字口縁が崩れていないため、6世紀初頭～前葉に比定できる、258 Hからの混入品と思われる。

33は土師器甕形土器である。複合口縁を呈する小型甕で、外面胴部にはハケ目調整が施され、複合部外面には顕著に指頭押捺による成形痕が残る。時期は6世紀初頭～前葉に比定されることから、258 Hからの混入品と思われる。

(4) 中世以降の遺物 (図版20-34~41、第17表)

[陶磁器・土器]

古墳時代中・後期の住居跡の覆土中あるいは遺構外からの出土である。

34・35は磁器、36~40は陶器、41は土器である。

第4節 遺構外出土遺物

() は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第8図1	土師器 杯	4.6	(11.2)	(4.4)	有段杯/口縁部は外傾する/平底/内面は黒色、外面は底部から体部にかけて黒斑あり/黒色土器であるかは不明	胎土は淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・角閃石を含む	内外面：全体に横方向の粗いヘラ磨き調整	貯蔵穴すぐ西側の覆土中(床上10cm)	30%
第8図2	土師器 杯	6.7	(12.6)	5.6	内湾タイプ/口縁部は丸い/平底/全面赤彩/入間系土師器か	胎土は暗灰褐色～淡橙色	茶褐色粒子・砂粒を含む	内外面：横方向にヘラ磨き調整	貯蔵穴すぐ西側の覆土中(床上10～12cm)	40%
第8図3	土師器 杯	7.0	13.6	4.6	いわゆる内斜口縁杯か/全体に器厚が分厚い/口縁部は屈曲し外傾する/底部は碁笥底/全面赤彩/入間系土師器か	胎土は淡黄褐色～淡橙色	茶褐色粒子・砂粒をやや多く含む	内面：口縁部は横ナデ、体部はヘラナデ後ヘラ磨き調整(暗文か)/外面：口縁部は横ナデ、体部は横方向にのヘラ磨き調整	貯蔵穴の北側の覆土中(床上4・6cm)	70%
第8図4	土師器 杯	(5.6)	13.2	—	いわゆる内斜口縁杯か/口縁部は屈曲し外傾する/全面赤彩/入間系土師器か	胎土は淡黄褐色～淡橙色	茶褐色粒子をやや多く含む	内面：ナデ後極細のヘラ磨き調整(暗文か)/外面：全体にのヘラ磨き調整(暗文か)が施されるが、体部には横方向のヘラ削り面が残る	南東壁近くの覆土中(床上16・17cm)	口縁部～底部付近50%
第8図5	土師器 鉢	(10.2)	18.7	—	大型碗タイプか/器形はいわゆる内斜口縁杯に類似/口縁部は屈曲し外傾する/全面赤彩/入間系土師器か	胎土は淡黄褐色～淡橙色	茶褐色粒子・砂粒を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/のヘラ磨き調整(暗文か)/外面：口縁部は横ナデ、以下は横方向のヘラ削り	貯蔵穴周辺の床面上及び覆土中(床上3～16cm)	口縁部～体部下半60%
第8図6	土師器 高杯	(6.4)	(22.0)	—	有段タイプ/口縁部途中に段をもち、さらに杯部の底部に段をもつ/口縁部は緩やかに外反する/内外面赤彩	胎土は暗黄褐色を基調	茶褐色粒子・雲母・砂粒を含む	内面：ハケ目調整後暗文/外面：ハケ目調整後ナデか/全体にハケ目痕は顕著に残る	貯蔵穴すぐ西側の床面上	杯部のみ60%
第8図7	土師器 高杯	(5.8)	(17.6)	—	杯部の底部に段をもつ/口縁部は外傾する/内面は黒色であるが内外面赤彩/入間系土師器か	胎土は淡黄褐色～淡橙色	茶褐色粒子・砂粒を含む	内外面：横ナデ後暗文(幅1mm程の極細)	貯蔵穴の北側の床面上	杯部のみ40%
第8図8	土師器 高杯	(7.7)	—	11.8	長脚タイプ/裾部は大きく外反する/内面裾部と外面は赤彩/入間系土師器か	胎土は暗黄褐色～淡橙色	茶褐色粒子・砂粒を含む	内面：脚柱部は上半はヘラ状工具による成形痕、下半はヘラ削り、裾部は横ナデ/外面：縦方向のヘラ磨き調整	貯蔵穴すぐ西側の覆土中(床上10cm)	脚台部95%以上
第8図9	土師器 埴	(4.4)	—	—	胴部は算盤玉状/外面赤彩/入間系土師器	胎土は暗赤褐色	角閃石・砂粒・小石を含む	内面：指頭によるナデ/外面：ヘラ磨き調整/内面のナデには指頭による押捺も施され指紋が観察できる	貯蔵穴上層及び南東壁近くの床面上	胴部上半～中位のみ100%
第8図10	土師器 壺	15.2	(11.8)	(6.0)	小型壺か/「く」字状口縁/最大径は胴部中位にもつ/底部は碁笥底状/内外面全体が黒く煤けている/黒色土器か	胎土は淡橙色を基調	砂粒をやや多く、石英を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削りが施されるが、胴部上半はその後ハケ状工具によるナデか	入口施設周辺の床面上及び覆土中(床上7～18cm)	30%/接合不可を復元
第8図11	土師器 壺	(20.5)	(11.8)	(6.0)	「く」字状口縁/口縁部はやや長め/最大径は胴部中位にもつ/全体的に黒く煤けているが口縁部内面及び外面は赤彩と思われる/入間系土師器	胎土は暗赤褐色を基調	砂粒を多く、黄褐色粒子・角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ナデ(スリップか)	貯蔵穴の北側の床面上及び覆土中(床上11cm)	口縁部～胴部下半60%
第8図12	土師器 壺	(22.3)	—	(5.6)	頸部は屈曲/球胴/最大径は胴部中位にもつ/底部はやや碁笥底状/外面赤彩/入間系土師器	胎土は暗赤褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・雲母・小石を僅かに含む	内面：頸部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：頸部は横ナデ、以下は胴部上半～中位が縦方向のナデ(スリップ)か、胴部中位～底部は幅広の粗いヘラ磨き調整	貯蔵穴及び周辺の床面上及び覆土中(床上3～18cm)から散在的	頸部～底部80%
第8図13	土師器 壺	(17.7)	(17.4)	—	「く」字状口縁/最大径は胴部中位にもつ/口縁部内面及び外面は赤彩の可能性あり	淡茶褐色を基調	砂粒を多く、雲母・小石を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：全体にぼんやりと膜が張ったようでナデ(スリップか)と思われる	貯蔵穴上層	口縁部～胴部中位95%以上
第8図14	土師器 壺	(24.4)	(17.8)	—	複合口縁壺/頸部は屈曲し、口縁部にかけて外傾する/球胴/最大径は胴部中位にもつ/全体的に黒く煤けているが口縁部内面及び外面は赤彩の可能性あり	胎土は暗黄褐色を基調	砂粒・小石を多く、茶褐色粒子を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ、胴部下半はその後粗いヘラ磨き調整	貯蔵穴上層及び周辺の覆土中(床上6cm)	口縁部～胴部下半80%

(単位：cm)

第3表 246号住居跡出土遺物一覧(1)

第3章 検出された遺構・遺物

() は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第8図15	土師器 甕	(11.0)	(17.0)	—	「く」字状口縁/最大径は胸部中位にもつものか	淡茶褐色を基調	砂粒を多く、角閃石・石英・小石を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ後胸部中位に斜方向のヘラ削り/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ナデ(スリップか)	住居北側のほぼ床面上	口縁部～胸部中位 20%
第8図17	土師器 杯	(5.5)	(13.4)	—	碗タイプ/口縁部は内湾する/全面赤彩	胎土は淡黄褐色を基調	砂粒を僅かに含む	内面：ヘラナデ/外面：横方向のヘラ磨き調整か	西壁寄りの覆土中(床上45・49cm)	口縁部～体部下半 20%以下

(単位：cm)

第3表 246号住居跡出土遺物一覧(2)

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第11図1	土師器 杯	4.2	12.5	—	いわゆる比企型杯/口縁部は直立気味に外反する/口唇部内面に沈線がまわる/口縁部と底部との境は段をもつ/内面及び口縁部外面は赤彩が施される/人間系土師器	胎土は暗赤褐色を基調	砂粒・小石をやや多く、茶褐色粒子を含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り/外面口縁部直下に指頭押捺による成形痕が残る、指紋も観察できる	貯蔵穴上部及びその周辺の覆土中(床上レベル3～10cm)	ほぼ完形品
第11図2	土師器 杯	3.6	12.4	—	いわゆる比企型杯/口縁部は直立気味に外反する/口唇部内面に沈線がまわる/口縁部と底部との境は段をもつ/内面及び口縁部外面は赤彩が施される/人間系土師器	胎土は淡赤褐色を基調	砂粒・小石をやや多く、茶褐色粒子を含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り/外面口縁部直下に指頭押捺による成形痕が部分的に残る	貯蔵穴上部及び上層(床上レベル3～28cm)	ほぼ完形品
第11図3	土師器 杯	4.3	12.2	—	いわゆる比企型杯/口縁部は直立気味に外反する/口唇部内面に沈線がまわる/口縁部と底部との境は段をもつ/内面及び口縁部外面は赤彩が施される/人間系土師器	胎土は暗赤褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・小石を含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	住居北西コーナー寄りの覆土中(床上3～17cm)	50%
第11図4	土師器 杯	4.5	14.0	—	口縁部は大きく外反し、歪んでいる/口縁部と体部の境は段をもつ/全面黒彩と思われる/在地系土師器	胎土は淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、金雲母を僅かに含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り/外面口縁部直下に指頭押捺による成形痕が残る、指紋も観察できる	カマドすぐ左横の覆土中(床上5cm)	ほぼ完形品
第11図5	土師器 杯	4.4	13.0	—	いわゆる有段口縁杯/口縁部は外傾する/口縁部途中に弱い段がまわる/口縁部と底部との境は段をもつ/全面黒彩の可能性あり/在地系土師器	胎土は暗黄褐色～暗橙色を基調	黄褐色粒子・砂粒をやや多く、角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後口縁部直下のみヘラナデ	貯蔵穴	90%
第11図6	土師器 杯	4.4	12.4	—	いわゆる有段口縁杯/口縁部は外傾する/口縁部途中に弱い段がまわる/口縁部と底部との境は弱い段をもつ/全面黒彩の可能性あり/在地系土師器	胎土は暗黄褐色～暗橙色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後口縁部直下のみヘラナデ	貯蔵穴	80%
第11図7	土師器 杯	3.9	12.6	—	有段杯/口縁部は直立する/口縁部と底部との境は弱い段をもつ/在地系土師器	胎土は暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母を含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ	貯蔵穴	80%
第11図8	土師器 杯	3.6	12.5	6.2	有段杯/口縁部は外傾する/口縁部途中に弱い段がまわる/口縁部と底部との境は弱い段をもつ/平底の底部には木葉痕あり/全面黒彩と思われる/在地系土師器	胎土は暗黄褐色～暗橙色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母・小石を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ	貯蔵穴	80%
第11図9	土師器 杯	4.4	(12.1)	—	有段杯/口縁部は外傾する/口縁部と底部との境は弱い段をもつ/全面黒彩の可能性あり/在地系土師器	胎土は暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母を含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ていねいにヘラナデ	貯蔵穴	70%
第11図10	土師器 杯	(2.8)	—	—	上端部が丸いため、口縁部かもしれないが、ここでは有段杯の底部として扱った/在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・角閃石を僅かに含む	内面：横ナデ/外面：ヘラ削り	カマド左前の床面上	底部のみ 30%

(単位：cm)

第4表 255号住居跡出土遺物一覧(1)

() は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第11図11	土師器 環	(4.1)	(11.6)	—	有稜環/口縁部は大きく外反する/口縁部と底部との境は稜をもつ/在地系土師器	黄褐色	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	P 1 北側の覆土中(床上5cm)	口縁部~胴部中位30%
第11図12	須恵器 高環	(3.0)	—	(8.2)	短脚タイプか/脚端部は平坦/陶器製品の可能性あり	暗青灰色	白色砂粒を僅かに含む	ロクロ成形	カマド右横の覆土中(床上30cm)	脚部20%以下
第11図13	土師器 甕	35.2	19.2	7.6	長甕/口縁部は外反する/口縁部と胴部との境は稜をもつ/最大径は口縁部と胴部上半のほぼ同位置/底部に木葉痕あり/在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・角閃石・金雲母を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ていねいなヘラナデ(スリップか)	カマド右前の床面上	90%
第11図14	土師器 甕	35.4	19.2	7.6	長甕/口縁部は外反する/口縁部と胴部との境は稜をもつ/底部に木葉痕あり/在地系土師器	暗黄褐色~淡橙色	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・角閃石・金雲母を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ていねいなヘラナデ(スリップか)	カマド及び右横の床面上及び覆土中(床上3~11cm)	80%
第11図15	土師器 甕	37.2	19.6	7.5	長甕/外反する口縁部の途中に段をもつ/口縁部と胴部との境は段をもつ/最大径は口縁部と胴部上半のほぼ同位置/底部に木葉痕あり/在地系土師器	暗黄褐色~明橙色	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子・角閃石・金雲母を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ていねいなヘラナデ(スリップか)	カマド右前のほぼ床面上	90%
第11図16	土師器 甕	26.5	25.8	9.5	底部は筒抜け式/口縁部は外傾する/口縁部と胴部との境は稜をもつ/最大径は口縁部にもつ/在地系土師器	暗黄褐色~明橙色	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子・角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ(スリップか)、その後胴部下半に縦方向のヘラ磨き調整	カマド右袖部分のほぼ床面上	80%

(単位：cm)

第4表 255号住居跡出土遺物一覧(2)

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第17図1	土師器 環	(2.6)	(13.0)	—	いわゆる比企型環/口縁部は短く外反する/口唇部内面には沈線がまわる/口縁部と底部との境は稜をもつ/内面及び口縁部外面は赤彩が施される/入間系土師器	胎土は暗赤褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子を含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	P 4 上の覆土中(床上36cm)	口縁部~底部付近30%
第17図2	土師器 環	(3.4)	(12.0)	—	いわゆる比企型環/口縁部は外反する/口唇部内面にはやや不明瞭であるが沈線がまわる/口縁部と底部との境は稜をもつ/内面及び口縁部外面は赤彩が施される/入間系土師器	胎土は淡茶褐色を基調	茶褐色粒子・砂粒・小石を含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り/外面口縁部直下は指頭による成形痕が残る	P 3 のすぐ東側の覆土中(床上23cm)	口縁部~底部付近20%
第17図3	土師器 環	(3.5)	(12.4)	—	有段環/口縁部は直立し、口唇部は外反する/口縁部と底部との境は段をもつ/全面黒彩/在地系土師器	胎土は明橙色を基調	砂粒をやや多く、角閃石を僅かに含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ナデ(磨きの)/内面底部には放射状の暗文あり	住居中央付近の覆土中(床上15~52cm)から散在的	口縁部~底部付近30%
第17図4	土師器 環	(4.4)	(13.2)	—	有段環/口縁部は直立する/口縁部と底部との境は段をもつ/全面黒彩/在地系土師器	胎土は黄褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石を僅かに含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ナデ(磨きの)/内面底部には放射状の暗文あり	P 1 やや西側の覆土中(床上28cm)	口縁部~底部付近20%
第17図5	土師器 環	4.0	13.3	—	有稜環/口縁部は直立する/口縁部と底部との境は稜をもつ/全面黒彩と思われる/在地系土師器	胎土は暗黄褐色	砂粒をやや多く、角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	P 2 の東側の床面上	90%
第17図6	土師器 環	4.6	(13.0)	—	有段環/口縁部は外傾する/口縁部と底部との境は弱い段をもつ/全面黒彩と思われる/在地系土師器	胎土は淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子・石英・小石を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ナデ(磨きの)/内面底部に放射状の暗文あり	住居中央付近の覆土中(床上4~35cm)から散在的	口縁部~底部付近20%

(単位：cm)

第5表 256号住居跡出土遺物一覧(1)

第3章 検出された遺構・遺物

() は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第17図7	土師器 杯	4.1	13.2	—	坏身模倣の有段環/口縁部は内傾する/口縁部と底部との境は段をもつ/全面黒彩/在地系土師器	胎土は淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・石英・小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り/内面底部に放射状の暗文あり	P 2 と P 3 の間の覆土中(床上 6 cm)	完形品
第17図8	土師器 杯	4.2	11.8	—	坏身模倣の有段環/口縁部は内傾する/口縁部と底部との境は段をもつ/全面黒彩/在地系土師器	胎土は淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り/内面底部に放射状の暗文あり	P 2 と P 3 の間の覆土中(床上 19 cm)	ほぼ完形品
第17図9	土師器 杯	3.9	(11.6)	—	坏身模倣の有段環/口唇部内面に幅 2.5 mm の沈線がまわる/口縁部は内傾する/口縁部と底部との境は段をもつ/全面黒彩/器形はいわゆる比企型環であるが黒色系土器	胎土は淡茶褐色を基調	茶褐色粒子・砂粒を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り/外面口縁部直下には指頭押捺による成形痕が残る	住居中央の覆土中(床上 12・17 cm)	40%
第17図10	土師器 杯	(4.4)	(13.2)	—	有稜環/口縁部は外反する/口縁部と底部との境は稜をもつ/全面黒彩/在地系土師器	胎土は暗茶褐色を基調	角閃石・砂粒を含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	P 4 の西側の覆土中(床上 33・37 cm)	口縁部～底部付近 20%
第17図11	土師器 杯	(4.7)	(14.0)	—	有段環/口縁部は途中稜がまわり直立する/口縁部と底部との境は段をもつ/全面黒彩と思われる/在地系土師器	胎土は暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	P 4 及び貯蔵穴付近の覆土中(床上 4～35 cm)	口縁部～底部付近 20%
第17図12	土師器 杯	(7.8)	12.6	—	深身の塊タイプ/口縁部は直立する/口縁部と底部との境は稜をもつ/最大径は体部上半にもつ/全面黒彩と思われる/在地系土師器	胎土は淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ナデ(磨きの)	住居中央付近の覆土中(床上 32～38 cm) から散在的	50%
第17図13	土師器 杯	4.8	11.4	—	有段環/口縁部は直立気味にやや外反する/口縁部と体部との境は弱い段をもつ/底部はヘラ削りにより平底風/在地系土師器	暗黄褐色	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・角閃石・小石を僅かに含む	内面：横ナデ(回転ナデか)/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り/外面口縁部直下には指頭押捺による成形痕が残る	P 4 の西側の覆土中(床上 15・16 cm)	ほぼ完形品
第17図14	土師器 杯	(4.5)	(13.1)	—	有段環/口縁部は直立気味に外反する/口縁部と体部との境は弱い段をもつ/全面黒彩の可能性あり/在地系土師器	淡茶褐色	砂粒をやや多く、角閃石を僅かに含む	内面：横ナデ(回転ナデか)/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整/外面口縁部直下には指頭押捺による成形痕が残る	P 3・P 4 付近の覆土中(床上 21・24 cm)	口縁部～底部付近 30%
第17図15	土師器 杯	(3.9)	(15.2)	—	有段環/口縁部は直立する/口縁部と底部との境は弱い段をもつ/在地系土師器	胎土は暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ナデあるは粗いヘラ磨き調整	貯蔵穴付近の覆土中(床上 28・31 cm)	口縁部から底部付近 20% 以下
第17図16	土師器 杯	(3.7)	(12.6)	—	有段環/口縁部はやや外傾する/口縁部と体部との境は弱い段をもつ/在地系土師器	暗橙色	砂粒・茶褐色粒子をやや多く、角閃石を僅かに含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	覆土中	口縁部～底部付近 20% 以下
第17図17	土師器 杯	5.8	(13.5)	—	深身の有稜環/口縁部は外反する/口縁部と底部との境は稜をもつ/全面黒彩の可能性あり/在地系土師器	胎土は暗黄褐色	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ナデ(磨きの)/内面底部に放射状の暗文あり	P 3 付近の覆土中(床上 38～47 cm)	30%
第17図18	土師器 杯	(4.6)	(14.8)	—	有稜環/口縁部は外反する/口縁部と底部との境は稜をもつ/在地系土師器	暗橙色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・小石を僅かに含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ	P 3 の北東側の覆土中(床上 44 cm)	口縁部～底部付近 20%
第17図19	土師器 杯	6.8	14.8	—	深身の塊タイプ/口縁部は外傾する/口縁部と体部との境は弱い段をもつ/在地系土師器	暗黄褐色	砂粒をやや多く、金雲母・小石を僅かに含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削りが施されるが、口縁部直下はその後ヘラナデ/内面底部に放射状の暗文あり	P 3・P 4 付近の覆土中(床上 14～38 cm) から散在的	40%
第17図20	土師器 杯	(6.7)	(14.6)	—	深身の塊タイプ/口縁部は外傾する/口縁部と体部との境は稜をもつ/在地系土師器	暗黄褐色	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・金雲母・石英を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下は粗いヘラ磨き調整か/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラ磨き調整か	P 2・P 3 の間の覆土中(床上 37～44 cm) から散在的	20%

(単位：cm)

第5表 256号住居跡出土遺物一覧(2)

第4節 遺構外出土遺物

() は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第17図21	土師器 環	(5.6)	(11.5)	—	深身の塊タイプ／口縁部はやや内傾する／口縁部と体部との境は弱い段をもつ／最大径は体部中位にもつ／在地系土師器	暗黄褐色	砂粒をやや多く、角閃石・小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後粗いナデ	P 2・P 3の間の覆土中（床上21cm）	口縁部～体部下半20%
第17図22	土師器 環	6.1	13.7	—	深身の塊タイプ／口縁部はやや外反する／口縁部と体部との境は稜をもつ／最大径は体部中位にもつ／在地系土師器	暗黄褐色	砂粒をやや多く、茶褐色粒子を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下は指頭による軽いナデか／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	P 3付近の覆土中（床上26・41cm）	口縁部～体部中位20%
第17図23	土師器 環	4.2	9.5	—	小型の粗製品／器形は底部から口縁部にかけてゆるやかに開く／底部は丸底／在地系土師器	暗橙色	砂粒をやや多く含む	内外面：指頭押捺による成形痕が残る	P 2の北側の覆土中（床上21～23cm）	90%以上
第17図24	土師器 鉢	9.7	15.6	—	長囊の胴部下半のような器形／口唇部は平坦／底部はヘラ削りにより平底風に作られている／口唇部は黒く煤けている／在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、金雲母を僅かに含む	内面：ヘラナデ／外面：底部付近は粗いヘラ削り、口縁部から体部下半は指頭による軽いナデか	P 1のすぐ南側のほぼ床面上	50%
第17図25	土師器 鉢	9.4	(14.0)	5.6	長囊の胴部下半のような器形／口唇部は平坦／底部は平底／在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く含む	内面：ヘラナデ／外面：底部付近はヘラ削り、口縁部から体部下半は指頭による軽いナデ、指頭押捺による成形痕も部分的に観察できる	P 3付近の覆土中（床上24～48cm）から散在的	70%
第17図26	土師器 鉢	(8.7)	(16.4)	—	長囊の胴部下半のような器形／口唇部は平坦／在地系土師器	淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・雲母を僅かに含む	内面：ヘラナデ／外面：指頭押捺による成形痕が全面に残る	南西コーナールの覆土中（床上23cm）	口縁部～底体部下半30%以下
第17図27	土師器 鉢	10.7	19.6	9.6	口縁部は内湾する／口縁部と体部との境は段をもつ／底部は平底気味／人間系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・角閃石・石英を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り／外面体部には部分的に指頭押捺による成形痕が僅かに残る	P 6上層（床上レベル）	完形品
第17図28	土師器 鉢	(10.1)	(17.0)	—	口縁部は内湾する／口縁部と体部との境は弱い稜をもつ／底部は平底気味／人間系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラ磨き調整	住居中央付近の覆土中（床上21～47cm）から散在的	口縁部～体部下半50%
第18図29	土師器 鉢	6.1	24.2	11.0	浅鉢／口縁部は外反する／口縁部と体部との境は弱い段をもつ／底部は平底風／在地系土師器	暗黄褐色	砂粒をやや多く含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り／外面体部は指頭押捺による成形痕が残る	貯蔵穴付近の覆土中（床上24～32cm）	40%
第18図30	土師器 鉢	(9.6)	(26.6)	—	浅鉢タイプ／口縁部は外反する／口縁部と体部との境は弱い稜をもつ／底部は平底気味／人間系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラ磨き調整	南壁中央近くの覆土中（床上21～47cm）	口縁部～体部下半50%
第18図31	土師器 甕	32.4	21.2	6.5	長囊／口縁部は外反する／口縁部と胴部との境は段をもつ／最大径は口縁部と胴部中位のほぼ同位置／外面胴部中位以下には粘土付着あり／底部に木葉痕あり／在地系土師器	淡黄褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・角閃石・金雲母・小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ていねいなヘラナデ（スリップか）	P 2の東側のほぼ床面上	80%
第18図32	土師器 甕	32.9	20.8	6.9	長囊／口縁部は外反する／口縁部と胴部との境は段をもつ／外面胴部上半に沈線状の横線が一周する／最大径は口縁部と胴部上半のほぼ同位置／外面胴部上半以下には粘土付着あり／底部に木葉痕あり／在地系土師器	胎土は暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下は粘土付着によりやや不鮮明であるが、ヘラ削り後ていねいなヘラナデ（スリップか）	P 6北側のほぼ床面上	90%
第18図33	土師器 甕	36.2	(19.5)	6.6	長囊／口縁部は外反する／口縁部と胴部との境は稜をもつ／最大径は口縁部にもつ／底部に木葉痕あり／外面胴部には粘土付着あり／在地系土師器	淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ていねいなヘラナデ（スリップか）、胴部過半には粗いヘラ磨き調整か	P 3東側の覆土中（床上7～23cm）	60%

(単位：cm)

第5表 256号住居跡出土遺物一覧（3）

第3章 検出された遺構・遺物

() は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第18図34	土師器 甕	35.3	21.6	6.0	長甕／口縁部は外反するが、大きく歪んでいる／口縁部と胴部との境は稜をもつ／最大径は口縁部と胴部上半のほぼ同位置／外面胴部は広い範囲で被熱による剥離か／在地系土師器	淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・小石を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ（スリップか）	P 2・P 6 周辺のほぼ床面上から散在的	70%
第19図35	土師器 甕	36.9	(21.0)	(7.0)	長甕／口縁部は外反する／口縁部と胴部との境は稜をもつ／底部に木葉痕あり／在地系土師器	淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ていねいなヘラナデ（スリップか）	P 2・P 6 の周辺の覆土中（床土 21～53cm）から散在的	50%
第19図36	土師器 甕	(26.8)	20.0	—	長甕／口縁部は外反する／口唇部は平坦で沈線がまわる／口縁部と胴部との境は稜をもつ／外面胴部には粘土付着あり／在地系土師器	淡橙色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ（スリップか）	住居中央付近の覆土中（床土 13～24cm）から散在的	口縁部～胴部下半 60%
第19図37	土師器 甕	(22.8)	17.8	—	長甕／口縁部は外反する／口唇部は平坦で沈線がまわる／口縁部と胴部との境は稜をもつ／在地系土師器	淡橙色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ（スリップか）	南壁から P 3 付近の覆土中（床土 12～38cm）から散在的	口縁部～胴部下半 80%
第19図38	土師器 甕	(16.7)	(19.8)	—	長甕／口縁部は外反する／口唇部はやや平坦に作られている／在地系土師器	淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ（スリップか）	南壁から P 6 付近の覆土中（床土 33～40cm）から散在的	口縁部～胴部 50%
第19図39	土師器 甕	(22.8)	18.7	—	長甕／口縁部は外反する／口唇部は平坦で沈線がまわる／口縁部と胴部との境は稜をもつ／外面胴部には粘土付着あり／在地系土師器	淡橙色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子・角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ（スリップか）	P 3 周辺の覆土中（床土 18～39cm）から散在的	口縁部～胴部 70%
第19図40	土師器 甕	(28.3)	(20.5)	—	長甕／口縁部は外反する／口縁部と胴部との境は段をもつ／最大径は口縁部にもつ／在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ（スリップか）	住居中央付近の覆土中（床土 21～50cm）から散在的	口縁部～胴部下半 40%
第19図41	土師器 甕	(22.0)	—	6.2	長甕／底部に木葉痕あり／在地系土師器	暗橙色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子・小石を含む	内面：ヘラナデ／外面：胴部下半～底部はヘラ削り、胴部中位以上はその後ヘラナデ（スリップか）	カマド前面の床面上	胴部中位～底部 40%
第19図42	土師器 甕	(10.7)	—	(6.8)	長甕／平底／底部に木葉痕あり／在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く含む	内面：ヘラナデ／外面：ヘラ削り	覆土中（床土 8～53cm）から散在的	胴部下半～底部 50%
第19図43	土師器 甕	(12.3)	—	7.2	長甕／底部は平底／底部に木葉痕あり／在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子を含む	内面：ヘラナデ／外面：ヘラ削り後粗いヘラ磨き調整か	P 4 周辺の覆土中（床土 18～32cm）	胴部下半～底部 40%
第19図44	土師器 甕	(4.8)	—	7.0	長甕／底部に木葉痕あり／在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く含む	内面：ヘラナデ／外面：ヘラ削り後ナデ（磨きの）	P 3 周辺の覆土中（床土 11・22cm）	胴部下半～底部 30%
第20図45	土師器 甕	(18.8)	—	(7.8)	長甕／在地系土師器	淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・角閃石を僅かに含む	内面：ヘラナデ／外面：ヘラ削り後粗いヘラ磨き調整か	覆土中（床土 27～36cm）から散在的	胴部中位～底部 40%
第20図46	土師器 甕	(7.2)	—	(6.6)	長甕／底部は平底／在地系土師器	暗橙色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子を僅かに含む	内面：ヘラナデ／外面：ヘラ削り後ヘラナデ（磨きの）	P 2 と P 3 の間の覆土中（床土 27cm）	胴部下半～底部 40%
第20図47	土師器 甕	(6.0)	—	7.0	長甕／在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く含む	内面：ヘラナデ／外面：ヘラ削り	西壁近くの覆土中（床土 8～53cm）	胴部下半～底部 40%
第20図48	土師器 甕	17.4	13.1	6.4	小型丸甕／口縁部は途中に段をもち直立気味／口縁部と胴部との境は段をもつ／最大径は胴部中位にもつ／外面胴部下半～底部にかけて縄目痕や直線状の圧痕が観察できる／在地系土師器	淡橙色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ていねいなヘラナデ（スリップか）	貯蔵穴	完形品

(単位：cm)

第5表 256号住居跡出土遺物一覧（4）

第4節 遺構外出土遺物

() は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第20図49	土師器 甕	(22.1)	17.3	—	丸甕/「コ」の字口縁/口縁部と胴部との境は段をもつ/最大径は胴部上半にもつ/底部は平底/在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・角閃石・金雲母・小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ(スリップか)、その後胴部中位以下にヘラ磨き調整か	住居中央付近の覆土中(床土17~32cm)	口縁部~胴部下半 80%
第20図50	土師器 甕	(15.3)	(17.0)	—	丸甕/「コ」の字口縁/口縁部と胴部との境は段をもつ/在地系土師器	淡橙色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ(スリップか)	P3上の覆土中(床土12cm)	口縁部~胴部中位 30%
第20図51	土師器 甕	24.6	15.2	(7.8)	丸甕/口縁部は外反する/最大径は胴部中位にもつ/底部は平底/在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ(スリップか)	住居中央からP3の覆土中(床土17~32cm)から散在的	70%
第20図52	土師器 甕	(8.1)	17.8	—	丸甕/口縁部は外反する/口縁部と胴部との境は稜をもつ/在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母・小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ(スリップか)	P3の南東側の覆土中(床土16・20cm)	口縁部~胴部上半 60%
第20図53	土師器 甕	(5.8)	(19.6)	—	丸甕/「コ」の字口縁/口縁部と胴部との境は稜をもつ/在地系土師器	暗橙色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ(スリップか)	西壁中央近くの覆土中(床土35cm)	口縁部~胴部上半 20%以下
第20図54	土師器 甕	(8.3)	(20.5)	—	丸甕/口縁部は外反する/口縁部と胴部との境は稜をもつ/在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	西壁からP3の覆土中(床土18~41cm)	口縁部~胴部上半 30%
第20図55	土師器 甕	(9.1)	(20.2)	—	丸甕/口縁部は外反する/口縁部と胴部との境は段をもつ/在地系土師器	淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、橙色粒子・角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ(スリップか)	西壁から貯蔵穴の覆土中(床土29・44cm)	口縁部~胴部上半 30%
第21図56	土師器 甕	36.6	25.0	10.2	丸甕/「コ」の字口縁/口縁部は大きく外反する/口縁部と胴部との境は段をもつ/最大径は胴部上半にもつ/在地系土師器	暗黄褐色~明褐色	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ていねいなヘラナデ(スリップか)、部分的にヘラ磨き調整か	住居中央やや東寄りの覆土中(床土16~28cm)から散在的	60%
第21図57	土師器 甕	38.0	(22.8)	8.6	丸甕/口縁部は外反する/最大径は胴部中位にもつ/底部は平底/在地系土師器	淡黄褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：ヘラ削り後ていねいなヘラナデ(スリップか)	P1からP3の覆土中(床土16~26cm)から散在的	70%
第21図58	土師器 甕	(20.5)	—	7.6	丸甕/底部は平底/在地系土師器	淡黄褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：ヘラナデ/外面：胴部上半~中位はヘラナデ(スリップか)、胴部中位以下はヘラ削り	P6西側の床面上及び覆土中(床土4・14cm)	胴部上半~底部 70%
第21図59	土師器 甕	(9.8)	—	7.4	丸甕/底部は平底/在地系土師器	淡黄褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：ヘラナデ/外面：ヘラ削り後ナデ(磨きの)	P6のすぐ南西側の床面上	胴部下半~底部 40%
第21図60	土師器 甕	(2.2)	—	11.0	丸甕/底部は平底/在地系土師器	淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、小石を僅かに含む	内面：ヘラナデ/外面：ヘラ削り	西壁近くの覆土中(床土23~39cm)	底部 80%
第21図61	土師器 甕	(5.4)	—	5.6	長甕/平底/底部に木葉痕あり/外面に粘土付着/在地系土師器	淡黄褐色を基調/内部は黒色	砂粒をやや多く、角閃石・石英を僅かに含む	内面：ヘラナデ/外面：粘土付着により不明	P6のすぐ南西側の床面上	胴部下半~底部 70%
第21図62	土師器 甕	(5.1)	—	8.6	長甕/底部は平底ではなく、碁笥底状にやや窪んでいる/在地系土師器	淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石を僅かに含む	内面：ヘラナデ/外面：ヘラ削り	西壁近くの覆土中(床土21~50cm)	胴部下半~底部 60%
第22図63	土師器 甕	55.8	(21.2)	11.7	市内最大の超大型丸甕/口縁部は外反する/最大径は胴部中位にもつ/底部は平底/在地系土師器	暗黄褐色~淡橙色	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：ヘラ削り後ていねいなヘラナデ(スリップか)	貯蔵穴内及び及び覆土中(床土2~17cm)から散在的	70%
第22図64	土師器 甕	(27.4)	—	7.8	丸甕/胴部最大径は上半~中位にもつ/底部は平底/在地系土師器	淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・角閃石を僅かに含む	内面：ヘラナデ/外面：ヘラ削り後ヘラナデ(スリップか)	住居中央の覆土中(床土14~25cm)	胴部上半~底部 60%

(単位：cm)

第5表 256号住居跡出土遺物一覧(5)

第3章 検出された遺構・遺物

() は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第22図65	土師器甌	28.9	25.5	10.0	底部は筒抜け式／口縁部は外反する／口縁部と胴部との境は稜をもつ／最大径は口縁部にもつ／在地系土師器	暗黄褐色～暗橙色	砂粒・黄褐色粒子・橙色粒子をやや多く、小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ていねいなヘラナデ（スリップか）	貯蔵穴	ほぼ完形品
第23図66	土師器甌	29.3	25.8	10.4	底部は筒抜け式／歪みのため最大口径27.5cm／口縁部は外反する／口縁部と胴部との境は稜をもつ／最大径は口縁部にもつ／全面煤けている／在地系土師器	淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ていねいなヘラナデ（スリップか）	貯蔵穴	80%
第23図67	土師器甌	29.6	24.8	8.8	底部は筒抜け式／口縁部は外反する／口縁部と胴部との境は稜をもつ／最大径は口縁部にもつ／在地系土師器	淡黄褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ていねいなヘラナデ（スリップか）	P 2・P 6付近の床面上及び覆土中（床上2～7cm）	70%
第23図68	土師器甌	19.6	(29.6)	(10.0)	多孔タイプ／底部から口縁部にかけて大きく開く器形／口縁部はやや内湾する／底部およびその直上に孔が内側から穿たれている／孔の大きさは直径約8mm／在地系土師器	淡茶褐色～暗橙色	砂粒をやや多く、小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、胴部は下半がヘラ削り、上半はヘラナデ（スリップか）	住居中央からP 6付近の覆土中（床上25～28cm）	30%
第23図69	土師器甌	(8.1)	(21.0)	—	口縁部は外反する／口唇部上端に沈線がまわる／最大径は口縁部にもつ／在地系土師器	明橙色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ（スリップか）	住居中央と南西コーナーの覆土中（床上16・31cm）	口縁部～胴部上半20%
第23図70	土師器甌	(8.4)	(23.8)	—	口縁部は外反する／口唇部上端に沈線状の段がまわる／最大径は口縁部にもつ／在地系土師器	淡黄褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ（スリップか）	住居中央の覆土中（床上28cm）	口縁部～胴部上半20%以下
第23図71	土師器甌	(10.0)	(22.4)	—	長囊の可能性あり／口縁部は外反する／最大径は口縁部にもつ／在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ（スリップか）	南西コーナーの覆土中（床上25cm）	口縁部～胴部上半20%以下
第23図72	土師器甌	(9.7)	(25.6)	—	口縁部は外反する／最大径は口縁部にもつ／在地系土師器	淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・石英を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ（スリップか）	南西コーナーの覆土中（床上35cm）	口縁部～胴部中位20%以下
第23図73	土師器甌	(7.6)	(27.0)	—	口縁部は外反する／口唇部上端に沈線がまわる／口縁部と胴部との境は稜をもつ／在地系土師器	淡黄褐色を基調	砂粒を多く、石英を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	P 4付近の覆土中（床上5～45cm）	口縁部～胴部上半20%以下

(単位：cm)

第5表 256号住居跡出土遺物一覧（6）

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第28図1	土師器杯	4.2	12.8	—	いわゆる比企型杯／口縁部は外反する／口唇部内面には沈線がまわる／口縁部と底部との境は稜をもつ／内面及び口縁部外面は赤彩が施される／人間系土師器	胎土は暗赤褐色を基調	砂粒・小石をやや多く含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	P 2付近の覆土中（床上6～30cm）	70%
第28図2	土師器杯	4.3	13.0	—	いわゆる比企型杯／口縁部は直立気味に外反する／口唇部内面には沈線がまわる／口縁部と底部との境は段をもつ／内面及び口縁部外面は赤彩が施される／人間系土師器	胎土は暗赤褐色を基調	砂粒・小石をやや多く、茶褐色粒子を含む	内面：横ナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	P 2から南西壁のほぼ床面上及び覆土中（床上10～22cm）	50%
第28図3	土師器杯	3.8	12.4	—	いわゆる比企型杯／口縁部は外反する／口唇部内面には沈線がまわる／口縁部と底部との境は稜をもつ／内面及び口縁部外面は赤彩が施される／人間系土師器	胎土は暗赤褐色を基調	砂粒・小石をやや多く、茶褐色粒子を僅かに含む	内面：横ナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	住居中央やや西側の覆土中（床上6～13cm）	50%

(単位：cm)

第6表 257号住居跡出土遺物一覧（1）

() は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第28図4	土師器 杯	3.8	(13.0)	—	いわゆる比企型杯/口縁部は外反する/口唇部内面には沈線がまわる/口縁部と底部との境は稜をもつ/内面及び口縁部外面は赤彩が施される/入間系土師器	胎土は暗茶褐色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子を僅かに含む	内面：横ナデ、底部は軽いナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	P 1 内及び覆土中 (床上 15・19cm)	40%
第28図5	土師器 杯	3.8	13.4	—	いわゆる比企型杯/口縁部は直立気味に外反する/口唇部内面には沈線がまわる/口縁部と底部との境は稜をもつ/内面及び口縁部外面は赤彩が施される/産地不明	胎土は明橙色を基調	砂粒・小石 (最大 10mm) をやや多く、黄褐色粒子を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り/外面直下には指頭押捺による成形痕が残る	南東壁近くの覆土中 (床上 12~26cm)	70%
第28図6	土師器 杯	4.1	12.6	—	いわゆる比企型杯/口縁部は直立気味に外反する/口唇部内面には沈線がまわる/口縁部と底部との境は弱い段をもつ/全面黒彩と思われる/北武蔵型杯の胎土に類似	胎土は暗茶褐色を基調	砂粒・小石を僅かに含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	入口施設の北側の覆土中 (床上 6cm)	80%
第28図7	土師器 杯	3.8	12.2	—	いわゆる有段口縁杯/外傾する口縁部途中に段がまわる/口縁部と体部との境は段をもつ/全面黒彩/産地不明	胎土は暗黄褐色を基調	角閃石・石英・砂粒を含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	住居中央付近の覆土中 (床上 14~29cm)	口縁部~底部付近 20%
第28図8	土師器 杯	3.9	12.1	—	有段杯/口縁部は外傾する/口縁部と体部との境は段をもつ/やや厚手/全面黒彩の可能性あり/在地系土師器	胎土は暗橙色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母・小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	入口施設の北側の覆土中 (床上 11cm)	60%
第28図9	土師器 杯	3.2	(12.0)	—	有段杯/口縁部は外傾する/口縁部と体部との境は弱い段をもつ/在地系土師器	暗黄褐色	砂粒をやや多く、角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	入口施設の北東側の覆土中 (床上 15cm)	30%
第28図10	土師器 杯	3.4	12.5	—	いわゆる有段杯/口縁部は外傾する/口縁部と体部との境は段をもつ/在地系土師器	胎土は明橙色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	南コーナーの覆土中 (床上 11~20cm)	80%
第28図11	土師器 杯	3.9	12.2	—	いわゆる有段口縁杯/外傾する口縁部途中に段がまわる/口縁部と体部との境は段をもつ/全面黒彩の可能性あり/在地系土師器	胎土は明橙色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・石英を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	南東壁に近いの覆土中 (床上 8cm)	80%
第28図12	土師器 杯	4.0	12.9	—	ロクロ成形による土師器と考えられる/器形はいわゆる有段口縁杯/外反する口縁部途中には段がまわる/口縁部と体部との境は段をもつ/全面黒彩の可能性あり/在地系土師器	胎土は暗黄褐色を基調	砂粒・小石をやや多く、角閃石・石英・金雲母を僅かに含む	[成形] ロクロ成形と思われる/内面：渦巻き状 (右回転) の成形痕/外面：底部に静止糸切り痕と思われる痕跡あり [調整] 内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下は底部のみヘラ削り	入口施設のピット内	60%
第28図13	土師器 杯	4.8	12.4	—	いわゆる有段口縁杯/外反する口縁部途中には段がまわる/口縁部と体部との境は段をもつ/全面黒彩の可能性あり/在地系土師器	胎土は暗黄褐色を基調	砂粒・小石をやや多く、角閃石・石英・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下は底部のみヘラ削り/外面口縁部直下には指頭押捺による成形痕が残る	P 3 付近の覆土中 (床上 4・12cm)	60%
第28図14	土師器 杯	4.2	12.8	—	有段杯/口縁部は外傾する/口縁部と体部との境は弱い段をもつ/在地系土師器	暗黄褐色	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	南壁コーナーの覆土中 (床上 10~13cm)	80%
第28図15	土師器 杯	(4.4)	(14.0)	—	有段杯/やや深身タイプで、口縁部は外傾する/口縁部と体部との境は弱い段をもつ/在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・橙色粒子を僅かに含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	住居中央やや南寄りの覆土中 (床上 14・15cm)	口縁部~底部付近 20%
第28図16	土師器 杯	4.2	(15.0)	—	いわゆる有段口縁杯/外傾する口縁部途中に段がまわる/口縁部と体部との境は段をもつ/全面黒彩/産地不明	胎土は暗黄褐色~淡茶褐色	砂粒・小石を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下は粗いヘラ削り	入口施設の北東側の覆土中 (床上 7cm)	20%

(単位：cm)

第6表 257号住居跡出土遺物一覧 (2)

第3章 検出された遺構・遺物

() は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第28図17	土師器 杯	(5.0)	14.0	—	有段環／口縁部は直立する／口縁部と体部との境は段をもつ／在地系土師器	暗黄褐色	砂粒をやや多く、角閃石を僅かに含む	内面：横ナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ、底部はヘラ削りによりやや平底気味か	住居中央やや南寄りの覆土中（床上12～19cm）	40%
第28図18	土師器 鉢	(5.8)	(21.0)	—	深身の碗であろうか／口唇部内面に沈線がまわる／口縁部は直立する／口縁部と体部との境は段をもつ／全面黒彩色の可能性あり／北武蔵型杯の胎土に類似	胎土は暗茶褐色を基調	小石をやや多く含む	内面：横ナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下は底部付近がヘラ削り、口縁部直下は指頭押捺による成形痕が残る	南東壁中央近くの覆土中（床上19cm）	口縁部～体部上半20%以下
第28図19	土師器 高杯	(4.0)	—	9.2	高杯の脚台部／短脚タイプ／脚台部は短く、裾部は外反する／在地系土師器	暗橙色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・雲母・小石を僅かに含む	内面：杯部はヘラナデ、脚台部は脚柱部がヘラ削り、裾部は横ナデ／外面：杯部はヘラ削り、脚台部は脚柱部がヘラ削り、裾部は横ナデ	西コーナーの覆土中（床上32cm）	杯底部～脚台部90%以上
第28図20	土師器 高杯	(5.0)	—	—	高杯の脚台部／長脚タイプ／混入品と思われる／全面赤彩／人間系土師器か	胎土は淡赤褐色	角閃石・砂粒・小石を含む	内面：ヘラナデ／外面：縦方向のヘラ磨き調整	P3の東側の覆土中（床上12cm）	脚台部50%
第28図21	土師器 甕	(6.2)	(17.0)	—	須恵器模倣の甕と思われる／口唇部は面取りされ複合口縁を呈する／口縁部は外傾する／全面黒彩の可能性あり／混入品の可能性あり	胎土は淡黄褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・石英・小石を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下ヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はナデられるが、全体に粗い目のハケ目痕がうっすらと残る	西壁コーナーの覆土中（床上25cm）	口縁部～胴部上半20%
第28図22	土師器 甕	(4.5)	(23.0)	—	須恵器模倣の甕と思われる／口唇部は面取りされ複合口縁を呈する／口縁部は外反する	胎土は暗橙色	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・金雲母を含む	内外面：横ナデ	P3すぐ東側の覆土中（床上21cm）	口縁部20%以下
第28図23	土師器 甕	(4.7)	—	—	台付甕の脚台部と思われる／裾部は僅かに屈曲し開く／在地系土師器	胎土は淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：ヘラナデ／外面：ヘラ削りであるが、裾部には指頭押捺による成形痕が残る、指紋も観察できる／内面には輪積み痕が顕著に残る	入口施設の東側の覆土中（床上10cm）	脚台部30%
第28図24	土師器 甕	(15.3)	(19.5)	—	丸甕／口縁部は外反する／口縁部と胴部との境は段をもつ／最大径は胴部中位にもつ／在地系土師器	暗橙色を基調	砂粒をやや多く、金雲母・小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ（スリップか）	南東壁中央近くの覆土中（床上10cm）	口縁部～胴部中位30%
第28図25	土師器 甕	(9.6)	(21.0)	—	丸甕／「コ」の字口縁／口縁部との境は稜をもつ／在地系土師器	暗橙色を基調	砂粒をやや多く、金雲母・小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ（スリップか）	南東壁近くの覆土中（床上16～19cm）	口縁部～胴部中位30%
第28図26	土師器 甕	(6.0)	(21.0)	—	丸甕／「コ」の字口縁／在地系土師器	暗橙色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・雲母・小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ（スリップか）	入口施設の北側の覆土中（床上8cm）	口縁部～胴部上半30%
第28図27	土師器 甕	(5.0)	(20.0)	—	丸甕／「コ」の字口縁／在地系土師器	明橙色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：横ナデ	入口施設の北側の覆土中（床上11cm）	口縁部～胴部上半40%
第29図28	土師器 甕	37.5	20.4	7.8	長甕／口縁部は外反する／口縁部と胴部との境は稜をもつ／最大径は口縁部と胴部上半のほぼ同位置／外面胴部には粘土付着あり／底部に木葉痕あり／在地系土師器	暗橙色を基調	砂粒・金雲母をやや多く、小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ（スリップか）	P3の北側の床面上及び覆土中（床上2～7cm）	70%
第29図29	土師器 甕	35.2	(20.6)	7.5	長甕／口縁部は外反する／口縁部と胴部との境は弱い段をもつ／最大径は口縁部と胴部中位のほぼ同位置／在地系土師器	暗橙色を基調	砂粒・金雲母をやや多く、黄褐色粒子・小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ（スリップか）後縦方向の粗いヘラ磨き調整か／外面口縁部には僅かに指頭押捺痕あり	貯蔵穴内及び覆土中（床上4～11cm）	40%
第29図30	土師器 甕	(31.3)	(20.0)	—	長甕／外反する口縁部途中に弱い段がまわる／最大径は口縁部と胴部中位のほぼ同位置／外面の胴部全体には粘土付着あり／在地系土師器	暗橙色を基調	砂粒をやや多く、金雲母・小石を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ（スリップか）	東コーナーの覆土中（床上3～8cm）	口縁部～胴部下半40%

(単位：cm)

第6表 257号住居跡出土遺物一覧（3）

第4節 遺構外出土遺物

() は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第29図31	土師器 甕	(17.5)	(21.0)	—	長甕/外反する口縁部途中に弱い段がまわる/口縁部と胴部との境は稜をもつ/在地系土師器	淡橙色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子・小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はていねいなヘラナデ(スリップか)	覆土中(床上18~50cm)から散在的	口縁部~胴部中位 40%
第29図32	土師器 甕	(13.8)	(21.0)	—	長甕/外反する口縁部途中に弱い段がまわる/口縁部と胴部との境は段をもつ/在地系土師器	淡橙色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・角閃石・石英を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はていねいなヘラナデ(スリップか)	北西壁近くの覆土中(床上22cm)	口縁部~胴部中位 20%
第29図33	土師器 甕	(8.7)	(21.0)	—	長甕/外反する口縁部途中に弱い段がまわる/口縁部と胴部との境は稜をもつ/在地系土師器	明橙色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はていねいなヘラナデ(スリップか)	P1の周辺の覆土中(床上9~13cm)	口縁部~胴部上半 20%以下
第29図34	土師器 甕	(8.1)	(18.2)	—	長甕/外反する口縁部途中に弱い段がまわる/口縁部と胴部との境は稜をもつ/在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・石英を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	貯蔵穴内及び覆土中(床上11cm)	口縁部~胴部上半 20%以下
第29図35	土師器 甕	(11.6)	(18.4)	—	長甕/口縁部は外反する/口縁部と胴部との境は段をもつ/外面に粘土付着あり/在地系土師器	淡茶橙色を基調	砂粒・金雲母をやや多く、黄褐色粒子を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後横方向にていねいなヘラナデ(スリップか)	東コーナーのほぼ床面上	口縁部~胴部上半 20%
第29図36	土師器 甕	(3.5)	—	6.4	長甕/底部に木葉痕あり/在地系土師器	胎土は暗橙色	砂粒をやや多く、角閃石・小石を僅かに含む	内面：ヘラナデ/外面：ヘラ削り	入口施設のすぐ北側の覆土中(床上6cm)	底部のみ 残存

(単位：cm)

第6表 257号住居跡出土遺物一覧(4)

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第31図1	土師器 杯	4.3	12.9	—	有段杯/口縁部は外傾する/口縁部と底部との境は段をもつ/内面及び外面口縁部は赤彩/人間系土師器	胎土は暗赤褐色	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・橙色粒子・茶褐色粒子・石英・金雲母・小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整か	貯蔵穴すぐ南縁の覆土中(ほぼ床面レベル)	ほぼ完形品
第31図2	土師器 杯	5.1	13.5	—	口縁部はやや内湾する/口縁部と底部との境に線がまわる/赤彩は底部内外面を除き施される/外面底部に黒斑あり/産地不明	胎土は淡黄褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・角閃石・小石を僅かに含む	内面：横ナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はハケ状工具によるヘラ削りか/外面口縁部直下に指頭押捺による成形痕が残る	貯蔵穴内	90%
第31図3	土師器 杯	5.0	13.0	—	碗タイプ/口縁部は短く外反する/内面及び外面口縁部は赤彩/外面底部に黒斑あり/産地不明	胎土は淡黄褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・石英・小石を僅かに含む	内面：口縁部は横方向のハケ目調整、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整/外面口縁部直下に指頭押捺による成形痕が僅かに残る	貯蔵穴内	90%
第31図4	土師器 杯	4.6	12.2	—	黒色有段杯/口縁部は内湾する/口縁部と体部の境は段をもつ/内面底部に放射状の暗文あり/全面黒彩/北関東系	胎土は淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、石英・角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	貯蔵穴内	80%
第31図5	土師器 杯	4.6	12.8	—	黒色有段杯/口縁部は内湾する/口縁部と体部の境はやや窪むが段をもつ/内面底部に放射状の暗文あり/全面黒彩/北関東系	胎土は淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、石英・角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ/外面：横方向のヘラ磨き調整	貯蔵穴内	80%
第31図6	土師器 杯	4.0	12.0	8.6	口縁部はやや内湾気味に外傾する/底部は平底/無彩/内面底部に黒斑あり/粗雑品/在地系土師器	暗橙色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・石英・金雲母子を僅かに含む	内面：粗いハケ目調整/外面：全面に指頭によるナデ、押捺による成形痕が残る	貯蔵穴上層(ほぼ床面レベル)	ほぼ完形品

(単位：cm)

第7表 258号住居跡出土遺物一覧(1)

第3章 検出された遺構・遺物

() は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第31図7	土師器高坏	9.3	12.6	8.3	坏部は有段系タイプ/口縁部は外傾する/脚台部は短脚タイプ/裾部は短く外反する/内面脚台部を除き赤彩/入間系土師器	胎土は暗赤褐色	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母・小石を僅かに含む	[坏部] 内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ [脚台部] 内面：脚柱部はヘラ削り、裾部はハケ目調整/外面：脚柱部は縦方向のヘラ削り、裾部は横ナデ	貯蔵穴内	80%
第31図8	土師器高坏	10.8	17.4	9.0	坏部は底部に弱い段がまわるため有段タイプ/口縁部は大きく開くがやや内湾する/脚台部は長脚タイプ/裾部は短く外反する/内面脚台部を除き赤彩/産地不明	胎土は淡橙色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母・小石を僅かに含む	[坏部] 内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り [脚台部] 内面：脚柱部はヘラ削り、裾部はハケ目調整/外面：脚柱部は縦方向のヘラ削り、裾部は横ナデ	貯蔵穴南東縁	90%
第31図9	土師器高坏	(7.0)	-	-	脚部/長脚タイプ/裾部は外反する/外面赤彩/在地区土師器	胎土は暗赤褐色	砂粒を含み、角閃石・小石を僅かに含む	内面：脚柱部は上部がヘラナデ、下部はハケ目調整/外面：縦方向のヘラ磨き調整	貯蔵穴上層(床上4cmレベル)	脚台部の脚柱部90%
第31図10	土師器甕	(7.1)	(17.2)	-	「く」の字口縁/器厚は全体にやや分厚い	淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はハケ目調整/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ(軽いヘラナデか)	覆土中	口縁部~胴部上半30%

(単位：cm)

第7表 258号住居跡出土遺物一覧(2)

挿図・図版番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第33図1	土師器埴	(6.3)	-	(4.6)	体部は算盤玉状/底部は基筒底/外面は赤彩の可能性あり	胎土は淡黄褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・角閃石を僅かに含む	内面：ヘラナデ/外面：横方向のヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	覆土中	体部中位~底部40%
図版19-2-2	土師器坏	-	-	-	いわゆる比企型坏/口縁部は短く外反する/全面赤彩/入間系土師器	胎土は暗赤褐色を基調	茶褐色粒子・砂粒を含む	内外面：横ナデ	覆土中	口縁部小破片
図版19-2-3	土師器坏	-	-	-	内湾タイプ/全面赤彩/産地不明	胎土は淡黄褐色	砂粒を僅かに含む	内外面：横方向の粗いヘラ磨き調整か	住居中央付近の床面上	口縁部破片
図版19-2-4	土師器高坏	-	-	-	内面にも赤彩が施されることから有段高坏の脚台部と思われる/裾部は外反する/全面赤彩/産地不明	胎土は淡茶褐色を基調	茶褐色粒子を含む(砂粒は少ない)	内外面：横ナデ	北西壁中央の近くの覆土中(床上23cm)	脚部の裾部小破片
図版19-2-5	土師器埴	-	-	-	埴の体部上半/体部は算盤玉状と思われる/外面赤彩/入間系土師器と思われる	胎土は暗茶褐色を基調	茶褐色粒子・雲母を含む	内面：粗いヘラ磨き調整/外面：ヘラナデ後粗いヘラ磨き調整/内面には指頭押捺による成形痕が残り、指紋も観察できる	住居中央付近の覆土中(床上7cm)	体部上半破片
図版19-2-6	土師器甕	(3.3)	-	-	底部/底部は平底	胎土は暗茶褐色を基調	砂粒をやや多く、小石を僅かに含む	内面：ハケ目調整/外面：ヘラ削り後縦方向の粗いヘラ磨き調整	北コーナー近くの覆土中(床上13cm)	底部破片

(単位：cm)

第8表 259号住居跡出土遺物一覧

図版番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
図版19-3-1	須恵器坏	-	-	-	底部小破片/底部は平底/東金子窯製品か	灰白色を基調	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・小石を僅かに含む	ロクロ成形/ロクロ回転は→回転/外面底部に回転系切り痕が残る	覆土中	底部小破片
図版19-3-2	土師器甕	-	-	-	いわゆる武蔵型甕/頸部と胴部との境は稜をもつ	明茶褐色	砂粒をやや多く、茶褐色粒子を僅かに含む	内面：横ナデ/外面：頸部は横ナデ、以下は横方向のヘラ削り	覆土中	頸部~胴部上半小破片

(単位：cm)

第9表 698号土坑出土遺物一覧

第4節 遺構外出土遺物

() は現存値及び推定値

図版番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第35図1	須恵器 杯	4.3	(11.5)	(6.2)	口縁部は僅かに肥厚する/ 底部は平底/東金子窯製品 と思われる	暗青灰色 を基調	白色砂粒をや や多く含む	ロクロ成形/ロクロ回転 は右回転/外面底部に回 転糸切り痕が残る	覆土中	20%

(単位: cm)

第10表 701号土坑出土遺物一覧

() は現存値

挿図番号	種類	遺構名	高さ	幅	厚さ	重さ	出土位置	特徴
第11図17	支脚	255H	15.7	上端:(6.5) 下端:8.5	上端:5.3 下端:6.0	-	P6すぐ北側 の床面上	形状は円筒形/断面形は円形/色調は暗橙色/粘土に砂粒をあまり含まない/表面に指頭押捺による成形痕が残り、指紋あり/下端部を僅かに欠損/パラロイドB72含浸(溶媒キシレン)
第24図74	支脚	256H	17.1	上端:3.4 下端:8.0	上端:3.5 下端:7.3	592.0	P6すぐ北側 の床面上	形状は裾広がり/断面形は円形/中心に径0.8cmの穿孔(貫通)あり/色調は暗橙色/粘土に砂粒をやや多く、角閃石・金雲母を含む/全面に粘土付着/表面に指頭押捺による成形痕が残り、指紋あり/完形品
第24図75	支脚	256H	17.3	上端:3.2 下端:8.2	上端:3.0 下端:8.1	638.0	カマド前面の 床面上	形状は裾広がり/断面形は円形/中心に径0.8cmの穿孔(上端貫通なし)あり/色調は暗橙色/全面粘土付着/表面に指頭押捺による成形痕が残る/粘土に砂粒をやや多く、石英・角閃石を含む/完形品
第24図76	支脚	256H	(13.0)	上端:4.0 下端:(5.8)	上端:3.8 下端:(6.0)	(387.0)	北西コーナー 近くの覆土中 (床上17cm)	形状はやや裾広がり/断面形は円形/中心に径0.8cmの穿孔(貫通)あり/色調は暗茶褐色/粘土に砂粒を僅かに含む/表面に縦方向に粗いヘラ削りが施される/下端裾部は欠損
第24図77	支脚	256H	(14.3)	上端:(5.5) 下端:7.6	上端:(2.7) 下端:(6.0)	(406.0)	P4周辺の覆 土中(床上 15~26cm)	形状はやや裾広がり/断面形は円形/中心に径1.0cmの穿孔(貫通)あり/色調は暗茶褐色/粘土に茶褐色粒子・砂粒を含む/表面に指頭押捺による成形痕が残り、指紋も観察できる/上端部及び長軸半分は欠損
第24図78	支脚	256H	(9.9)	上端:(3.5) 下端:5.7	上端:(3.2) 下端:5.8	(249.0)	P2・P6の 東側の覆土中 (床上8cm)	形状は裾広がり/断面形は円形/中心に穿孔なし/色調は暗黄褐色/粘土に砂粒をやや多く、角閃石・金雲母を含む/表面に指頭押捺による成形痕が僅かに残り、指紋も観察できる/下面には繊維圧痕あり/上端部は欠損
第24図79	支脚	256H	(6.8)	上端:(4.7) 下端:6.3	上端:(4.6) 下端:6.2	(244.0)	P3とP6の 間の覆土中 (床上4cm)	形状は裾広がり/断面形は円形/中心に径0.8cmの穿孔(貫通)あり/色調は暗茶褐色/粘土に砂粒をやや多く、石英・小石を含む/表面に指頭によるナデが施され、指紋も観察できる/下面には繊維圧痕あり/上端部は欠損
第24図80	支脚	256H	(5.6)	上端:3.3 下端:(4.9)	上端:(1.6) 下端:(2.1)	(42.6)	P3とP6の 覆土中(床上 14cm)	形状はやや裾広がり/断面形は円形と思われる/中心に径0.5cmの穿孔(貫通)あり/色調は暗茶褐色/粘土に砂粒・スサ状の繊維を含む/表面に指頭押捺による成形痕が残る/下端部及び長軸半分は欠損
第24図81	支脚	256H	(5.9)	上端:4.0 下端:-	上端:(2.0) 下端:-	(34.4)	P3周辺の覆 土中(床上 29・45cm)	形状はてやや裾広がり/断面形は円形と思われる/中心に径0.5cmの穿孔(貫通)あり/色調は暗茶褐色/粘土に黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む/表面に指頭押捺による成形痕が残る/上端部の長軸半分のみ遺存
第29図37	支脚	257H	(6.3)	上端:(6.1) 下端:8.4	上端:- 下端:4.3	177.0	南西壁近くの 覆土中(床上 10cm)	形状は下端が裾広がり/断面形は円形/中心に径0.8cmの穿孔(下端貫通なし)あり/色調は暗黄褐色/粘土に砂粒をやや多く、茶褐色粒子を含む/表面に指頭押捺による成形痕が残る/下面には繊維圧痕あり/上端部及び長軸半分は欠損

(単位: cm, g)

第11表 住居跡出土の土製品一覧

() は現存値

挿図番号	種類	遺構名	長さ	幅	厚さ	重さ	出土位置	特徴
第24図82	砥石	256H	(7.7)	3.8	最大:4.7 最小:2.0	142.0	P4すぐ東側 の覆土中(床 上38cm)	形状は中央付近が薄く、端部が分厚い/断面形は長方形/上端部は欠損している/表面に使用の痕跡と思われる、擦痕や細線が観察できる

(単位: cm, g)

第12表 住居跡出土の石製品一覧

() は現存値

挿図番号	種類	遺構名	長さ	幅	厚さ	重さ	出土位置	特徴
第8図16	釘	246H	(4.7)	最大:0.8 最小:(0.3)	最大:0.6 最小:0.3	(6.3)	北壁近くの覆 土中(床上7 cm)	断面形は長方形/先端部は欠損/第62地点で報告済み
第11図18	不明品	255H	(3.6)	3.0	0.2	(6.6)	カマド上層 (床面レベル)	用途不明品と思われるが、鉄鍍の鍍身部(五角形式)の可能性はある
第24図83	釘	256H	6.3	最大:0.6 最小:0.4	最大:0.4 最小:0.3	4.3	P6のすぐ北 西側の覆土中 (床上33cm)	頭部はやや広くなっている/断面形は台形/先端部は片側がやや尖っている/完形品

(単位: cm, g)

第13表 住居跡出土の鉄製品一覧

第3章 検出された遺構・遺物

挿図番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	特徴	出土位置
第37図1	二次的剥離のある剥片	ホルンフェルス	91.0	45.1	24.6	144	右側縁は表裏面に及ぶ剥離によってシャープエッジが形成される／左側縁は細かい剥離が生じるものの潰れなどは不明瞭となる	255H
第37図2	敲石	砂岩	128.5	44.7	41.4	317	両端の潰れ痕がやや顕著／下方は剥離を伴う／その他の稜・面敲打は散漫である	257H

(単位：mm, g)

第14表 遺構外出土の縄文時代の石器一覧

挿図番号	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物				出土位置	備考	
					石	角	礫	砂			他
第37図3	口縁	平行沈線（波状文？）／内面は貝殻条痕文	赤褐 5YR4/6	下吉井		○		○	織・針	255H	磁石に付く
第37図4	胴	沈線？／内面は貝殻条痕文	赤褐 5YR4/6	下吉井		○		○	織・針	256H	磁石に付く
第37図5	胴	平行沈線（波状文？）／内面は貝殻条痕文	にぶい赤褐 5YR4/4	下吉井		○		○	織・針	256H	磁石に付く
第37図6	胴	平行沈線／内面は貝殻条痕文	赤褐 5YR4/6	下吉井		○		○	織・針	256H	磁石に付く
第37図7	胴	内外面貝殻条痕文	にぶい赤褐 5YR5/4	条痕文系	○			○	白・織	255H	内面は黒褐色 磁石に付く
第37図8	胴	内外面貝殻条痕文	にぶい橙 5YR6/4	条痕文系				○	織	255H	
第37図9	胴	内外面貝殻条痕文	にぶい赤褐 5YR5/4	条痕文系	○			○	白・織	256H	磁石に付く
第37図10	胴	貝殻条痕文／内面に炭化物が付着	明赤褐 5YR5/6	条痕文系	○			○	織	257H	磁石に付く
第37図11	胴	内外面貝殻条痕文	にぶい赤褐 5YR5/4	条痕文系	○		○	○	織	258H	内面は灰黄褐色
第37図12	胴	貝殻条痕文	にぶい黄褐 10YR5/4	条痕文系	○	○		○	白・織	257H	内面はにぶい橙色
第37図13	胴	内外面貝殻条痕文	橙 5YR6/6	条痕文系	○	○		○	白・織・針	257H	
第37図14	胴	内外面貝殻条痕文	にぶい褐 7.5YR5/4	条痕文系	○	○	○	○	織	259H	細礫はチャート亜 円礫が目立つ
第37図15	胴	貝殻条痕文	赤褐 5YR4/6	条痕文系				○	織	259H	磁石に付く
第37図16	胴	縄文RL	にぶい黄橙 10YR7/4	関山					織	255H	内面は黒褐色
第37図17	胴	縄文RL	明褐 7.5YR5/6	関山					織	256H	
第37図18	胴	縄文LR	橙 5YR6/6	羽状縄文系	○		○	○	織	255H	
第37図19	胴	羽状縄文	にぶい黄褐 10YR5/3	羽状縄文系					織	257H	内面はにぶい橙色 磁石に付く
第37図20	胴	変形爪形文	にぶい赤褐 5YR4/4	前期末			○	○		257H	磁石に付く
第37図21	胴	縄文LR	明赤褐 2.5YR5/6	前期末？	○			○		256H	
第37図22	口縁	隆帯／沈線による三角、四角文	にぶい橙 5YR6/4	中期前半	○			○		257H	
第37図23	胴	竹管状工具による集合沈線	にぶい黄橙 10YR6/4	五領ヶ台	○			○	金	257H	
第37図24	胴	沈線／列点文	にぶい橙 7.5YR7/4	称名寺Ⅱ				○		256H	
第37図25	胴	沈線／刺突文	にぶい赤褐 5YR5/4	称名寺Ⅱ				○		255H	
第37図26	胴	沈線	にぶい黄橙 10YR6/3	堀之内2				○		257H	内面はにぶい橙色
第37図27	胴	沈線による三角文	にぶい黄橙 10YR7/4	堀之内2				○		256H 258H	

※ 石：石英 角：角閃石・輝石 礫：細礫 砂：砂粒 織：繊維 針：白色針状物 金：金雲母 白：白色粒子

第15表 遺構外出土の縄文土器一覧

()は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特 徴	色 調	胎 土	成形及び調整	出土位置	遺存度	時 代
第38図28	土師器 坏	(3.9)	(12.0)	—	塊タイプ/口縁部は短く外反する/内面及び外面口縁部～体部は赤彩/258Hからの混入品か	胎土は淡黄褐色	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・金雲母を僅かに含む	内面：ヘラナデ/外面：ヘラ削り後粗いヘラ磨き調整か/外面口縁部直下に指頭押捺による成形痕が残る	256H	口縁部～体部20%以下	古墳後期(5世紀末葉～6世紀初頭)
第38図29	土師器 高坏	(3.3)	—	(18.0)	有段高坏の脚台部/脚台部の裾部に有段をもつ/裾部は大きく外反する/全面赤彩/入間系土師器か/259Hからの混入品か	胎土は暗赤褐色を基調	石英・砂粒・小石を僅かに含む	内面：脚柱部はヘラ削り、裾部は横ナデ/外面：横ナデ	256H	脚台部の脚柱部～裾部20%	古墳後期(5世紀中葉～後葉)
第38図30	土師器 甕	(6.1)	(18.4)	—	甕か/口縁部は複合口縁を呈するが、その後横ナデにより段差を消されている/「コ」の字口縁を基本/258Hからの混入品か	胎土は暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下は縦方向のヘラ削り/外面頸部には僅かにハケ目痕か	256H	口縁部～胴部上半60%	古墳後期(6世紀初頭～前葉)
第38図31	土師器 甕	(4.7)	(15.8)	—	口縁部は複合口縁/「く」の字口縁/258Hからの混入品か	胎土は暗橙褐色を基調	砂粒・小石をやや多く、角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はハケ目調整/外面：口縁部は横ナデ、外面はハケ目調整	256H	口縁部～胴部上半20%	古墳後期(6世紀初頭～前葉)
第38図32	土師器 甕	(14.3)	(14.6)	—	赤彩が施されるため甕か/「く」の字口縁/最大径は胴部中位にもつ/口縁部内外面は赤彩/258Hからの混入品か	胎土は暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子・角閃石・金雲母・小石を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ(スリップか)	256H	口縁部～胴部中位30%	古墳後期(6世紀初頭～前葉)
第38図33	土師器 甕	(5.8)	(16.0)	—	小型甕/複合口縁/最大径は口縁部にもつ/258Hからの混入品か	胎土は淡黄褐色を基調	砂粒を含み、黄褐色粒子・茶褐色粒子・角閃石・雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面：口縁部はハケ目調整/外面口縁複合部には指頭押捺による成形痕が残る	256H	口縁部～胴部中位20%	古墳後期(6世紀初頭～前葉)

(単位：cm)

第16表 遺構外出土の古墳時代後期の土器一覧

()は現存値及び推定値

図版番号	種別	器種	法 量			製作の特徴等	推定産地	出土位置	時 期
			器高	口径	底径				
図版21-34	磁器	碗	(4.4)	—	(3.9)	高台付碗/外面体部に染付あり/文様は草花文/高台には二重圏線がまわる/遺存度は体部～底部30%	肥前系	256 H	17世紀後半
図版21-35	磁器	皿	—	—	—	底部破片/見込み蛇の目刺ぎ	肥前系	遺構外	17世紀前半
図版21-36	陶器	鉢	(4.6)	—	—	口縁部～体部小破片/内面及び口縁部外面に 釉/胎土の色調は淡黄褐色/ロクロ成形	唐津	遺構外	17世紀前半
図版21-37	陶器	灯明受皿	(3.5)	—	—	口縁部～体部破片/内面の鏝は上端が欠損/内外面鉄釉/胎土の色調は暗茶褐色を基調/ロクロ成形	在地系	257 H	18世紀後半
図版21-38	陶器	徳利	(3.8)	2.2	—	口縁部破片/細頸タイプ/口縁部は肥厚/内外面鉄釉/胎土の色調は暗黄褐色/ロクロ成形	瀬戸系	246 H	18世紀後半
図版21-39	陶器	鉢	(4.3)	—	—	大型鉢/口縁部～体部破片/口縁部外面に1カ所切り込みあり/内外面に鉄釉/胎土の色調は暗灰褐色/内面には6本一単位の横位櫛描波状文が施文される	唐津	256 H	17世紀後半
図版21-40	陶器	播鉢	(3.5)	—	—	口縁部破片/口縁部は複合口縁/外面口縁部直下には2本の沈線がまわる/内面にはハケ目あり/内外面鉄釉/胎土の色調は明茶褐色/胎土には白色砂粒・石英・小石を僅かに含む	備前	遺構外	18世紀
図版21-41	土器	焙烙	(2.8)	—	—	底部小破片/底部は平底/外面黒色/胎土の色調は黄白色/内外面ナデ	在地系	257 H	17世紀前半

(単位：cm)

第17表 遺構外出土の陶磁器・土器一覧

第4章 調査のまとめ

本書は、平成21年度に発掘調査を実施した、城山遺跡第64地点の調査成果をまとめたものである。今回の調査では、古墳時代中・後期の遺構・遺物が多く検出された。そのため、ここでは古墳時代中・後期の遺構・遺物について調査所見をまとめることにする。

第1節 古墳時代中・後期の住居跡について

(1) 住居跡の分布状況

今回の調査で検出された古墳時代中・後期の住居跡は、246・255～259 Hの6軒である。

住居跡の検出状況としては、調査面積100㎡足らずの狭小な範囲で、住居跡の重複が著しく、確認調査の際には、トレンチ内のすべてに遺構の覆土が広がっており、調査前から遺構の切り合い関係を把握することが困難であると予想されていた。

調査の結果、住居跡は単独に存在するものはなく、すべて切り合い関係が存在することが判明した。切り合い関係をもつ住居跡は246 H－257 Hの2軒、255 H－256 H－259 Hの3軒、256 H－255 H－257 H－258 H－259 Hの5軒である。新旧関係は以下のとおりである。

- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| ① 246 H → 257 H | ② 259 H → 256 H → 255 H |
| ③ 259 H → 256 H → 257 H | ④ 258 H → 256 H |

(旧 → 新)

第2節 古墳時代中・後期の土師器の様相について

(1) 土師器の変遷について

ここでは、前節で判明した住居跡の新旧関係を基準とし、今回の古墳時代中・後期の住居跡6軒から出土した土師器について、志木市の土師器編年(尾形 2000・2001)を参考に1～5期に区分し、器種毎にその特徴と変遷を見ていくことにする。

実年代の比定については、1期－5世紀中葉、2期－5世紀後葉、3期－6世紀初頭、4期－7世紀中葉(古段階)、5期－7世紀中葉(新段階)である(註1)。なお、4・5期と区分した土器群については、通常7世紀中葉と比定することでまとめているが、今回は、4期の256 Hと5期の255 H・257 Hに新旧関係があるため、古・新段階というように区分することで、今後の当地での土器編年の再編する上で貴重な資料と成り得るものである。

1期(5世紀中葉)－246号住居跡

器種構成は、①坏・②高坏・③埴・⑤壺・⑦甕形土器(以下、「形土器」を省略。)である(第8図)。

本住居跡から出土した資料は、すでに隣接する第62地点において、大部分が報告されているが、土師器全体の特徴をまとめると、坏は1が須恵器坏蓋の模倣坏が出現しているが、全体には赤色系の深身の塊タイプが主体で、底部はまだ丸底が出現しておらず、平底や碁笥底を基本とする。

高杯はすべて有段タイプで、坏部の口縁部の途中と下端及び脚台部裾部に有段をもつものである。口縁部と裾部は大きく外反するのが特徴である。調整技法としては、ヘラ磨き調整は顕著ではなく、ハケ目調整後にナデ調整が施されている。坏・坩に多用されるが、内外面に暗文が施文されている。

壺・甕については、複合口縁を有する14や赤色された10～13であれば、壺として扱うことができるが、この時期の甕は「く」の字口縁や球胴を特徴とするため、無彩土器である場合では区分が難しい。

2期（5世紀後葉）－259号住居跡

出土土器は少なく、実測個体は坩1点で、その他は小破片であった（第33図・図版19-2）。

①坩形土器

1は口縁部を欠損するが、体部が算盤玉状で、底部が碁笥底を呈するものである。志木市では5世紀後葉から末葉にかけて存在するものと考えられる。城山遺跡では、第1地点11号住居跡（佐々木・尾形 1988）、第62地点239号住居跡（尾形・徳留・深井・青木 2012）から同様な坩が出土している。

②坏形土器

2はいわゆる比企型坏の初源段階（尾形 1999）のものある。胎土は暗赤褐色の胎土をもつことから、人間系土師器（尾形 2008）に該当する。3は塊タイプのもので、内外面赤彩が施される。

③高坏形土器

4は脚台部の裾部破片であるが、内外面に赤彩が施されることから、有段高坏と考えられる。志木市では、市内最古（5世紀中葉）のカマドをもつ住居跡である、中道遺跡第37地点19号住居跡（佐々木・尾形 1997）、城山遺跡第62地点251号住居跡（尾形・徳留・深井・青木 2011）から出土している。このタイプは、現時点では、5世紀中葉・後葉に限定できるものと考えられる。

3期（6世紀初頭）－258号住居跡

器種構成は、①坏・②高坏・③甕である（第31図）。この段階は、いわゆる比企型坏、有段坏（註2）などといった特徴ある土器群が、5世紀末葉に本格的生産を開始することから、市内出土の坏・高坏などといった小型製品は広域流通品が主体であると考えられる。

①坏形土器

赤色・黒色・無彩系土器（以下「土器」を省略する。）に分けることができるが、赤色系では、1・2の有段坏と3の塊タイプに、黒色系では4・5が有段坏、無彩系では、平底タイプに細分することができる。1はいわゆる須恵器坏蓋の模倣坏であるが、暗赤褐色の胎土を基調とすることから、人間系土師器と考えられる。2は塊と有段坏が折衷したタイプと言えるかもしれない。3の塊タイプは口径12.2cmで、口縁部が短く外反していることから、初源段階の比企型坏の可能性はある。

4・5は外面にはヘラ磨き調整が施され、内面には放射状の暗文が施文されることから、北関東方面からの搬入品と考えられる。6の無彩系は外面に指頭押捺による成形痕が残り、胎土には砂粒をやや多く、黄褐色粒子・石英・金雲母子を僅かに含むことから、在地系と思われる。

②高坏形土器

5世紀代のものに比べ、脚台部の短脚化が進む傾向にある。坏部は7が有段坏タイプと8が底部に段をもつタイプがある。7は暗赤褐色の胎土を基調とすることから、入間系土師器と考えられる。

③甕形土器

10の1点のみの出土であるが、口縁部は「く」の字口縁が崩れていない。

4期（7世紀中葉古段階）－256号住居跡

住居内全体から多くの遺物が出土した。土器はすべて土師器で、実測個体数は73点であった。器種構成は、①坏・②鉢・③甕・④甑である（第17～24図）。志木市においては、7世紀以降、6世紀から継承する製品の出土は減少し、代わって在地系土師器（尾形 2005・2006）が主体となる。

①坏形土器

赤色・黒色系・無彩系に分けることができるが、6世紀代と大きく変化するのは黒色系である。前段階までの黒色系は、基本的に北関東方面からの搬入品であったが、この段階では、胎土や製作技術の共通点から、在地系土師器に属するものと考えられる。さらに、4～8のように内面に放射状の暗文が施されることから在地系土師器の生産者が積極的に黒色系を生産しようとしていたことが理解できる。そして、いわゆる比企型坏（1・2）が弱体ながら出土しているのも志木市における特徴と言える。いずれも口径12.5cmほどの小型化傾向にあることが理解できる。

無彩系は有段タイプ（13～16）、有稜タイプ（17～22）、粗雑品（23）に分けることができる。また、この無彩系は、黒彩と判別しづらいため、まだ多分に黒色系が含まれる可能性がある。

②鉢形土器

大きく小型・中型・大型品に分けることができる。小型品には24～26のように長甕の胴部下半から底部の器形をした、一見長甕の作りかけのような土器がある。中型品には27・28はやや口縁部が内湾する鉢タイプがある。大型品には29のような偏平な浅鉢タイプ、30の鉢タイプがある。

③甕形土器

志木市では7世紀以降、甕は長甕（31～47）と丸甕（48～64）に明確に分類することができる。

この段階の長甕の特徴は、すでに長胴化が完成しており、胴部下半のスリム化も進んでいる。胴部の器形では、32・35のように胴部上半が発達し膨らみをもつタイプが見られる。また、36～39の口唇部は特徴的で、水平口縁のように平坦面をもち沈線がまわるタイプも存在する。最大径はまだ大きく口径が胴部を上回るものは少なく、口縁部と胴部のほぼ同位置に最大径をもつものが主流と言える。

丸甕については、通常、小型・中型・大型品に分けることができるが、63のような超大型品が出土していることに注目したい。市内最大の丸甕と言える。また、48の外面胴部から底部には、縄目状の圧痕や棒状の直線的な圧痕が観察できるが、出荷の際に土器を縛るために付いた痕跡であるかもしれない。

④甑形土器

中型・大型品に分かれるが、67のような大型品が志木市での基本タイプである。65・66のやや寸胴で幅広いタイプは、この段階では一般的になる。中型の69・70の口唇部は前述した長甕で、平坦面をもち沈線がまわるタイプと同じ作りである。また、68は特異なもので、全体に底部から口縁部に開きバケツ状の器形を呈する、多孔式タイプである。

5期（7世紀中葉新段階）－255・257号住居跡

器種構成は、①坏・②高坏・⑤鉢・⑥甑・⑦甕である（第11・28・29図）。今回の7世紀中葉新段階という設定は、初めての試案であるが、土器の細かな変化を見てみることにしたい。

①坏形土器

この段階では、4期で多く出土していた黒色系がやや減少傾向にあると思われる。いわゆる比企型坏は水口由紀子氏が「B系列」と呼称した須恵器坏蓋模倣のタイプ（水口 1989）が主体を占める。この段階においても土師器の主体は在地系土師器であることには変化はない。

在地系土師器は、黒色系と無彩系に分けることができる。器形は255 H－4が大きく開く口縁部をもち、やや特異なタイプであるが、主体は有段タイプであろう。また、特筆すべき土器としては、257 H－12がある。この土器は内面に渦巻き状の痕跡を残し、底部外面にはヘラ削りが施されるが、中央付近にはヘラ削りにより消去されなかった静止糸切り痕と考えられる痕跡が残るものである。おそらく回転台あるいはロクロ成形を用いて製作されたと考えられる根拠を示す貴重な資料と言えるであろう。

②高坏形土器

255 H－12・257 H－19があるが、257 H－20は混入品と考えられる。前者は在地系土師器で、無彩系の短脚タイプである。このタイプの土器は、7世紀に入り突如出現するものであり、5・6世紀の高坏とは異なった特別の用途のために製作されたものではないかと想像される。

⑤鉢形土器

257 H－18は有段坏の大型品のような器形をしている。市内でも珍しいタイプである。

⑥甑形土器

255 H－16の1点が出土している。寸胴で幅広いタイプで、口縁部がやや長くなり、大きく外反する。

⑦甕形土器

甑・甕ともに前段階と大きな変化はないものであるが、長甕は胴部の特に上半でのスリム化と長胴化が進み、器高も高くなっている傾向がある。全形を知ることができる、256 H－31～35と255 H－13～15の土器を比べると、前者の256 H－31・32はそれぞれ高さ32.4 cm・32.9 cmで胴部上半に膨らみをもち、最も器高の高い35は36.9 cmであるが、これについても全体に横幅があるように思われる。それに比べ、後者の255 H－13・14・15はそれぞれ、高さ35.2 cm・35.4 cm・37.2 cmと最低でも器高35 cmより高く、胴部のスリム化が見て取れるであろう。

（2）ロクロ成形の土師器について

須恵器の製作では、普遍的に用いられるロクロであるが、古墳時代後期ではその製作技術は当然、工人レベルでは知られていたと考えられるが、土師器の製作においては、一貫してその技術はあまり使用されていないものと推測される。

しかし、土師器でも回転台あるいはロクロが全く使用されなかったわけではなく、群馬県三ツ寺I遺跡（下城他 1988）では、西濠に一括廃棄された土器のうち、回転ヘラ削りやカキ目が施される須恵器製作技法をもつ酸化炎焼成の高杯が出土している。時期は5世紀後葉に比定される。

また、7世紀後葉以降では、落合型坏・盤状坏などの国別タイプ（河野 1983）の土師器にも回転台ないしロクロ技法は取り入れられていることは広く知られている。志木市でも7世紀末葉の続比企型

坏の内面にも渦巻き状の成形痕が残ることから、回転台あるいはロクロの使用があったのではないかと考えられている（尾形 2008）。

今回の257 H-12の例は、時期的には7世紀末葉より古い7世紀中葉新段階に比定され、さらに在地系土師器ということで、市内では初めての検出例になった。しかし、これにより、在地系土師器の生産者が回転台あるいはロクロという最先端の技術を知っていたと証明することはできたとしても逆にその技術を積極的に導入しなかったと結論付けるものと思われる。こうした状況は、土師器全体でも言えることであるが、なぜその技術を知りながらも積極的に導入しなかったのかという問題提起にもつながるものであろう。今後は在地系土師器についてももう一度原点に戻って、その生産者がもつ技術面について見直す必要があるものと痛感する。

[註]

- 註1 本書での古墳時代中・後期の時期区分については、1世紀を5区分し、それぞれ初頭・前葉・中葉・後葉・末葉と表記することにした。
- 註2 ここで扱う“有段坏”とは、口縁部と底部あるいは体部との境に明瞭な段をもつ土師器坏の総称である。

[引用・参考文献]

- 尾形則敏 1999「いわゆる「比企型坏」の編年基準の要点」『あらかわ』第2号 あらかわ考古談話会
- 2000「志木市における古墳時代の土師器の編年（1）－5世紀から7世紀の坏形土器の変遷－」『あらかわ』第3号 あらかわ考古談話会
- 2001「志木市における古墳時代の土師器の編年（2）－5世紀から7世紀の甑・甕形土器の変遷－」『あらかわ』第4号 あらかわ考古談話会
- 2005「第4章 まとめ」『城山遺跡第42地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第10集
- 2006「七世紀における「在地系土師器」の出現と歴史的意義－武蔵野台地北西部の無彩系・黒色系土師器の一事例－」『埼玉考古Ⅱ』埼玉考古学会
- 2008「古墳時代後期の土師器研究の再認識－（仮称）「人間系土師器」の実態と生産地推定を例として－」『埼玉考古43』埼玉考古学会
- 尾形則敏・徳留 彰紀・深井恵子・青木 修 2012『城山遺跡第62地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第48集 埼玉県志木市教育委員会
- 河野喜映 1983「集落址出土土器の編年と背景」『神奈川考古』第14号 神奈川考古学会
- 佐々木保俊・尾形則敏 1988『城山遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会第4集 埼玉県志木市遺跡調査会
- 1997『志木市遺跡群Ⅷ』志木市の文化財第25集 埼玉県志木市教育委員会
- 下城 正他 1988『三ツ寺Ⅰ遺』群馬県教育委員会（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 東日本旅客鉄道株式会社
- 水口由紀子 1989「いわゆる“比企型坏”の再検討」『東京考古』第7号

[付 編]

自然 科学 分析

I. 城山遺跡第64地点から出土した炭化種実

佐々木由香・バンダリ スダルシャン (パレオ・ラボ)

1. はじめに

志木市柏町に位置する城山遺跡は、柳瀬川右岸の台地上に立地し、旧石器時代から中世・近世にかけての複合遺跡である。ここでは第64地点で検出された古墳時代後期の竪穴住居跡から回収された炭化種実の同定を行い、当時の利用植物について検討した。

2. 試料と方法

試料は第64地点の255号住居跡出土の土器内（第11図16）に堆積した土壌から回収された炭化物1袋と、256号住居跡出土の土器内（第17図27・第20図48）に堆積した土壌から回収された炭化物3袋、同住居跡から現地で取り上げられた炭化種実（種1～8）の8点である。遺構の時期は、今回の報告において、255号住居跡が7世紀中葉新段階で、256号住居跡が7世紀中葉古段階である。

土壌の回収と水洗は志木市教育委員会によって行われた。土壌は1.0mm目の篩を用いて水洗選別された。水洗量は不明である。抽出・同定・計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。試料は志木市教育委員会に保管されている。

3. 結果

同定の結果、木本植物のオニグルミ炭化核とモモ炭化核、ウメ炭化核、スモモ炭化核の4分類群と、草本植物のイネ炭化種子とコムギ炭化種子の2分類群の計6分類群が同定された（第18・19表）。この他に、同定の識別点を欠く同定不能炭化種実が見いだされた。種実以外には炭化した芽が得られた。

以下に、遺構ごとの炭化種実出土傾向を記載する（同定不能炭化種実と不明炭化芽は除く）。

255号住居跡：イネ種子完形1点、コムギ種子完形1点と破片1点が得られた。

256号住居跡：オニグルミ核が復元個体数で1個未満、モモ核が完形をあわせた復元個体数で3～4点、ウメ核が完形をあわせた復元個体数で2～3点、スモモ核完形1点が得られた。なお、土壌を水洗した3袋からは炭化種実は得られなかった。

分類群	時 期 部 位 / 遺構名	古墳時代後期	
		255号住居跡	256号住居跡
オニグルミ	炭化核		(1) <1*
モモ	炭化核	1	(3) 2～3*
ウメ	炭化核	1	(1) 1～2*
スモモ	炭化核	1	
イネ	炭化種子	1	
コムギ	炭化種子	1 (1)	
同定不能	炭化種実	(3)	
不明	炭化芽		1

*は破片の完形個体換算数

(括弧は破片)

第18表 城山遺跡第64地点から出土した炭化種実

次に、産出した分類群の炭化種実の記載と図版を掲載し、同定の根拠とする。

(1) オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sieboldiana* (Maxim.) Makino 炭化核 クルミ科

破片である。完形ならば側面観は広卵形。表面に縦方向の縫合線があり、浅い溝と凹凸が不規則に入る。壁は緻密で硬く、ときどき空隙がある。断面は角が尖るものが多い。残存長19.4mm、残存幅8.0mm。

(2) モモ *Amygdalus persica* L. 炭化核 バラ科

上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形で先が尖る。下端に大きな着点がある。表面に不規則な深い皺がある。また片側側面には縫合線に沿って深い溝が入る。長さ16.6mm、幅12.6mm、厚さ10.5mm。

(3) ウメ *Armeniaca mume* (Siebold et Zucc.) de Vriese 炭化核 バラ科

上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形。表面全体に不規則な点状の凹孔がある。下端はやや突出し、着点は凹む。一方の側面に縫合線をもつ稜がある。計測可能な4点の炭化核の大きさは長さ12.6mm、幅10.4mm、厚さ7.2mm。

(4) スモモ *Prunus salicina* Lindl. 炭化核 バラ科

上面観はやや扁平な両凸レンズ形、側面観は紡錘形。両側に縫合線があり、浅い溝が入る。表面は平滑。長さ12.1mm、幅10.4mm、厚さ7.2mm。

(5) イネ *Oryza sativa* L. 炭化種子 イネ科

上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形。一端に胚が脱落した凹みがあり、両面に縦方向の2本の浅い溝がある。長さ4.2mm、幅2.3mm。

(6) コムギ (パンコムギ) *Triticum aestivum* L. 炭化種子 イネ科

上面観・側面観共に楕円形。腹面中央部には、上下に走る1本の溝がある。背面の下端中央部には、扇形の胚がある。オオムギに比べて長さが短く、幅に対して厚みがあるため、全体的に丸っこい傾向がある。断面形状は腹面側が窪み、背面側が円形となる (Jacometほか 2006)。またコムギの場合、側面観で最も背の高い部分 (幅の広い部分) が基部付近に来る。コムギ属にはパンコムギやマカロニコムギなど複数種あるが、一般的に日本産コムギと呼称しているものはパンコムギである。ここでは一般的な呼称で記載した。長さ3.5mm、幅2.9mm、厚さ2.2mm。

4. 考察

第64地点の古墳時代後期の255号・256号住居跡からは、栽培植物で果樹のモモとウメ、スモモ、水田作物のイネ、畑作物のコムギ、野生植物のオニグルミが得られた。255号住居跡の試料は土器内の土壌を水洗しており、イネとコムギが得られた。産出した部位は食用となる種子であったため調理後の残渣の可能性はあるが、出土した土器との関係は不明であった。

城山遺跡では、これまでに複数地点で炭化種実同定が行われ、古墳時代後期の住居跡では第42地点の135号住居跡と146号住居跡の覆土からイネ、136号住居跡の覆土からイネとマメ科などが得られている (藤根ほか 2005)。第59地点の167号住居跡の覆土からは、コムギとイネのほか、アワやブドウ属、ニフトコなど、第62①地点の238号住居跡 (6世紀後葉) からはモモとスモモ、第62⑦地点の236号住居跡 (7世紀中葉) からはモモが得られている (佐々木・バンダリ 2011)。第62⑩地点の275号住居跡 (7世紀中葉) から出土した土器内からは、コムギが得られた (佐々木・バンダリ 印刷中)。今回の同定の結果、新たに第64地点の住居跡でもイネやコムギ、モモ、スモモが利用されていたことが、また城山遺跡の古墳時代後期では新たにウメが利用されていたことが明らかとなった。今

種No.	分類群	部位	産出数
種1	ウメ	炭化核	1
種2	モモ	炭化核	1
種3	ウメ	炭化核	(1)
種4	モモ	炭化核	(1)
種5	モモ	炭化核	(2)
種6	オニグルミ	炭化核	(1)
種7	スモモ	炭化核	1
種8	不明	炭化芽	1

(括弧は破片)

第19表 256号住居跡から出土した炭化種実一覧

後、焼失住居跡の場合は床面全面や、焼失住居跡でない住居跡の場合は炭化種実が産出しやすいカマド内および周辺の土壌を水洗するなど、量的な解析をすることにより、同時期の利用植物の組成が明らかになると期待される。

[引用文献]

- 藤根 久・鈴木 茂・新山雅弘・植田弥生 2005「土坑内土壌の微細物分析・炭化物同定」『城山遺跡第42地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第10集 埼玉県志木市遺跡調査会
- Jacomet, S. and collaborators Archaeobotany Lab. 2006『Identification of cereal remains from archaeological sites』2nd edition IPAS Basel Univ.
- 佐々木由香・バンダリ スダルシャン 2011「城山遺跡から出土した炭化種実」『志木市遺跡群19』志木市の文化財第45集 埼玉県志木市教育委員会

Ⅱ. 城山遺跡第64地点出土炭化材の樹種同定

小林克也 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

城山遺跡は志木市柏町3丁目に所在し、柳瀬川右岸の台地上に立地する、旧石器時代から中・近世の複合遺跡である。第64地点では古墳時代後期の住居跡が検出され、住居跡内からは炭化材が出土した。ここではこれらの出土炭化材の樹種同定を行なった。

2. 試料と方法

試料は、7世紀中葉古段階の256号住居跡から8点、7世紀中葉新段階の257号住居跡から11点の、計19点の出土炭化材である。各試料について、残存半径と残存年輪数の記録を行なった。残存半径は試料で残存している半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を計測した。

炭化材の樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柾目)について割断面を作製し、整形してカーボンテープで試料台に固定した。その後イオンスパッタにて金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡(KEYENCE社製 VE-9800)にて検鏡および写真撮影を行なった。なお同定試料の残りは、志木市遺跡調査会に保管されている。

3. 結果

同定の結果、広葉樹のコナラ属クヌギ節(以下クヌギ節と呼ぶ)とコナラ属コナラ節(以下コナラ節と呼ぶ)の2分類群が産出した。クヌギ節が12点、コナラ節が7点であった。年輪計測の結果では、残存半径3.7cm内に22年輪がみられた256号住居跡の試料No.3のコナラ節や、残存半径2.8cm内に17年輪がみられた257号住居跡の試料No.15のクヌギ節のように、クヌギ節とコナラ節共に残存半径に対して年輪数が多く、年輪幅が狭い試料が多くみられた。同定結果を第20表に、一覧を第21表に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、各樹種の走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 図版22 1a-1c (No.9)・2a (No.11)・3a (No.13)・4a (No.14)

年輪のはじめに大型の道管が1~2列並び、晩材部では急に径を減じた厚壁で丸い道管が単独で放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと同放射組織がみられる。

コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で切削などの加工はやや困難である。

樹種/遺構	256号住居跡	257号住居跡	合計
コナラ属クヌギ節	1	11	12
コナラ属コナラ節	7		7
合計	8	11	19

第20表 城山遺跡第64地点出土炭化材の樹種同定結果

(2) コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 図版22 5a-5c (No.1)

年輪のはじめに大型の道管が1～2列並び、晩材部では急に径を減じた薄壁で角張った道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと同放射組織がみられる。

コナラ属コナラ節にはコナラやミズナラなどがあり、温帯から暖帯にかけて広く分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なコナラの材は、やや重く強靱で切削加工はやや難しい。

4. 考察

7世紀中葉古段階の256号住居跡では、コナラ節が7点とクヌギ節が1点、7世紀中葉新段階の257号住居跡ではクヌギ節が11点産出した。257号住居跡のクヌギ節1点は貯蔵穴から産出しており、燃料材の残渣などの可能性が考えられるが、その他の試料はいずれも建築材であると考えられる。クヌギ節とコナラ節はともに重硬かつ強靱で、割裂性が良いという材質を持つ樹種であり、武蔵野台地の弥生時代～古代にかけての竪穴住居跡の建築材では、普通に用いられている。今回分析を行なった住居跡でも、建築材には強度を重視した用材選択が行なわれ、クヌギ節とコナラ節が多く利用されていたと考えられる。また年輪幅の計測では、共に年輪幅の比較的狭い材が多くみられた。

城山遺跡では第59地点においても5世紀末～9世紀後葉の住居跡6軒で出土した炭化材の樹種同定と年輪幅の計測が行われている。今回の257号住居跡と同じ7世紀中葉の167号住居跡ではコナラ節が8点みられ、年輪計測の結果でも年輪幅の狭い試料が多くみられた(小林 2011)。

試料No.	出土遺構	遺物名	種類	樹種	残存半径(cm)	残存年輪数	備考	時期
1	256号 住居跡	炭1	建築材	コナラ属コナラ節	2.3	24		古墳時代後期 (7世紀中葉 古段階)
2		炭2	建築材	コナラ属クヌギ節	1.1	3		
3		炭3	建築材	コナラ属コナラ節	3.7	32		
4		炭4	建築材	コナラ属コナラ節	2.1	27		
5		炭5	建築材	コナラ属コナラ節	2.4	24		
6		炭6	建築材	コナラ属コナラ節	3.4	29		
7		炭7	建築材	コナラ属コナラ節	3.7	21		
8		炭8	建築材	コナラ属コナラ節	3.4	19		
9	257号 住居跡	炭1	建築材	コナラ属クヌギ節	4.9	30		古墳時代後期 (7世紀中葉 新段階)
10		炭2	建築材	コナラ属クヌギ節	1.6	9		
11		炭3	建築材	コナラ属クヌギ節	2.8	24		
12		炭4	建築材	コナラ属クヌギ節	0.6	3		
13		炭5	建築材	コナラ属クヌギ節	5.1	24		
14		炭6	建築材	コナラ属クヌギ節	1.8	19		
15		炭7	建築材	コナラ属クヌギ節	2.8	17		
16		炭8	建築材	コナラ属クヌギ節	1.2	9		
17		炭9	建築材	コナラ属クヌギ節	1.7	10		
18		炭10	建築材	コナラ属クヌギ節	0.6	6		
19		炭11	燃料材?	コナラ属クヌギ節	1.2	8	貯蔵穴	

第21表 城山遺跡第64地点出土炭化材の樹種同定結果一覧

第64地点の今回の2軒の住居跡と第59地点の167号住居跡の出土炭化材は、樹種構成の点でも年輪幅が詰まっている点でも同様の傾向を示していた。一般的に、植生環境の観点では年輪の詰まった材は成長が悪く、年輪幅の広い材は成長の良い樹木であると考えられる。また木材としてみた場合、年輪の詰まった材は年輪幅の広い樹木に対して耐朽性や強度が落ちるといわれている（浅野 1982）。城山遺跡の7世紀前葉と中葉の住居跡で年輪幅の詰まった材が多くみられたのは、遺跡周辺に成長の悪い樹木が多く分布し、それら耐朽性などが劣る木材を建築材として多く利用していたためと考えられる。

[引用文献]

浅野猪久夫 1982『木材の事典』朝倉書店

小林克也 2011「城山遺跡から出土した炭化材の樹種同定」『志木市遺跡群19』志木市の文化財第45集 埼玉県志木市教育委員会

版 圖



1. 調査区近景



2. 表土剥ぎ風景



3. 調査区整備風景



4. 810号土坑



5. 246号住居跡



6. 246号住居跡



7. 246号住居跡被熱赤化範囲



8. 246号住居跡 (第62地点)



1. 255号住居跡遺物出土状態



2. 255号住居跡遺物出土状態



3. 255号住居跡遺物出土状態



4. 255号住居跡貯蔵穴遺物出土状態



5. 255号住居跡カマド付近



6. 255号住居跡貯蔵穴



7. 255号住居跡カマド



8. 255号住居跡



1. 256号住居跡遺物出土状態（上層）



2. 256号住居跡遺物出土状態（上層）



3. 256号住居跡遺物出土状態



4. 256号住居跡遺物出土状態



5. 256号住居跡遺物出土状態



6. 256号住居跡貯蔵穴付近遺物出土状態



7. 256号住居跡炭化材出土状態



8. 256号住居跡貯蔵穴遺物出土状態



1. 256号住居跡貯藏穴



2. 256号住居跡入口梯子穴



3. 256号住居跡



4. 256号住居跡



5. 257号住居跡遺物出土状態



6. 257号住居跡遺物出土状態



7. 257号住居跡炭化材出土状態



8. 257号住居跡貯藏穴遺物出土状態



1. 257号住居跡入口梯子穴



2. 257号住居跡貯藏穴



3. 257号住居跡



4. 257号住居跡



5. 258号住居跡遺物出土状態



6. 258号住居跡遺物出土状態



7. 258号住居跡貯藏穴遺物出土状態



8. 258号住居跡



1. 259号住居跡



2. 259号住居跡



3. 調査風景



4. 調査風景



5. 698号土坑



6. 701号土坑



7. 699号土坑



8. 700号土坑



246号住居跡出土遺物



255号住居跡出土遺物



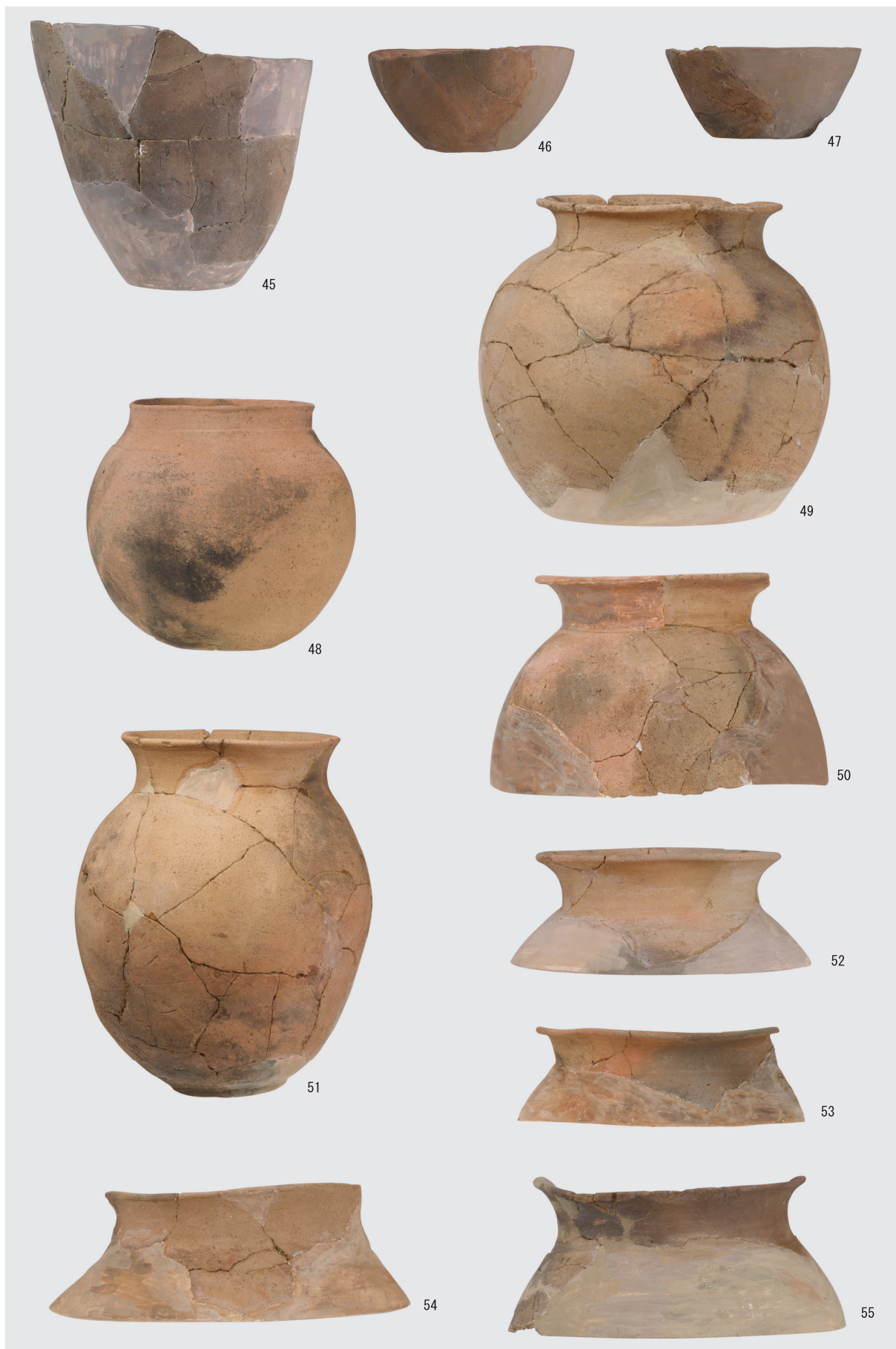
256号住居跡出土遺物 1



256号住居跡出土遺物2



256号住居跡出土遺物 3



256号住居跡出土遺物 4



256号住居跡出土遺物 5



256号住居跡出土遺物6



256号住居跡出土遺物 7



256号住居跡出土遺物 8



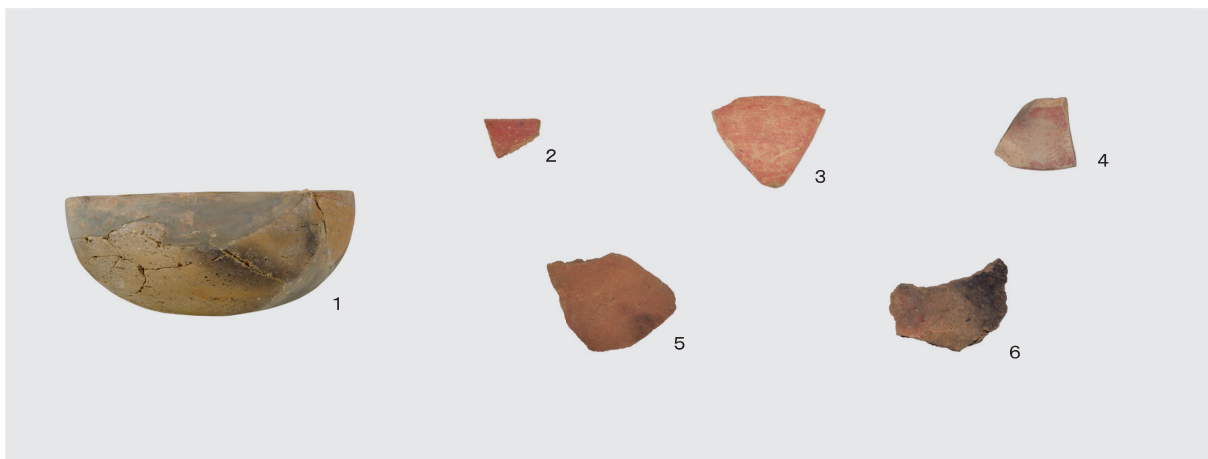
257号住居跡出土遺物 1



257号住居跡出土遺物2



1. 258号住居跡出土遺物



2. 259号住居跡出土遺物



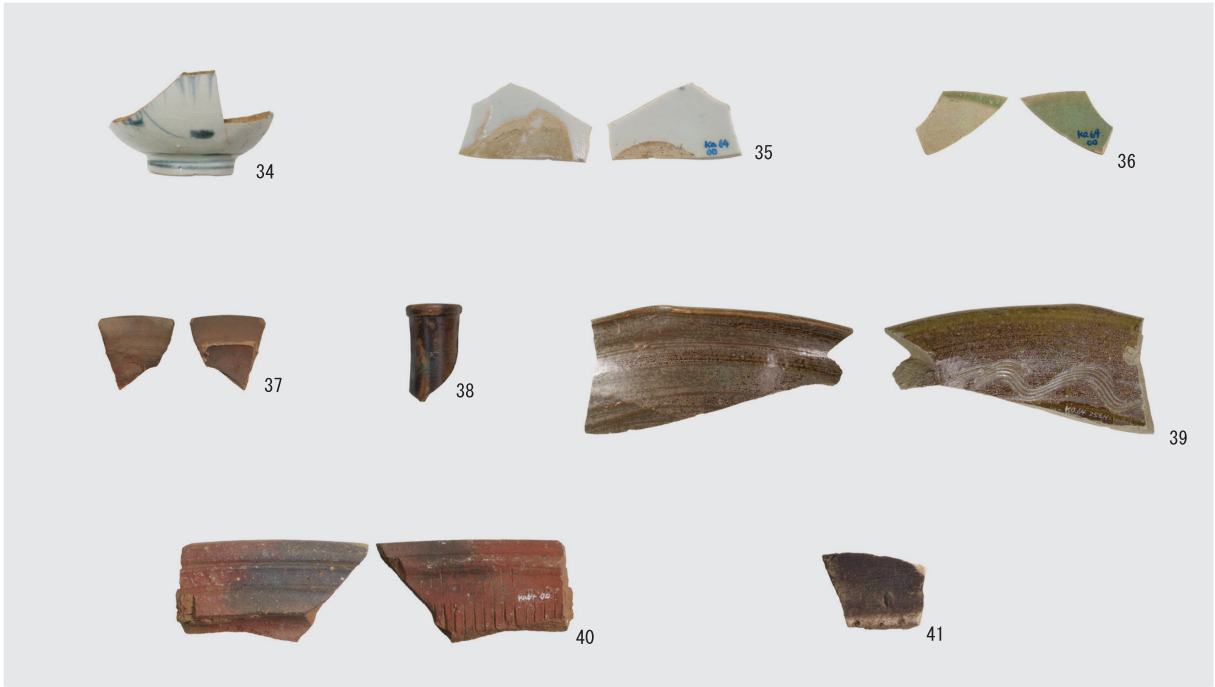
3. 698号土坑出土遺物



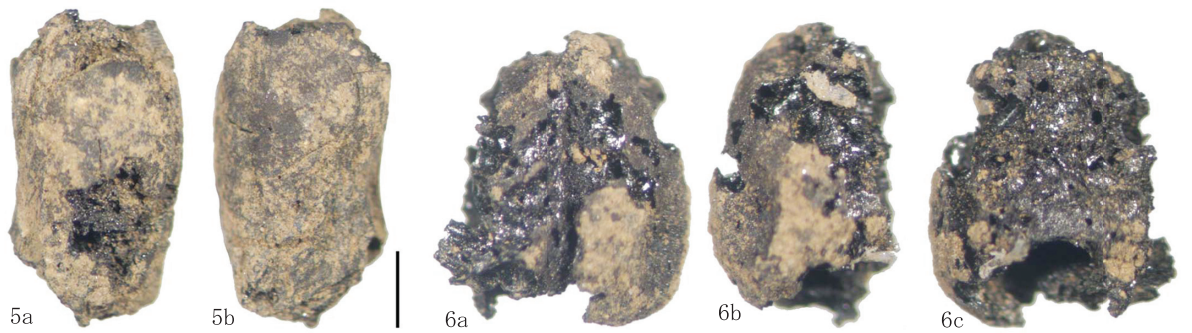
4. 701号土坑出土遺物



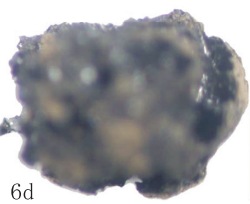
遺構外出土遺物 1



1. 遺構外出土遺物 2

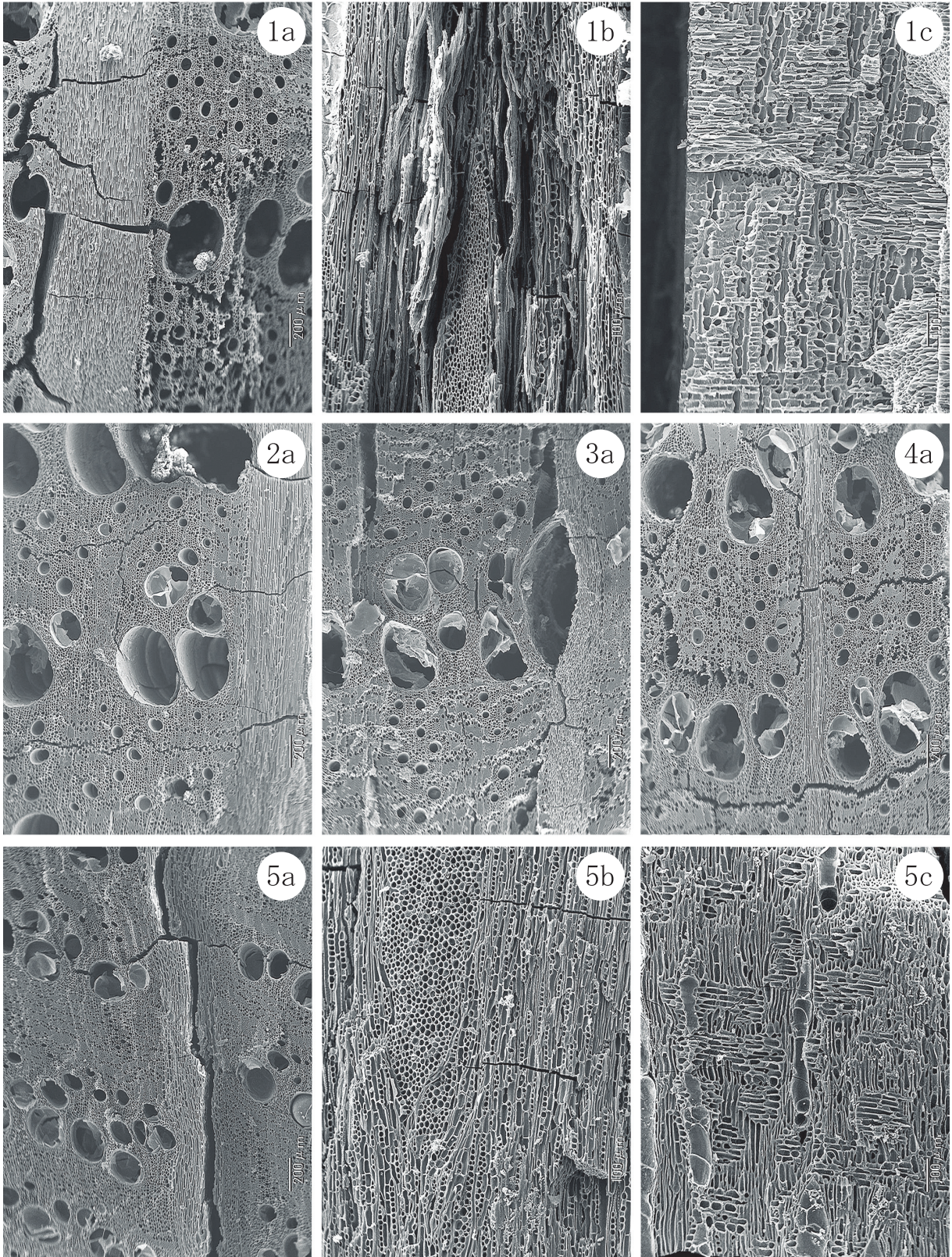


スケール 1-4:5mm,5,6:1mm



1. オニグルミ炭化核 (256号住居跡、種 6)、2. モモ炭化核 (256号住居跡、種 2)、3. ウメ炭化核 (256号住居跡、種 1)、4. スモモ炭化核 (256号住居跡、種 7)、5. イネ炭化種子 (255号住居跡、No.174)、6. コムギ炭化種子 (255号住居跡、No.174)

2. 城山遺跡第64地点から出土した炭化種実



1a-1c. コナラ属クヌギ節(No. 9) 2a. コナラ属クヌギ節(No. 11) 3a. コナラ属クヌギ節(No. 13) 4a. コナラ属クヌギ節(No. 14) 5a-5c. コナラ属コナラ節(No. 1)
a: 横断面・b: 接線断面・c: 放射断面

報 告 書 抄 録

ふりがな	しろやまいせきだい64ちてん まいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこくしょ							
書名	城山遺跡第64地点 埋蔵文化財発掘調査報告書							
副書名								
シリーズ名	志木市の文化財							
シリーズ番号	第53集							
著者氏名	尾形則敏 深井恵子 青木 修							
編集機関	埼玉県志木市教育委員会							
所在地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号 TEL 048 (473) 1111							
発行年月日	平成25 (2013) 年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村 遺跡番号		北 緯 (° ' ")	東 経 (° ' ")	調査期間	発掘調査面積	調査原因
しろやまいせき 城山遺跡 (第64地点)	しきしかしわちょう 志木市柏町 3丁目2665-1・ 2、9の一部	11228	09-003	35° 49' 50"	139° 34' 12"	20100222 ～ 20100330	79.00㎡	分譲住宅建設 に先立つ道路 新設工事
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
しろやまいせき 城山遺跡 (第64地点)	集落・ 城館跡	縄文時代 古墳時代中・後期 平安時代 中世以降 遺構外出土遺物	土坑 住居跡 土坑 土坑	1基 6軒 2基 2基	土師器・須恵器・土製 品・石製品・鉄製品など 土師器・須恵器小破片 縄文時代の石器・土器、 古墳時代後期の土器、中 世以降の陶磁器・土器		古墳時代後期 の256Hは、 焼失住居跡と 考えられ、多 くの土器が出 土した。	
要 約								
<p>城山遺跡は、旧石器時代～近世・近代にかけての複合遺跡である。今回発掘調査を実施した第64地点からは、縄文時代の土坑1基、古墳時代中・後期の住居跡6軒、平安時代の土坑2基、中世以降の土坑2基などが検出された。</p> <p>縄文時代の遺構では、土坑1基が検出されているが、時期については、遺物が出土しなかったため、比定できなかった。</p> <p>古墳時代中・後期の住居跡6軒については、狭小な面積でありながら、密集し重複して検出されている。住居跡の時期は、出土土器の特徴から、5世紀中葉～7世紀中葉に位置付けられる。特に、7世紀中葉に比定される256Hは、焼失住居と考えられ、多くの土器が出土している。また、7世紀中葉に比定される255・256・257Hについては、住居の切り合い関係から、255Hと257Hが256Hを切っていることが確認できたため、256Hは7世紀中葉古段階に、255・257Hは7世紀中葉新段階として区分することができ、近接した時期での土器様相の変化を捉える上で重要な資料となった。</p> <p>平安時代と中世以降では、土坑2基ずつが検出されているが、性格等については、不明である。</p>								

志木市の文化財 第53集

城山遺跡第64地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 埼玉県志木市教育委員会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号
発行日 平成25(2013)年3月31日
印刷 株式会社白峰社